

令和 6 年度

知床国立公園知床エコツーリズム戦略改定及び

知床の魅力あるストーリー検討業務



令和 7（2025）年 3 月

環境省 北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所

報告書概要

1. 業務名

令和6年度知床国立公園知床エコツーリズム戦略改定及び知床の魅力あるストーリー検討業務

2. 業務の目的

知床国立公園では、原生的な自然を保全しながら観光利用を推進するため、平成24年に「知床エコツーリズム戦略」を策定した。しかし、近年の観光客の増加やニーズの多様化に対応するため、戦略の見直しが求められている。また、地域の魅力を効果的に伝えるインタープリテーション（以下、IPと略す。）全体計画を策定することで、地域への理解を深め、適正な利用を促すことが期待されている。

本業務では、知床のエコツーリズムを取り巻く近年の状況やIP全体計画の検討状況をまえ、知床エコツーリズム戦略の改定作業を進める。また、IP全体計画については、計画の主要な要素の一つとなる魅力ある知床のストーリーの検討を進めることを目的として実施した。

3. 業務実施体制

本事業は、環境省からの請負事業として公益財団法人 知床財団が実施した。

4. 業務の実施期間

令和6年(2024年)8月23日～令和7年(2025年)3月21日

5. 業務概要

1) 知床エコツーリズム戦略の改定の検討

令和5年度第2回適正利用・エコツーリズム検討会議において知床世界自然遺産地域管理計画の見直し案が了承されたことにともない、知床エコツーリズム戦略の記載事項の見直しを行った。

①見直し課題の整理

過去のエコツーリズム検討会議の会議資料及び議事録の確認、適正利用・エコツーリズム検討会議の委員や地域関係団体への聞き取りなどを行い、見直しの課題の抽出と整理を行った。

②見直しの構成案の作成

①で整理した課題を踏まえ、知床エコツーリズム戦略の見直しの要点整理を行い、見直しの構成案を作成した。作成に当たっては、適正利用・エコツーリズムワーキンググループの委員との意見交換会を2月6日に実施した。

③エコツーリズム検討会議への中間報告の資料作成

②で作成した見直し案をもとに資料作成を行い、令和 6 年度第 2 回適正利用・エコツーリズム検討会議で中間報告を行った。

2) 地域資源の価値の整理及びストーリー案の作成

①作業部会の設置・運営

地域資源の価値やストーリー案を検討するための作業部会を設けた。作業部会は IP 全体計画の詳細な事項を検討するものとし、令和 6 年度は、地域資源の価値やストーリー案の具体的な検討、ワークショップの企画・運営、ワークショップで出た意見の収集・整理などを行った。なお、作業部会は、構成員 7 名(斜里町及び羅臼町からそれぞれ 3 名、および専門家 1 名)とオブザーバー 2 名で構成した。

作業部会の開催にあたっては、日程調整、資料作成、会場手配、議事進行等を行った。作業部会は、斜里町と羅臼町内において計 5 回開催した。

第 1 回作業部会	2024 年 10 月 4 日 (ウトロ漁村センター2 階会議室)
第 2 回作業部会	2024 年 12 月 9 日 (斜里町役場 2 階大会議室)
第 3 回作業部会	2025 年 1 月 7 日 (オンライン)
第 4 回作業部会	2025 年 2 月 12 日 (斜里町立ゆめホール知床 会議室 1)
第 5 回作業部会	2025 年 3 月 4 日 (羅臼町役場 2 階庁議室)

②地域資源及び価値の整理

i .既存情報の整理及び分析

地元自治体の自然や観光に関する Web サイト、パンフレット等の資料や環境省で調査した過去の知床国立公園のエコツーリズムに関する報告書等から知床国立公園にかかる資源を抽出し、価値のカテゴリについては「自然」、「文化」、「地理・地形」「衣食住」の 4 つの分類別に整理した。

ii .資源及び地域の価値に関するワークショップの開催

知床の価値を明確化するためのワークショップを開催した。ワークショップの対象者は、当該国立公園の保全や利用に携わる関係者や国立公園内及びその周辺を生活の場としている者とし、作業部会での検討も踏まえ決定した。ワークショップは 3 会場それぞれ 3 回の計 9 回開催し、1 回あたり最大 20 名程度を参集した。意見集約をしやすいするため、連続性のあるワークショップとし、ファシリテーターを配置し効率的かつ効果的に開催した。ワークショップにおいて会場準備、資料作成、進行及びファシリテーション等、ワークショップに必要な事務や運営を行った。終了後は議事録概要を作成し、ワークショップで出された意見や結果を基に、資源や価値の整理を行った。

ワークショップの開催概要を以下に示す。

- 第1回ワークショップ(斜里会場) 2024年11月25日 斜里町総合保険福祉センター ぽると21
- 第1回ワークショップ(ウトロ会場) 2024年11月26日 斜里町漁村センター
- 第1回ワークショップ(羅臼会場) 2024年12月4日 羅臼町民体育館(らうすぼ)
- 第2回ワークショップ(斜里会場) 2024年12月18日 ゆめホール知床
- 第2回ワークショップ(ウトロ) 2024年12月17日 知床世界遺産センター
- 第2回ワークショップ(羅臼会場) 2024年12月20日 羅臼町民体育館(らうすぼ)
- 第3回ワークショップ(斜里会場) 2024年1月15日 ゆめホール知床
- 第3回ワークショップ(ウトロ) 2024年1月16日 斜里町漁村センター
- 第3回ワークショップ(羅臼会場) 2024年1月17日 羅臼町コミュニティセンター

iii.地域資源の価値を伝えるストーリー案の作成

iiで整理した知床の地域資源及び価値を踏まえ、これらを魅力的に伝えるストーリー案を作成した。ストーリー案は、遺産地域周辺を含めた地域の自然や文化・食・アクティビティ等の各資源とストーリーの価値とを結びつけ、一貫性をもってその魅力を伝える内容とした。

③価値観等の理解と共有

②で整理した資源の価値やストーリーについて、知床国立公園の地域関係者へインナーブランディングの施策を進め、次年度以降に戦略的に取り組むための計画を検討した。検討にあたっては作業部会での意見を求めながら検討を行った。

3) 来訪者分析

「令和3年度知床世界自然遺産地域における“半島一帯型”コンテンツ提供体制・計画策定検討業務報告書」で実施した携帯電話ビッグデータに基づく利用者の動線やその利用の状況について把握した。また、利用者の動向に関する既存データの収集及び観光関係者からのヒアリングも行い、その結果を、令和3年度の業務報告の内容と比較し考察を行った。その際、コロナ後の利用の変化やインバウンドの利用の変化に留意した。

4) 業務実施計画の作成及び打合せの実施

作業内容及び業務進捗の確認等のため、適宜、環境省担当官との業務打合せを計 5 回実施した。業務開始時打合せ前に業務実施計画案を作成し、環境省担当官へ提出し、打合せを行った。

第 1 回打合せ 2024 年 8 月 29 日

第 2 回打合せ 2024 年 9 月 9 日

第 3 回打合せ 2024 年 9 月 17 日

第 4 回打合せ 2024 年 11 月 15 日

第 5 回打合せ 2024 年 11 月 26 日

5) 報告書の作成

1)～4)について取りまとめ、報告書を作成した。

目次

はじめに	1
第1章 知床エコツーリズム戦略改定の検討	3
1. 見直しに関する検討経緯	3
2. 課題の整理と構成案の作成	7
3. エコツーリズム検討会議への中間報告	17
4. 今後の作業方針とスケジュール	17
第2章 地域資源の価値の整理及びストーリー案の作成	21
1. 作業部会の設置	23
2. 作業部会の運営	24
3. 地域資源および価値の整理	55
4. 地域の価値を伝えるストーリー案の作成	68
5. 既存情報の整理分析	77
6. 地域資源の価値の整理におけるまとめおよび次年度の施策	91
7. 価値観等の理解と共有	95
第3章 来訪者分析	96
1. 対象とする調査の種類と分類、定義など	96
2. 2024年における携帯電話ビッグデータから見た知床の現状	98
3. 2019年度との比較	108
第4章 業務実施計画の作成及び打ち合わせ記録	109

巻末資料

巻末資料 1-1 エコツーリズム検討会議および WG の議論経緯と課題抽出

巻末資料 1-2 エコツーリズム戦略見直しの方針と構成案

巻末資料 2-1 各回のワークショップの募集チラシ(全 3 回分)

巻末資料 2-2 各回のワークショップ開催レポート

巻末資料 2-3 第 1 回ワークショップのワークシート

巻末資料 2-4 第 1 回ワークショップキーワードのまとめ

巻末資料 2-5 第 1 回 参加者アンケートシート

巻末資料 2-6 第 2 回ワークショップ各班のまとめ

巻末資料 2-7 第 3 回ワークショップ各班のまとめ

巻末資料 2-8 リファレンスデーター一覧

巻末資料 4-1

令和6年度知床国立公園知床エコツーリズム戦略改定及び知床の魅力あるストーリー検討
業務実施計画書

巻末資料 4-2 IP 計画業務打ち合わせ記録簿

別冊付録

1. 作業部会資料(第 1 回～第 5 回)

はじめに

知床国立公園では、遺産地域の原生的な自然を保全しながら享受し、理解するための観光利用の方法や、より深く自然を楽しみ学んでもらうための取り組み等を、地域全体で推進していくことを目的に「知床エコツーリズム戦略」を平成 24 年に策定した。エコツーリズム戦略は、エコツーリズムを含む観光利用に関する基本方針であり、同戦略に基づきルール作りや新たな利用の提案が行われてきた。また、平成 30 年には知床国立公園の利用のあり方に関する懇談会において知床半島の利用イメージ(ゾーニング案)も作成された。

知床では海外からの観光客数の増加や、個人やグループによるオリジナルツアーへの転換などにより、提供するプログラムやサービスも多様なニーズに対応することが求められている。これらの動きに対応しつつ、適正利用を進めていくためには、知床の利用のあり方を地域共通の認識として、ガイドだけでなく、観光に携わる関係者に浸透させることが望ましい。

近年は、地域の魅力や価値を来訪者に伝えることを目的に策定されるインタープリテーション(IP)全体計画が全国の国立公園で作られている。IP 全体計画で議論する地域の価値やストーリーは、その地域を理解する教材となり、わかりやすく地域の人や来訪者に浸透させることによって、国立公園の適正な利用に役立つものと期待されている。

本業務は、知床のエコツーリズムを取り巻く近年の状況や IP 全体計画の検討状況を踏まえ、知床エコツーリズム戦略の改訂作業を進め、IP 全体計画については、計画の主要な要素の一つとなる魅力ある知床のストーリーを検討することを目的として実施した。

第1章 知床エコツーリズム戦略改定の検討

知床エコツーリズム戦略は、知床世界遺産地域全体の観光利用のあり方を示す包括的な戦略として2013年に策定された。また、具体的に運用するための場として適正利用・エコツーリズム検討会議（以下、エコツーリズム検討会議とする。）が設置されている。

運用開始からすでに10年以上が経過していることに加え、上位計画に相当する知床世界自然遺産地域管理計画（以下、遺産管理計画という。）の改定が予定されており、これに応じた見直しの検討が進んでいる。

本業務では、エコツーリズム戦略の改定に際し、見直しに係る検討の経緯を踏まえながら、課題の整理と構成案の作成を行う。検討結果については、エコツーリズム検討会議等の議論に供するとともに、これらの意見を踏まえながら今後の作業方針とスケジュールについてまとめた。

1. 見直しに関する検討経緯

エコツーリズム戦略の見直しに係る検討は、遺産管理計画の見直しと連動し2022年より開始されている。本件に係る適正利用・エコツーリズムワーキンググループ（以下、エコツーリズムWGとする。）とエコツーリズム検討会議における議論経緯を表1-1、表1-2にまとめた。

過年度の主要な議論ポイントは以下のようにまとめられる。

2022年度

エコツーリズム検討会議のあり方や進め方について事務局より課題が提起された。これに関連し、エコツーリズムWGとの2重構造や専門家（委員）の位置づけ、地域との関係性についても主に委員自身から意見が出された。これは、エコツーリズム検討会議において専門家が本来、地域の提案や取組みに対して助言、支援する立場であるにもかかわらず、実態としては議論を主導したり、意思決定への関与を求められたりする場面が多かったためと思われる。

また、これに関連し、エコツーリズム検討会議とエコツーリズムWG、地域連絡会議の下位部会である適正利用・エコツーリズム部会などそれぞれの位置付けと分担が複雑であり、かつ重複や漏れもあることから、これらの設置要綱や運用指針を点検し、見直すことが確認された。

併せて、遺産管理計画の見直しを契機として、エコツーリズム戦略の見直しの必要性も提起された。エコツーリズム戦略とエコツーリズム検討会議の運営について一体的に見直すこととし、具体的な改定対象としてエコツーリズム戦略と事務取扱要領、エコツーリズム検討会議設置要綱、エコツーリズム検討会議運営指針の改定に着手することを合意した。

2023年度

本格的なエコツーリズム戦略の見直しに着手。地域関係団体へのヒアリング等も実施され、結果が公表された。現行のエコツーリズム戦略の課題として、①既存ルールや制度との重複関係 ②将

来目標としての利用の全体ビジョンの不足などが、また、エコツーリズム検討会議の課題として、①提案制度の停滞 ②構成員の役割、責任の曖昧さなどがあげられた。

また、国立公園全体の新たな動向としてブランドプロミスやインタープリテーション全体計画といった取組みが紹介され、これらの要素をエコツーリズム戦略に加えた改定を行うことが提案された。

2023 年度末には、エコツーリズム戦略見直しの方針と構成案が示され、これを基に具体的な検討を進めることとした。

表 1-1 エコツーリズム戦略見直しに係る検討経緯（2022 年度）

年度	会議と議事	主な論点・意見	関連資料
2022 R4	第 1 回 エコツーリズム検討会議 議事 1：適正利用・エコツーリズム検討会議の在り方等	・ 会議の役割や位置づけを確認する必要性や提案にあたっての負担感とメリット、提案の範囲や内容、承認の方法等について、釧路自然環境事務所長より課題提起。 ・ すべてを提案制度で決め、提案者に委ねることに対する懸念や、全体のビジョンが必要との意見。また、会議の進め方や決定方法についても疑義。 ・ 専門家の役割や意思決定に加わるべきかが不明瞭。座長を委員が務めることの是非。設置要綱も古いままなので見直すべき。 ・ エコツーリズム戦略と上位計画（公園計画、遺産管理計画）との関係性が不明。一体的な見直しを行うべき。既存のルールや計画も整理の上統廃合すべき。 ・ <u>次回以降、エコツーリズム戦略見直しに向けた検討を進める。</u>	資料 1：適正利用・エコツーリズム検討会議の進め方について（釧路事務所意見） 参考資料 3：会議の進め方に関する構成員からの意見 参考資料 4：適正利用・エコツーリズム検討会議の今後の運営について（H25 年度第 2 回資料）
	第 3 回 エコツーリズム WG 議事 1：管理計画の見直しについて	・ 遺産管理計画の見直しにおいて、適正利用に関する項目の記載について協議。 ・ <u>エコツーリズム戦略を遺産管理計画の下位に位置付け、関係性を明瞭化する。</u> ・ ゾーニングの取扱い、既存の関連計画・ルールの取扱いが課題。	資料 3：適正利用に係る項目の見直し方針（案）
	第 2 回 エコツーリズム検討会議 議事 2：適正利用・エコツーリズム検討会議について	・ 前回議論を踏まえて<u>運用指針を修正</u>。併せて設置要綱の改定も必要との指摘。 ・ 個別提案と全体の利用のあり方議論の仕分けが必要。専門家の関与や役割も整理が必要。会議のスピード感にも課題。合意や意思決定に時間がかかりすぎる。 ・ エコツーリズム戦略の見直しと検討会議の運営の課題の両面をセットで検討。 ・ <u>設置要綱、事務要領、エコツーリズム戦略、運営指針などを一体的に見直す。</u>	資料 1：適正利用・エコツーリズム検討会議の今後の運営について（R5 年 1 月末時点修正案）

表 1-2 エコツーリズム戦略見直しに係る検討経緯（2023 年度）

年度	会議と議事	主な論点・意見	関連資料
2023 R5	<u>第 1 回 エコツーリズム WG</u> 議事 1: 遺産管理計画の見直し検討 議事 2: 適正利用・エコツーリズム検討会議の進め方	・エコツーリズム戦略との関係性、分担を踏まえて遺産管理計画の構成、記述を議論。 ・遺産管理計画の見直しと併せ、エコツーリズム戦略、設置要綱、運営方法を見直す。 ・<u>提案制度の趣旨は評価。ただし、停滞している現状の改善が必要。</u>利用の全体ビジョンに基づいて提案を受け入れる、アイデア段階から提案を可能にする、自然体験活動促進計画との連携などの案。対象範囲、利用のゾーニングについても検討必要。 ・<u>専門家、地域、行政機関 3 者の役割、責任分担、意思決定の関与などの整理が必要。</u>地域側の主体性、組織化、熱意にも課題あり。	資料 1: 知床世界自然遺産地域管理計画の見直し検討について 資料 3: 適正利用・エコツーリズム検討会議の進め方について（案）
	<u>第 1 回 エコツーリズム検討会議</u> 議事 5: 世界遺産管理計画とエコツーリズム戦略の見直しについて	・国立公園の<u>ブランドプロミスとインタープリテーション全体計画の枠組み</u>について共有。これらの要素をエコツーリズム戦略に盛り込みバージョンアップする方針。 ・保護と利用の好循環、自己責任と責任ある利用などの用語を実行性のある形で盛り込むべき。 ・<u>過去のルールや計画の統廃合も併せて整理すべき。</u>	資料 5-1: 国立公園のブランドプロミス 資料 5-2: 遺産管理計画見直し 資料 5-3: 知床エコツーリズム戦略の見直しについて
	<u>第 2 回 エコツーリズム WG</u> 議事 3: 遺産管理計画の見直しを受けた知床エコツーリズム戦略への反映について	・ゾーニングと来訪者のタイプとの組み合わせによる全体ビジョンが必要。価値共創の観点からもゾーニングは利用者管理者双方にとってわかりやすくする必要あり。 ・ゾーニングとイメージ（案）を棚さらしにせず、確定させるべき。 ・2024 年度中に案をまとめるスケジュールを想定。	資料 3-1: 遺産管理計画の見直しを受けたエコツーリズム戦略への反映 資料 3-2: 地域の意見に基づく検討会議の見直しの視点
	<u>第 2 回 エコツーリズム検討会議</u> 議事 4: 世界遺産管理計画とエコツーリズム戦略の見直しについて	・エコツーリズム戦略見直しに係る地域関係団体へのヒアリング結果を公表。 ・戦略見直しの方針として以下の 3 点と構成案が提示。①インタープリテーション全体計画の要素を反映②リスクマネジメントの観点の追加③利用のゾーニングの規定。 ・<u>ゾーニングとイメージ（案）を目指すべき将来目標として位置づけ、これを実現するためにエコツーリズム検討会議の場を使い、関係機関が協力して進める。</u> ・見直しにあたっては、<u>全体ビジョンの骨格と提案制度の改善の 2 点</u>が特に重要。	資料 4-2: 遺産管理計画の見直しを受けたエコツーリズム戦略への反映 資料 4-3: 地域の意見に基づくエコツーリズム戦略の見直しの視点

2. 課題の整理と構成案の作成

1) 過年度の会議議事録の要約と整理

前節の経緯を踏まえながら、今年度の検討に際し、議事の要約と整理を行った。対象は、エコツーリズム検討会議(2010年から)とエコツーリズムWG(2018年から)とし、各会議の議事概要を要約の上、主に提案制度の進捗状況を基軸にエコツーリズム検討会議やエコツーリズム戦略の課題について中心的に抽出を行った。とりまとめの結果は巻末資料 1-1 に収録した。

2) 委員への聞き取り

前項の整理結果を踏まえ、12月6日にエコツーリズム検討会議委員2名(愛甲委員、石黒委員)への聞き取りを行った。聞き取りは対面で行い、事後に規定の謝金を支払った。聞き取りの概要を以下に示す。

実施日時	2024年12月6日 9:00~11:30
ヒアリング対象	愛甲 哲也 (北海道大学 農学研究院 教授) 石黒 侑介 (北海道大学 国際広報メディア・観光学院 准教授)
参加者	二神首席国立公園保護管理企画官(環境省)、秋葉・坂部(知床財団)
ヒアリング方法	対面方式
【ヒアリング内容】 <u>知床エコツーリズム戦略の見直しの方針と課題</u> (1) エコツーリズム戦略全体の課題等について (2) 「リスクマネジメント」に関する項目の追加について (3) 「利用のゾーニングとイメージ」に関する項目の追加 (4) 実行体制・検討会議のあり方について	
(1) エコツーリズム戦略全体の課題等について (エコツーリズム戦略の構成) ・5. 基本方針(1)基本原則などの項目の前に、IP 全体計画で整理したストーリーといった概念的な考え方を入れる必要がある。それに基づいて基本方針、基本原則があり、さらに将来目標があるという構成となるべき。つまり IP 全体計画を実現するためのエコツー戦略、という考え方となる。 ・エコツー戦略の目的は、伝えるべき知床の価値を守っていくこと。このような観点から考えると現状では少し観光や利用に寄りすぎている。この価値を守っていくためにツーリズムがあり、これのマネジメントとしてコントロールやリスクの取り扱いがあるという考え方である。 ・来訪者に伝えたいメッセージや望まれる体験を整理し、戦略に記載することは理解。そのうえで、「ゾーニングとイメージ」にも同様の記載があるため、調整・連動させる必要がある。	

(用語について)

- ・できれば今後「イメージ」という用語はビジュアライズされたものに使うべきで、それ以外の意味に用いるときは、言い換えるならばストーリーやコンテンツとなる。イメージという言葉はビジュアライズされたもののみに使い、エコツアー戦略にもきちんと書き込むことでイメージ戦略につなげていく必要がある。それが伝えたい価値の具現化につながる。知床をこのように楽しんでほしい、このような体験をしてほしいということをエコツアー戦略に書き込むことが大事である。
- ・このようなイメージ戦略が整理されれば、望ましいアクティビティややってはいけないことなどが自ずと決まっていく。

(2)「リスクマネジメント」に関する項目について

- ・リスク管理については、リスク情報の収集、リスク情報の開示・流通、保険等のリスクファイナンスの3つの軸について書き込み、半島全体への拡大を目指す方向性がよい。
- ・リスクに関する共有の仕組みなどは、エコツアー戦略に取り込んでもいい内容である。
- ・エコツアー戦略に観光船事故のことや今後の理念なども入れていく必要がある。
- ・現状では斜里町のみで議論している内容も多いため、両町にまたがるものとして記載していくかの整理は必要。リスクの共有、発信に関しては記載できるのではないかな。
- ・リスクの共有・発信について戦略に記載する際に、考え方としてこのようなことが必要であるとするのか、もしくはこのような共有・発信をしますと書くのか、で大きな違いがある。
- ・例えば、両町にまたがった救助体制などについて、どのように記載するのかの問題がある。これについては、羅臼町の知床半島先端部地区事故発生時対応検討会で取りまとめた「知床半島先端部地区トレッキング事故発生時対応方針」に出動についての記載等もある。

(3)「利用のゾーニングとイメージ」に関する項目について

- ・2017～2018年に地域で開催された「知床国立公園利用のあり方に関する懇談会」において作成されたゾーニングとイメージ(案)については、それぞれの場所が目指すべき未来が描かれているが、所謂ゾーニングではない。
- ・このゾーニングとイメージ(案)に書かれていることが、IP全体計画の中に盛り込まれる形で整理されれば、IPの方に取り込んでもいいのではないかな。
- ・付属資料などにある既存の他の計画にも多くのゾーニングが存在している。それらはエコツアー戦略の本文には一切出てきていないが、これらとの整合性を図る必要がある。
- ・守るべき価値を伝えられるアクティビティが、アトラクションとして競争力のあるものかどうかという問題もある。これはそれぞれのゾーンごとに異なる点であるので、きちんと考えていかなければならない。例えばカムイワッカなどは伝えたい価値とアクティビティがまさにリンクしていて矛盾がないが、そのバランスが崩れるとマネジメントはできても利用者からは魅力がない場所ということになってしまう。
- ・ゾーニングとイメージ(案)については、理想の将来像が描かれているのはいいが、担い手がいるのかという問題がある。
- ・IP全体計画を作ったあとの使い方として、エコツアー戦略、公園計画、公園管理計画などのどこに取り込むのか、ゾーニングなどの整合を取るのかも検討する必要がある。
- ・独自にゾーニングを定めている林野庁をはじめとした、他の省庁の調整も必要。

(4) 実行体制・検討会議のあり方について

- ・科学的助言機関としてのエコツーリズム WG と地域協議会としての検討会議はそれぞれが独立して開催されるべき。例えばヒグマについては、科学委員会の助言機関としてのヒグマ WG があり、現地の実働部隊としてのヒグマ対策連絡会議があるという形が一例である。後者については、地域(関係者)主体で進めるべきである。
- ・現在のエコツーリズム検討会議は、エコツーWG の座長が司会を務めているが、司会や進行は地域団体等が行った方がいい。
- ・エコツーリズム戦略の実行体制の場としての検討会議であるが、提案の承認方法が現状ではあいまいである。また、エコツーWG 委員は提案の内容に対して科学的な見地からアドバイスなどは行うが、承認にかかわらない方がよい。提案の承認はあくまでも地域で決定するべきである。
- ・提案に関しては、法的にクリアすべき点を明確にした上で、知床の価値を損なうことがないように概念的に縛る役目を IP 全体計画が担い、さらに科学的見地から WG いいがアドバイスするという3方向からのバランスをとって実施していくべきである。
- ・上記などの点を踏まえ、WG と検討会議の体制そのもとエコツー戦略の枠組みそのものを見直すべきであるという大きな提案であった。
- ・エコツー戦略については策定から10年を経ており、これまで運用された10年間の成果と実績は課題とともにまとめるべきである。また、10年を経て社会の状況も変化しているため、見直しは必ず必要である。
- ・この中で、付属資料や事務実施要領の見直しまで含めるとかなり時間と労力がかかることが想定される。エコツー戦略については見直しを進めつつ、運用については試行実証しながら数年かけて進めて行く必要があるかもしれない。

3) 見直し方針と構成案の検討

第2節のヒアリング結果を踏まえ、エコツーリズム戦略見直しに係る見直しの要点を整理し、構成案を以下のように作成した。

基本方針 遺産管理計画の見直しを受け、エコツーリズム戦略へ反映させる

- 遺産管理計画の見直しに伴い、下位計画として、知床エコツーリズム戦略が遺産管理計画に位置づけられることとなった。
- これを受けて、遺産管理計画に記載された管理の基本方針に基づいて、エコツーリズム戦略の記載事項の見直しを行う。

エコツーリズム戦略への主な反映次項

① 「良質な自然体験の提供」に関する項目の追加

- 現在進行中の IP 全体計画策定の進捗を受け、具体的な書き込みを検討する。IP 全体計画のストーリーを反映し、その実現のための戦略と位置づける。
- 今年度のアウトプットは、地域 WS の意見を踏まえた知床 NP のテーマ（3～5）とそれに紐づく伝えるストーリー（10 程度）を想定。来訪者分析についても実施予定。望まれる体験や伝える手段などについては来年度の作業となる見込み。
- 望ましい体験やメッセージを整理し、エコツー戦略と「ゾーニングとイメージ」を調整する。（IP 全体計画で整理できれば「ゾーニングとイメージ（案）」は必要なくなる）。
- IP 全体計画で整理したストーリーの概念的な考え方を「5. 基本方針の基本原則」の前に入れる。

② 「リスクマネジメント」に関する項目の追加

- 観光船事故の教訓を踏まえた安全対策の理念を盛り込む必要性。
- 2023 年度末に斜里町の A-risk 協議会による最終とりまとめ答申され、2024 年度に運営事務局が立ち上がり、「リスク情報の発信」「事業者への支援」「リスクアセスメントとゾーニング」などの個別課題に着手したところ。
- こうした斜里町のリスク対応事務局の取り組みについて、半島全体への拡大可能性や両町での取扱いなどについて調整の必要性がある。

③ 「利用のゾーニングとイメージ」に関する項目の追加

- 2017～2018 年に地域で開催された「知床国立公園利用のあり方に関する懇談会」において作成された「ゾーニングとイメージ（案）」があり、これを活用する。
- 遺産管理計画や保護林制度など、既存計画との調整がなされたものではなく、どのような位置づけ、レベル感で記載するのかについての調整が必要。
- また、ビジョン的な性格が強く、実現可能性と担い手の明確化などが課題となる。
- 利用価値とニーズのバランス評価が必要であり、策定中の IP 全体計画との重複内容を

調整する必要がある。

④ その他

- 付属資料や関連文章である「知床エコツーリズム戦略付属資料」「事務取扱い要領」も相応に古くなっており、これの取扱いについても連動して検討する。

実行体制と適正利用・エコツーリズム検討会議のあり方

- 2010 年からの検討会議の運営、2013 年からの戦略の運用について、過去の議事と変遷について整理を実施。
- これらより抽出された運用体制や提案制度の課題としては、以下があげられる。
 - ① エコツーリズム検討会議の位置付け（科学委や専門委員との関係性）
 - ② 提案や承認の範囲や基準
 - ③ 提案のコストや時間に対するメリットや動機
 - ④ 既存のルールや行政体制との関係性
- 具体的な運用の規則として「適正利用・エコツーリズム検討会議設置要綱」「知床エコツーリズム戦略 事務取扱い要領」がありこれらの見直しも付随するものと想定。

構成案

現行	見直し（案） 赤字は追加項目
1. はじめに	1. はじめに
2. 戦略の目的	2. 戦略の目的（以下パート1「基本情報」として）
3. 現状と課題 （1）観光やエコツーリズムの現状と経緯 （2）現在生じている課題 （3）今後予想される課題	3. 現状と課題 （1）観光やエコツーリズムの現状と経緯 （2）現在生じている課題 （3）今後予想される課題
4. 既存の法律、制度、ルール	4. 既存の法律、制度、ルール
5. 基本方針 （1）基本原則 （2）エコツーリズムを含む観光利用の推進にあたって必要な視点	5. 基本方針 （1）基本原則 （2）エコツーリズムを含む観光利用の推進にあたって必要な視点
6. 戦略の対象 （1）戦略の対象となる地域 （2）戦略の対象となる活動	6. 戦略の対象 （1）戦略の対象となる地域 （2）戦略の対象となる活動 （3）戦略の対象となる来訪者
7. 守るべき知床の価値 （1）自然に関する価値 （2）人と自然の関わりについての価値 （3）非日常性から得られる価値	7. 守り 、伝えるべき知床の価値 （1）自然に関する価値 （2）人と自然の関わりについての価値 （3）非日常性から得られる価値
—	8. 良質な自然体験の提供に必要な要素 （1）来訪者に伝えたいメッセージ （2）来訪者に望まれる体験
8. 将来目標 （1）遺産地域の自然環境の保全とその価値の向上 （2）世界の観光客に対する知床らしい良質な自然体験の提供 （3）持続可能な地域社会と経済の構築	9. 将来目標（以下、パート2「目指す方向」として） （1）遺産地域の自然環境の保全とその価値の向上 （2）世界の観光客に対する知床らしい良質な自然体験の提供 （3）持続可能な地域社会と経済の構築 （4）利用のゾーニングとイメージ案
9. 具体的方策 （1）利用コントロール （2）守るべきルールの設定と指導 （3）情報の発信 （4）ガイドの育成とガイド利用の推奨 （5）文化的資産等の活用 （6）利益の還元 （7）施設整備 （8）モニタリング	10. 具体的方策 （1）利用コントロール （2）守るべきルールの設定と指導 （3）情報の発信 （4）ガイドの育成とガイド利用の推奨 （5）文化的資産等の活用 （6）利益の還元 （7）施設整備 （8）モニタリング （9）リスクマネジメント
10. 戦略の実行体制 （1）エコツーリズムを含む観光利用に関する政策決定手順 （2）検討会議の構成と運営	11. 戦略の実行体制 （1）エコツーリズムを含む観光利用に関する政策決定手順 （2）検討会議の構成と運営
11. 見直しの手法、期間	12. 見直しの手法、期間

4) 意見交換会の実施

前項の見直し方針と構成案について助言を得るため、エコツーリズム検討会議委員を対象とした意見交換会を2月6日に実施した。意見交換会はオンライン形式とし、5名の委員が参加した。実施後には規定の謝金を支払った。実施概要を以下に示す。

実施日時	2025年2月6日 13:30~16:00
エコツーリズム 検討会議委員	愛甲 哲也 (北海道大学 農学研究院 教授) 石黒 侑介 (北海道大学 国際広報メディア・観光学院 准教授) 敷田 麻実 (北陸先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究科 教授) 船木 大資 (金沢星稜大学経済学部地域システム学科 講師) 間野 勉 (北海道立総合研究機構 エネルギー・環境・地質研究所 専門研究員)
業務発注者 (環境省)	岡野 隆宏 (釧路自然環境事務所 所長) 吉田 宗史 (釧路自然環境事務所 国立公園課 世界自然遺産専門官) 白井 義人 (釧路自然環境事務所 国立公園課 係員) 二神 紀彦 (釧路自然環境事務所 ウトロ自然保護官事務所 首席国立公園 保護管理企画官) 伊藤 薫 (釧路自然環境事務所 ウトロ自然保護官事務所 国立公園利用 企画官) 西村 健汰 (釧路自然環境事務所 羅臼自然保護官事務所)
業務受注者 (知床財団)	玉置 創司 (事務局長) 秋葉 圭太 (事業部 参事) 片山 綾 (事業部 公園事業係長) 坂部 皆子 (事業部 羅臼地区事業係長) 谷 洸哉 (事業部 羅臼地区事業係) 宮腰 みずき (事業部 羅臼地区事業係) フォレスト・リチャード (事業部 公園事業係) 仁木 可奈子 (事業部 公園事業係)
実施方式	オンライン形式(webEX)
テーマ	エコツーリズム戦略の見直しとエコツーリズム検討会議の進め方について

発言要旨：

1. 敷田委員の発言要点

IUCN の勧告が戦略の原点。戦略の本来の目的を再確認し、今後の方向性を決めるべき。

■ エコツーリズム戦略の根拠

- ・ IUCN（国際自然保護連合）の勧告に基づき策定された。目的は、自然価値の保護・体験の提供・経済の発展の調和を図ること。
- ・ IUCN の勧告には、利用促進を認めつつも価値維持のための調整を求める内容が含まれていた。

■ 戦略の位置づけと統合の必要性

- ・ エコツーリズム戦略は遺産管理計画の下位にある計画であり、観光利用や適正利用を対象とする。
- ・ ゾーニングは観光利用の範囲で整理すべきであり、道路設置や開発など観光を超える利用は管理計画に含めるべき。
- ・ 資料 2-1 の 7 ページ目に示された計画は統合されるはずだったが、整理が不十分なまま残っている。

■ 提案制度の役割と課題

- ・ 地域の関係者が発言できる場を作るため戦略に提案制度を組み込んだ。
- ・ しかし、行政の提案に対する賛否を決める場になりがちで、本来の趣旨（地域主体の関与）が十分に機能していない。

■ ワーキンググループと地域連絡会議の経緯

- ・ 2018 年にワーキンググループが 5 年ぶりに単独再開されたが、これは環境省の意向によるもの。
- ・ 当初、検討会議の位置付けについては、地域連絡会議への機能移管も検討されたが、最終的には分けて開催する形に落ち着いた。

2. 愛甲委員の発言要点

既存計画の整理と、戦略の位置付けの明確化が必要。

■ IP 全体計画の位置付けについて

- ・ インタープリテーション全体計画の構成や内容が不明確であり、これをエコツーリズム戦略へどう反映させるかが課題。

■ 計画の整理の必要性

- ・ これまでの利用適正化計画やエコツーリズムに関する既存計画の整理を進めるべき。
- ・ 計画の階層性や関係がわかりにくいいため、統合すべきものは統合する必要がある。
- ・ これまで先延ばしにしてきたが、今こそ整理するべきではないか。

■ エコツーリズム戦略の見直しについて

- ・ 見直しの議論と決定の場を明確にすべき。検討会議か WG の役割分担をはっきりさせる必要がある。
- ・ 戦略本体の見直しの議論なのか、提案制度などの運用を含めた議論なのか、あるていど焦点を明確にする必要がある。

■ 戦略の名称と内容の不整合

- ・ 戦略という名称が使われているが、現在の内容はガイドラインや推進計画に近いものになっている。
- ・ 戦略は具体的な進め方を示すべきであり、名称と中身の関係性を整理する必要がある。

3. 間野委員の発言要点

戦略本体の課題と運用上の課題を分け実効性のある具体的な計画を策定する必要がある。

■ エコツーリズム戦略の現状の課題

- ・ 既存の計画（法定計画や他省庁の計画）との関係性について、戦略の位置づけが明確でなく、行政の役割も不明確になっている。

■ 戦略見直しの方針

- ・ まず、エコツーリズム戦略自体の課題と、既存制度や法規制の制約の問題を分けて考えるべき。
- ・ 抽象的な議論やイメージではなく、実行可能な具体的な計画を作成することが重要。

■ リスクマネジメントの必要性

- ・ 観光船の事故やヒグマの問題など、エコツーリズムに関わるリスクが多く存在する。
- ・ 制度や予算の制約があるが、戦略に具体的な対応策を記載し、関係機関との合意形成を進めるべき。

4. 石黒委員の発言要点

計画体系の整理と、「イメージ戦略」の導入を提案。

■ 最上位計画の明確化

- ・ 政策や計画を考える際、最も上位にある計画を明確にすることが重要。
- ・ 省庁をまたぐ計画であるため調整が難しいこともあるが、相互関係の整理を図るべき。特に、関係性が整理できていない部分を明確化する必要がある。

■ 用語の扱いについて

- ・ 「イメージ」という用語が頻出しているが、ビジュアルに紐づいておらず、適切でない可能性がある。
- ・ 「ゾーニングとイメージ（案）」については「コンセプト」や「テーマ」といった用語を用いる方が適切ではないか。

■ イメージ戦略の導入の提案

- ・ 「イメージ戦略」という考え方を戦略に取り入れるべき。
- ・ ブランディングやインタープリテーションの観点からも、どういう映像やビジュアルを市場や地元向けに発信するのかを考える必要がある。

5. 船木委員の発言要点

戦略の改定負担を軽減し、計画の整理を論理的に進めるべき。

■ IP 全体計画の策定とその位置づけについて

- ・ 計画の構成や全体像を明らかにすべき。その中では、計画の期間や理念、実現のための方策などの取扱いが重要となる。また、エコツーリズム戦略との関係性も明らかにする必要がある。
- ・ 「IP 計画が補助金事業に採択される判断基準になる」等の記述があるが、重要な点であり、詳細な説明が必要。

■ エコツーリズム戦略の改定と作業量の軽減

- ・ 見直しにあたっては、戦略そのものを見直す観点と、戦略の運用上の課題とを区別して取扱うことが重要。
- ・ 現在のエコツーリズム戦略はビジョンを示すグランドデザイン的な位置づけが強い。
- ・ 望まれる体験などの要素（インタープリテーション計画）は変化が速いため、戦略本体とは切り離し、付属資料やアクションプランに盛り込むことで柔軟な対応が可能になる。

■ 専門委員の役割と位置づけ

- ・ 助言を行うのみでなく、提案の実現に向けて積極的に参画する役割があってもよい。

■ 計画の論理的な整理の必要性

- ・ 戦略の全体構成が論理的でなく、流れがわかりにくい。
- ・ 戦略の位置づけ → 現状と課題 → 目標 → 方針 → 具体的方策 → 体制・見直しの仕組みという順序で整理するという方法もある。
- ・ ヒグマ管理計画のような整理の仕方を参考にすると良いのではないか。

3. エコツーリズム検討会議への中間報告

1) 中間報告のための会議資料の作成

第2項までの結果を踏まえ、2025年2月20日に札幌で開催された2024年度第2回エコツーリズム検討会議に供する資料(表1-3)を作成した。作成した資料は、巻末資料1-2に収録した。

表 1-3 作成した資料一覧

資料番号	資料名
資料 5-1	エコツーリズム戦略運用の経緯を踏まえた成果と課題
資料 5-2	エコツーリズム戦略見直しの方針と構成案

2) 会議での意見・コメント

会議で出された意見やコメントを以下にまとめた。

- 今後、エコツーリズム戦略は地域内の関係者だけでなく、域外の事業者等にも関わる可能性が高い。そのような意味でもより分かりやすい形に整理する必要がある、他の計画を統合していく作業も非常に重要。
- 実行性の担保のためにも、エコツーリズム戦略の見直しと同時に事務取扱要領を見直すべき。また、エコツーリズム検討会議とエコツーリズム WG との役割分担が不明瞭であり、設置要綱も含めた見直しが重要。
- 見直しにあたっては、提案者側や地元側の立場に立った視点で行う必要がある。これらの作業については今後、WG と事務局とが素案を作成し、検討会議に諮る進め方がよい。

4. 今後の作業方針とスケジュール

1) 今年度の検討まとめ

エコツーリズム戦略改定の検討にあたり、過年度の検討経緯を整理した後、課題の整理と構成案の作成を行った。作成にあたっては、専門家への聞き取りに加えエコツーリズム WG 委員との意見交換を実施し、助言を得た。検討結果は今年度第2回エコツーリズム検討会議に報告した。

今年度の検討を通じて以下の3点が明らかになった。

- ① エコツーリズム戦略が知床地域の多様な計画体系のなかに位置し、相互に関連しあっているため、見直しの観点が多岐にわたり複雑であること。
- ② さらに、エコツーリズム戦略のみならず、これを運用するエコツーリズム検討会議についての課題も多く指摘されており、運用上の課題を含めて一体的に扱う必要があること。
- ③ 従って、エコツーリズム戦略の改定も、単なる修文や加除修正にはとどまらず、抜本的な構成の見直しに加え、関連文章等も併せて見直す必要性が高いこと。
- ④ しかしながら、協議の場が多くあるにも関わらず、構成員や議事が重複したり漏れたりすることが多く、課題の複雑さも手伝って段階を踏んだ議論が進まないこと。

2) 次年度以降の検討のあり方

前項の事情を踏まえ、次年度以降の検討にあたって以下の方針案を提案する。また、これらを体系的に整理し(表 1-4)、スケジュール案と紐づけて図示した(図 1-1)。

検討のテーマを整理・分割し、優先順位を設定すること

見直しに係る議論ポイントが拡散しがちであることから、検討テーマを整理・分割し、優先順位を明確化すべきである。具体的には、以下の 4 点に議論テーマを分割する。なお、検討の優先順位もおおむね記載順とする。

- I. エコツーリズム検討会議と WG の位置付け整理
- II. 既存の計画・ルール of 整理と統廃合
- III. 遺産管理計画に紐づいたエコツーリズム戦略の見直し
- IV. 実行性のあるエコツーリズム検討会議の進め方

テーマに応じた議論の場と検討体制を設定すること

次に、各議論テーマを検討する場を明確化する必要がある。場の設定にあたっては、テーマ間の相互関係を意識しつつ、可能な限り重複を避けることが求められる。特に「I. エコツーリズム検討会議と WG の位置付け整理」の結果を踏まえ、両会議での役割分担を意識しながら議論テーマを振り分けることが望ましい。

テーマごとのゴールを設定し、スケジュールを明確化すること

また、議論テーマごとのアウトプットを明瞭化することも重要である。具体的には、各種計画や要綱などの取りまとめがアウトプットと想定される。これの策定なり更新なりを検討のゴールとして位置付け、これに至るスケジュールをあらかじめ提示することが肝要と考えられる。

表 1-4 次年度以降の検討テーマと検討体制（案）

主な検討課題		主な反映先	主な議論の場	方向性やアイデア	スケジュールと検討体制
Ⅰ.エコツーリズム検討会議とWGの位置付け整理					
1-1	適正な構成メンバーとその役割や責任、事務分担	a.エコツーリズム検討会議設置要綱 (2023.11.10 策定, 2025.4.1 改正) b.エコツーリズム検討会議運営指針 (2014.3.26 策定, 2023.2.1 改定) c.エコツーリズムWG設置要綱 (2022.10.27 策定, 2024.4.1 改正) d.地域連絡会議 エコツーリズム部会設置要綱(2010.4.1 策定,2020.10.15 改正)	主:地域連絡会議 主:エコツーリズムWG 副:エコツーリズム検討会議	・両会議の役割分担を明確化し、重複関係による議論の2重化とムダを避ける。(ヨコの関係) ・併せて、科学委・地域連絡会議との関係性についても明確化。(タテの関係)特に、地域連絡会議とエコツーリズム部会の関係性は曖昧であり、整理ポイント。 ・実質的な議論を進めるため、議事の取扱い範囲の整理と絞り込み、開催方法の工夫、構成員の精査なども必要。 ・構成員については、発言も調整も行わない行政機関が散見され、民間の参加意欲も低下している。民間メンバーについても地域の代表性、参加意向などの観点から再整理が必要。	・複数の会議体にまたがることから、これらとの連携調整を図りつつ、2025年度に集中的な整理を行うことが重要。 ・地域団体の役割、意向の確認については地域連絡会議を活用するのが適当。北海道との連携を年初より意識。 ・専門家の役割、両会議の関係性については、2025年度の第1回エコツーリズムWGに案を示した後、検討会議の場で整理を図る。
1-2	両会議の取扱い議事とその範囲、連携のあり方				
1-3	専門家の役割、権限、支援や助言のあり方				
Ⅱ.既存の計画・ルールの整理と統廃合					
2-1	遺産管理計画との関係性整理	e.エコツーリズム戦略 f.エコツーリズム戦略 付属資料 (2013.3 策定)	主:エコツーリズムWG 副:エコツーリズム検討会議	・上位計画としての遺産管理計画との関係性、書き分け、連携関係性チェック ・斜め上、または並列関係としての国立公園計画、公園管理計画等との整合性チェック ・並行関係としての自治体の観光政策、計画との関係性・協力関係の整理 ・並行関係としてのIP全体計画との関係性、分担、抱合関係性の整理 ・競合関係にある既存の計画、ルールについての統廃合をすすめ、結果については付属資料等へ反映させることが望ましい。	・2025年度のエコツーリズムWGの中心議題とし、専門家に意見を求めながら整理を進める。 ・遺産管理計画確定の手続きの進捗を踏まえながら、戦略との整合性、上下関係の資絵里を図る。 ・IP全体計画については、2025年度中の策定を目指していることから、これを踏まえた検討を2025年度下半期に進める。 ・既存計画の統廃合については、2025年度に整理をすすめ、2026年度中の合意・確定を目指す。
2-2	国立公園の関連計画との関係性の整理				
2-3	IP全体計画との関係性				
2-4	既存の計画・ルール・ガイドラインの統廃合				
Ⅲ.遺産管理計画に紐づいたエコツーリズム戦略の見直し					
3-1	将来目標としての利用の全体ビジョンの提示とゾーニングの取扱い	e.エコツーリズム戦略 f.エコツーリズム戦略 付属資料 (2013.3 策定)	主:エコツーリス`m検討会議 副:エコツーリズムWG	・利用の将来目標とゾーニングの計画論をエコツーリズム戦略に組み込み。また、今後想定される利用者の類型などとの関係も整理。 ・将来目標、望まれる体験、それを実現する場所やアクティビティについて、既存の「ゾーニングとイメージ(案)」とIP全体計画の両者を統合し、組み込むイメージ。案の策定にあたっては、まずは事務局間での方向性の共有、すり合わせ、事務分担が必須。 ・検討会議では、将来目標や利用のゾーニングについての意見を聞きながらまとめる。 ・全体構成や遺産管理計画との整合性チェックなどについては、主にWGで協議するイメージ。	・行政間協議、調整を2025年度に進める。 ・IP全体計画については、2025年度中の策定を目指していることから、これを踏まえた検討を2025年度下半期に進める。 ・2025年度中に改定案の起草を行い、2026年度中の合意を目指す。
3-2	IP全体計画の要素を追加 (ストーリー、求められる体験、来訪者の類型)				
3-3	リスクマネジメントに関する項目の追加				
Ⅳ.実行性のあるエコツーリズム検討会議の進め方					
4-1	提案制度のメリット付与、活性化策	b.エコツーリズム検討会議運営指針 (2014.3.26 策定, 2023.2.1 改定) g.エコツーリズム戦略 事務取扱要領 (2013.3 策定,2016.3.2 改正)	主:エコツーリス`m検討会議	・Ⅰ～Ⅲの検討結果を基に、エコツーリズム検討会議の運用方法を刷新。 ・焦点は、提案制度の運用方法であり、提案のメリットや実行支援をいかに充実化できるかがポイント。具体的には、事業資金と事務支援、特許の考え方を仕組み化できるか、という観点での検討が必要。 ・提案の範囲や承認のあり方については、すぐに成文化することは難しく、実際の運用を重ねながら検討を進める姿勢も必要。 ・会議体の運営方法やスピード感については、座長などの進行や仕切りによる部分も多いため、事務局および座長との事前相談が重要。	・2025年度の検討結果を踏まえ、2026年度から新たな運用体制を試行する。 ・提案制度の活用にあたっては、モデル的、ケーススタディ的な運用を行い、そのレビューに基いた見直しを図る。
4-2	提案の範囲				
4-3	実行体制の確保、支援策				
4-4	承認の方法、意思決定のあり方				
4-5	信頼性のある合意形成と時代にあったスピード感				

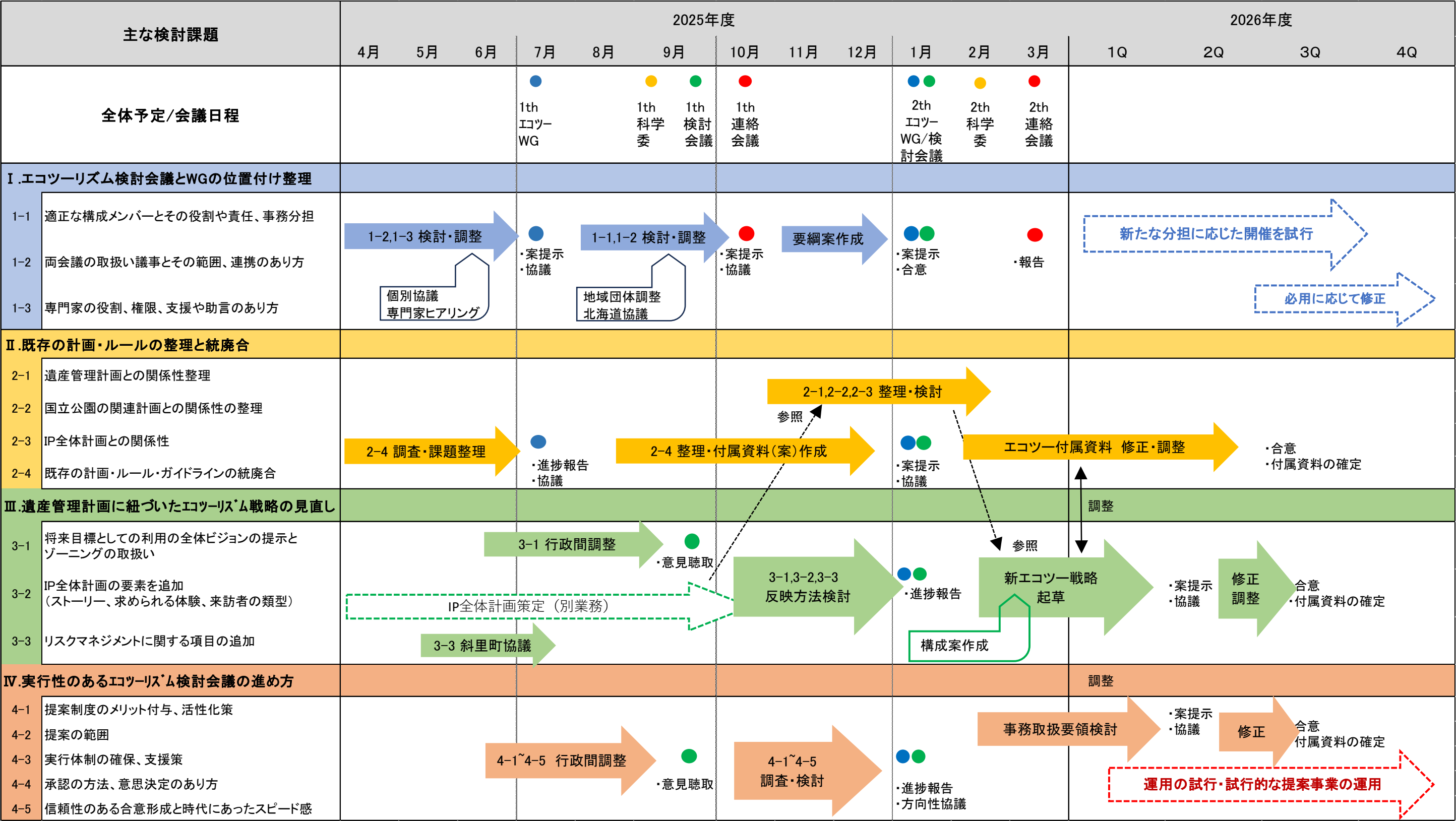


図 1-1 次年度以降の検討スケジュール（案）

第2章 地域資源の価値の整理及びストーリー案の作成

本章では、知床地域の価値を整理し、IP 全体計画の主要な要素であるストーリーの案を検討結果について報告する。今年度の検討体制を図 2-1 に示す。作業部会は、IP 全体計画策定の事務局であり、エコツーリズム検討会議の部会として位置付けた。今年度は特に、地域資源の価値やストーリー案の具体的な検討、ワークショップの企画・運営、ワークショップで出た意見の収集・整理などを行うものとし、今年度は5回開催した。

ワークショップは、ストーリーの基盤となる地域の価値を洗い出し、これを言語化することを目的として開催した。多様な地域関係者の経験や考えを反映させ、参加型の手法によるストーリーづくりを進めるため、地域住民全般を対象として広く参加者を募った。また、知床全体を対象とすることから実施場所も、斜里町市街地、羅臼町、ウトロ地区の3地区においてそれぞれ3回ずつ、計9回のワークショップを開催した。

作業部会とワークショップは交互に実施することを基本し、計画と報告を繰り返すサイクルを意識した。また、作業部会におけるとりまとめの結果は、エコツーリズム検討会議やエコツーリズム WG 委員に報告し、事業の進捗を共有するとともに、意見や助言を受けた。

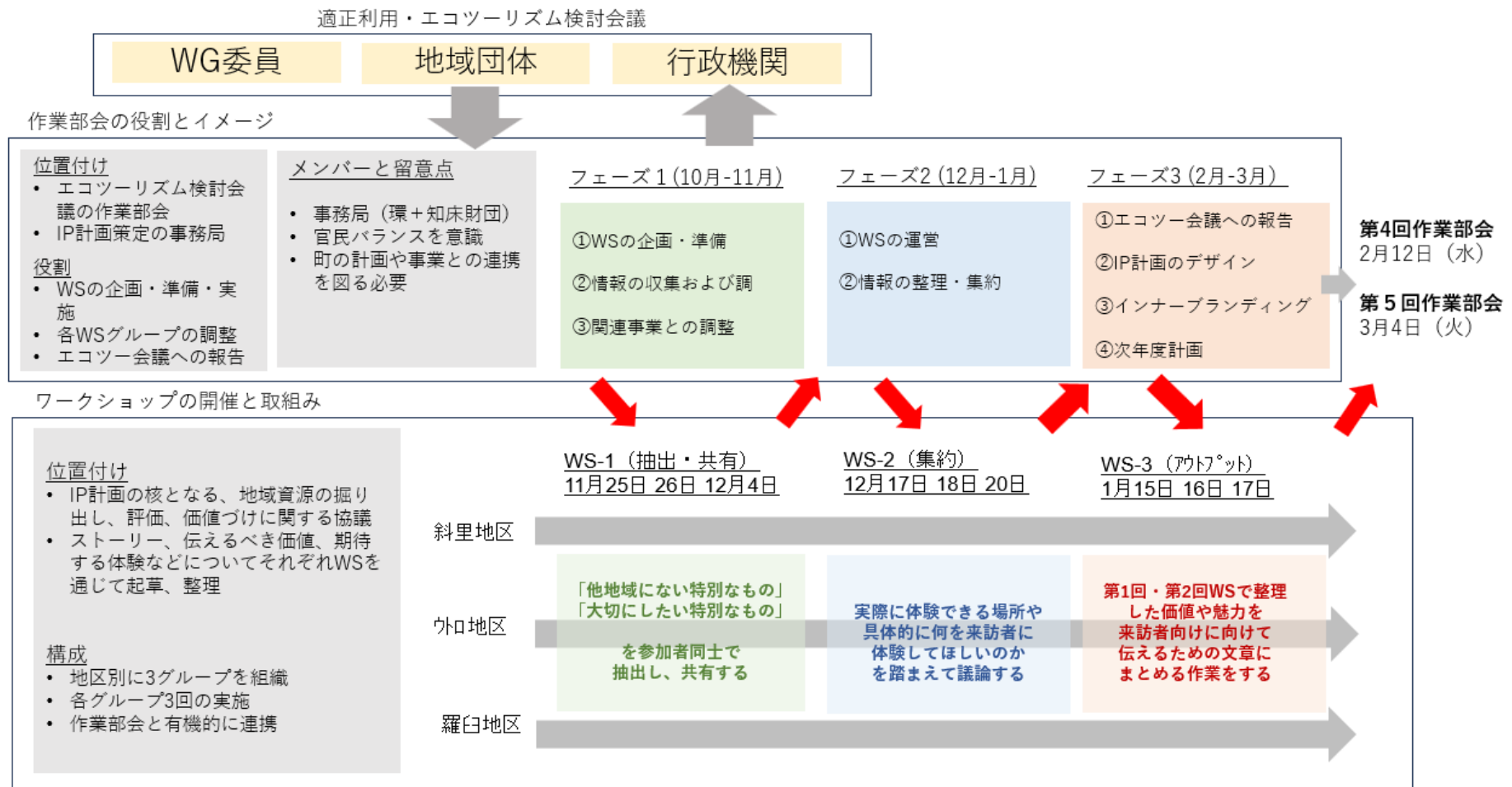


図 2-1 地域資源の価値の整理及びストーリー案に係る検討体制

1. 作業部会の設置

作業部会は、環境省担当官と協議の上、表 2-1 に示す構成とした。主要な構成員として、専門家 2 名と部会員 4 名に参画を依頼した。専門家は、観光地域づくりや観光ブランディングに精通する者とし、ワークショップのファシリテーターを兼務することを想定して依頼した。部会員は、主に観光や国立公園等に係る斜里町および羅臼町の関係者である。今後策定される IP 全体計画の利活用を担うことが期待される者として依頼した。また、関連事業との連携や地域関係団体との共有のため、オブザーバーとして 2 名に参加を依頼した。

表 2-1 作業部会の構成

構成	機関名	役職	氏名
専門家	なみうちぎわをあるこう合同会社	代表者社員	初海 淳
	Clutch.55株式会社	代表取締役	柿沼 宏明
部会員	一般社団法人知床しゃり	専務理事	河井 謙
	斜里町商工観光課	課長	南出 康弘
	羅臼町企画財政課	参事	三宅 悠介
	羅臼町産業創生課	産業創生係長	川口 勇也
	羅臼町産業創生課	まちづくり担当課長	伊藤 芳征
オブザーバー	国土交通省 北海道運輸局観光部	次長	山崎 貴志
	一般社団法人知床羅臼町観光協会	事務局長	和久井 一躬
運営事務局	環境省 釧路自然環境事務所(事業発注者)		
	公益財団法人 知床財団(事業受注者)		

2. 作業部会の運営

作業部会は、斜里町または羅臼町内において計5回開催した。作業部会においては、ワークショップを中心とした事業の進め方やスケジュール、関連事業とのデマケーション、IP全体計画の利活用のあり方等について協議を行った。

作業部会は対面での開催を基本としながら、web会議も併用する形式とした。開催にあたっては、出欠調整、会場手配、会議資料の作成・印刷等の事前準備を行い、当日は会場準備、議事進行を行った。実施後2週間以内に記録を作成し、環境省担当官と参加者の確認を経て完成させ、次の作業部会前までに共有した。出席者に対しては、規定の旅費及び謝金を支払った。

作業部会の実施結果を以下に示す。なお、作業部会の会議資料（第1回～第5回）は別冊付録に収録した。

1) 第1回作業部会

開催要領：

日時 2024年10月4日(金) 10:00～11:30

場所 斜里町ウトロ漁村センター 2階会議室（オンライン併用）

議事次第：

- 1) 本事業の概要とねらい
- 2) 作業部会の設置について
- 3) 関連事業(高付加価値なインバウンド観光地づくり事業)との連携について
- 4) 今後の取り組みと進め方について
- 5) その他

出席者名簿（敬称略）：

構成	機関名	役職	氏名
専門家	なみうちぎわをあるこう合同会社	代表者社員	初海 淳
部会員	一般社団法人知床しゃり	専務理事	河井 謙
	斜里町商工観光課	課長	南出 康弘
オブザーバー	国土交通省 北海道運輸局観光部	次長	山崎 貴志
運営事務局	環境省 釧路自然環境事務所(事業発注者)		
	公益財団法人 知床財団(事業受注者)		

議事概要：

※発言者の敬称・役職等は省略して記載した。

※文中、WS はワークショップの略省として使用した。

(1) 本事業の概要とねらい

資料 1 R6 年度 知床の魅力あるストーリー検討業について <説明／環境省>

南出: 来訪者分析は町の観光振興計画でも重要と指摘されている。今年度の取り組みの予定は。また、データの共有などは可能か。

環境省: 国内旅行者を対象とした携帯電話ビッグデータを購入予定。R3 年度事業でも同様の分析を行っているため、比較可能。結果については共有可能である。

河井: IP 全体計画の使途や策定後の利活用について展望やイメージはあるか。この計画の実行段階においては、予算措置も含めて環境省が事業主体として推進するのか。

環境省: IP 全体計画は地域の価値を統一的に発信するためのコミュニケーション戦略と認識。環境省のみが進めるものではなく、広く「土台」として作成し、関係各位に活用いただくものと想定。環境省としては、直轄施設の改修や公園施設の整備等に活用できると考えている。

河井: 計画の対象範囲は。国立公園外も対象とするのか。

初海: 斜里町のブランディング事業では、国立公園や世界遺産に限定せず、一次産業との連携も進んでいる。

環境省: 知床の価値やストーリーを整理するにあたっては地域の暮らしなども重要。知床半島という枠組みを想定している。

(2) 作業部会の設置について

特に意見なし

(3) 関連事業（高付加価値なインバウンド観光地づくり事業）との連携について

資料 2 知床国立公園 IP 全体計画策定の進め方イメージ（2024 年度）<説明／知床財団>

資料 3 がし北海道「高付加価値なインバウンド観光地づくり」令和 6 年度施策全体俯瞰図<説明／北海道運輸局>

山崎: 知床の価値を整理し、ストーリー化することで保全意識の涵養や地域への投資に繋げることが重要。観光庁事業では、知床に「住まう価値」と「訪れる価値」の両面から整理を実施。これらの重なる部分に着目するとよい。

河井: 斜里町でもブランディング事業を進めてきた。既存事業との重複や無駄がないように留意が

必要。国立公園としてのブランディングやストーリー作りは必要と認識。価値の整理、という意味では羅臼では知床学として体系化されており、参考となる。

知床財団: IP 全体計画という名称も含め、その策定意図や効果を丁寧に整理する必要がある。例えば、観光従事者の研修などへの活用などの事例が必要。既存事業と競合するのではなく、足りていない領域を埋めるようなアプローチが必要と認識。

知床財団: IP 全体計画のアウトプットのイメージも共有する必要がある。組み入れるべき要素や項目の洗い出し、整理の作業にも着手する。

(4) 今後の取り組みと進め方について

資料 4-1 第 1 回ワークショップ実施計画（案）＜説明／知床財団＞

資料 4-2 ワークショップのメンバー（素案）＜説明／知床財団＞

山崎: 第 1 回 WS の実施にあたっては、ある程度メンバーやテーマのターゲットを絞ったうえで実施した方がよい。あまり拡散しすぎないようにする工夫が必要。地域資源の整理なども、対象をどのように絞り込むか、事前のファクト調査や整理が必要。

初海: 意見交換や作業の前に、事業の趣旨や効果、必要性に関する共通認識の醸成や情報共有に重きを置く必要がある。

知床財団: 今回の意見を踏まえて、実施計画をリバイズし、改めてお示しする。10 月末までには実施計画と指名メンバーを固め、11 月中には初回の WS を開催したい。次回の作業部会は初回の WS 終了後に実施する。次回は羅臼町のメンバーも含めた座組で開催したい。

(閉会)

2) 第2回作業部会

開催要領：

日時 2024年12月9日(月) 9:30～11:30

場所 里町役場2階 大会議室

議事次第：

- 1) 第1回WSの実施結果
- 2) 第2回以降のWSの進め方について
- 3) 関連事業(高付加価値なインバウンド観光地づくり事業)との連携について
- 4) その他



写真 2-1 第2回作業部会の様子

出席者名簿（敬称略）：

構成	機関名	役職	氏名
専門家	なみうちぎわをあるこう合同会社	代表者社員	初海 淳
	Clutch.55株式会社	代表取締役	柿沼 宏明
部会員	一般社団法人知床しゃり	専務理事	河井 謙
	斜里町商工観光課	課長	南出 康弘
	羅臼町企画財政課	参事	三宅 悠介
	羅臼町産業創生課	産業創生係長	川口 勇也
	羅臼町産業創生課	まちづくり担当課長	伊藤 芳征
オブザーバー	国土交通省 北海道運輸局観光部	次長	山崎 貴志
	一般社団法人知床羅臼町観光協会	事務局長	和久井 一躬
運営事務局	環境省 釧路自然環境事務所（事業発注者）		
	公益財団法人 知床財団（事業受注者）		

議事概要:

(1) 第1回 WS の実施結果

資料 1-1 第1回 WS の実施概要 <説明/知床財団>

資料 1-2 第1回 WS で挙げられた「知床らしさ」のまとめ <説明/知床財団>

山本:ファシリテーターをしていた柿沼氏、初海氏から、それぞれ補足説明はあるか。

柿沼:第1回のWSでは自由に意見を出してもらうことを意識した。WS冒頭では「自慢は他の人が持っていないからこそ自慢になる」という説明をし、意見を出す際には「他の地域にはないもの」を意識してもらうよう促した。斜里会場に参加した高校生から「日常のすぐそばにいる動物が魅力的」「ねふた祭りは、祭りそのものに加えて準備期間も含めて、いいもの」など非常に貴重な意見が出た。ウトロ会場はホテル関係者やガイドなど観光関係者が多く、日頃から潜在的に観光客が何を求めているのかを考えている印象を受けた。2回目のWSに向け、1回目に出たキーワードをカテゴリー分けすると、斜里会場もウトロ会場も似たようなカテゴリー分けになった。唯一違った点は、ウトロ会場は「開拓」というキーワードが出たことだ。

初海:羅臼会場では4つのグループに分かれてWSを行った。最初に個人で知床の魅力を考えてもらい、次に考えた内容をグループで共有し、その後再度個人で考え、最後に全体に向けて一人ずつ発表してもらった。羅臼会場のアンケートで「考える時間が短かった」という意見があったが、考える時間は多めに設けていたので意外な結果だった。参加者からは「昆布」や「シャチルーズ」など典型的な意見だけではなく、別角度からの意見も得られた。

三宅:全会場、一定数以上の参加者が集まったうえ、参加者の職業が様々で良かった。

秋葉:斜里会場では暮らしや文化に紐づく内容が多かった印象だ。今後は各会場で出た意見を他の会場とどのように繋げていくかが課題だ。

米田:1回目のWSでは各会場で色んな意見が挙がり、興味深い結果となったが、2回目のWSの集客に苦戦しているので広報に注力していきたい。

谷:今後は関連性の無いキーワードをどのようにまとめいくかが課題だ。

伊藤:羅臼会場は体調不良で急遽参加出来なかった参加者もいた。2回目のWSの広報では1回目に参加できなかった方についても積極的に声掛けをしたい。

(2) 第2回以降のWSの進め方について

資料 2-1 今後の検討スケジュールと議論ポイント <説明/知床財団>

資料 2-2 IP 全体計画の核となる「ストーリー」のアウトプットイメージ<説明/環境省>

山本:本会議に出席している方の日程調整を踏まえ、第4回作業部会は2月12日(水)の9:30～

とする。第 5 回の作業部会については羅臼町の議会の日程が決まり次第、調整する。2 月下旬にエコツーリズム検討会議があるので、それまでにある程度報告できるような形にする必要があることをご理解いただきたい。

柿沼: 資料 2-2 の「ストーリー」についてだが、具体的に何に使用するのか、改めて本会議に出席しているメンバーで認識を共有したい。

二神: 地域の「みなさん」が知床を訪れた観光客に対して、「知床はこんなに素敵なおとこだ」と紹介する際に使用できるものが理想だ。

柿沼: 「みなさん」というのは具体的に誰を指しているのか。

二神: 知床に住む地域の「みなさん」だ。

山本: 具体的な活用例を伺いたい。例えば、出来上がったものを、町民全員を対象に広報しやりに折り込むのか、もしくはビジターセンターのスタッフやホテル関係者などターゲットを決めて配布するのか。

二神: 実際に使用されるかは分からないが、最終的には地域全体に広め、地域の共通言語になるのが理想だ。

柿沼: このあたりについては今後の作業部会で練っていくという理解で良いか。時間をかけて作ったものが結果的に使われないというのはもったいない。行政関係の計画などは読まれないものも多い。

山本: 成果物の使用用途やターゲットが明確であれば、それを目指したストーリー作りが出来るが、現段階ではターゲットが明確ではない。WS でストーリー作りをしながら同時にターゲットを固めていくという作業になる。

伊藤: 地域住民へ伝えるツールとしては、地元広報への折り込みが最善だ。

三宅: 地域住民にストーリーを理解してもらい、それらを観光客へ伝えてもらうというのは難易度が高い。まずはガイドやホテル関係者、飲食店関係者など観光客に直接関わる機会が多い人が使用できるものを成果物として出すことを目指すべきではないか。それが徐々に地域住民全体からの理解へ繋がっていくと思う。ターゲットを広げすぎるとぼやけてしまう可能性がある。

秋葉: 集められたストーリーは内容も多岐にわたるため汎用性が高く、使用用途が多いのは良い点でもあるが、ターゲットや完成イメージはある程度決めた方がよい。例えば、新入職員研修の資料やガイドツアーの内容、ビジターセンターの映像に入れ込むなどは案としていかがか。

河井: ストーリーの位置付けによって使用用途が異なるかと思う。作られたストーリーは IP 全体計画の内側もしくは外側なのか、それとも例示される形なのか伺いたい。IP 全体計画の内側に位置

するのであればエコツーリズム検討会議でもこのストーリーが正しいか正しくないかという議論になりかねない。

二神: IP 全体計画の外側にあるイメージだ。

山本: 同意だ。ストーリー自体が IP 全体計画というわけではなく、今年度出来上がるストーリーを踏まえて、IP 全体計画がつくられるという認識だ。

初海: 「インタープリテーション」とはあくまで技法であり、知床の人が観光客に対して目の前の情報を裏のストーリーと共に伝えられることが重要な点だと認識している。地域の「みなさん」が使えるというのが理想ではあるが、看板や展示に使用したり PDF 化したりして地域住民へ配布するなど、アウトプットの着地点が決まっていた方が良い。その際には金銭的にも現実的な成果物が理想だ。その方が地域住民からの理解も得られやすい。

フォレスト: 少なくともビジターセンターなど公的な施設の関係者には共有するべきだ。

山崎: 資料 2-1 の第 4 回作業部会の予定では「IP 全体計画の構成案をつくる」となっているが、現段階で本会議に出席しているメンバーの中でこういった計画になるという共通認識が既にあるのか。そこが合致していないとターゲットも決まらない。

柿沼: 現段階では「ストーリーを作る」のが最優先であり、IP 全体計画のイメージは共有できていないという認識だ。

秋葉: IP 全体計画は誰が策定者となるのかも決まっていないのが現状だ。既に知床には様々な計画がある。複数の計画を乱立するのは良くないので、エコツーリズム戦略に本業務の要素を入れ込むイメージだ。また作られたストーリーをどのように使用するかは観光客が使用する交通機関やそれぞれが求める体験の深さなどによって変わってくる。本業務にも含まれている来訪者分析はそのためのものだと認識している。

柿沼: これまで環境省は「自然は守るもの」としていたが、近年では「地域住民にも理解してもらい、体感してもらおう」という方針となり、本業務はその象徴だと思っている。そのため、知床の魅力を「どこでどのように体感してもらおうか」を考える必要がある。第 1 回の WS でも「知床の魅力は食べ物だ」という意見が数多く出たが、実際にそれを食べられる飲食店は少ない。実際に魅力を体感できる場所をつくる事を目的に据えたほうが本業務にも意義が生まれると思う。

山崎: これまでの話を踏まえて、IP 全体計画はまとめられたストーリーを「どうやって伝えていくか」という手段をまとめたものという認識で良いか。

二神: その通りだ。今年度はまずはストーリー作りをし、それをどのように活用するかは来年度以降に検討する。

秋葉: 知床では地域観光のマスタープランとなっているエコツーリズム戦略があるか、IP 業務の内

容はそういった計画に落とし込むイメージをしている。

フォレスト:観光客は日本人だけではない。近年では中国語を話す利用者も多い。海外客を含めてどこまでターゲットを広げるかも検討すべきだ。

山本:IP 全体計画は海外からの観光客も対象として作られるという認識だ。

山崎:成果物はストーリーを語る人の内部用につくるのか、それとも外部用につくるのか。

山本:まずは内部用でまとめて、出す場所によって形や媒体を変えていくイメージだ。

柿沼:内部用と外部用の違いとは具体的には何を指すのか。

初海:内部用の対象は地域住民を指しているのか。地域住民は分かるが観光客が分からないもの、というものは、そもそもあるのか。

三宅:観光客は知床に勉強をしに来ているわけではないので、30～50 ページの情報は持ち帰れない。観光客が持ち帰れるのは50～100 字程度だ。

初海:今年度のゴールは核となるストーリーのテキスト化までなのか、具体的に観光客に伝えられる文字量にするのかどちらなのか知りたい。

山本:今年度は各ストーリーのテキスト化まで行い、観光客が目にするような成果物が出来上がるのは来年度以降という認識だ。

柿沼:今年度で「ストーリーづくり」までできるのか懸念している。WS の参加者はあくまで一住民であり、ファクト調査までを含んだストーリーをつくるのであれば、外部からの調査が不可欠だ。現行しているWS の内容と最終的に目指している成果物にギャップがある。

山本:仕様書にもファクト調査が含まれているが、WS を通してボトムアップ型でつくりあげていく中で、全てのWS が終了してからそのストーリーを裏付けるファクト調査を行うのは現実的に厳しい。一方で観光庁事業では調査に基づいた完成度の高いものが出来上がっていると聞いている。本業務のWS を通して、成果物として提出できるのは「ストーリーの箇条書き」程度かと思う。

柿沼:観光庁事業と類似している部分があると思うので、それらと融合していく必要があると思う。

初海:羅臼の第2 回WS では、1 回目のWS で出たキーワードの分類分けとその分類の結び付けを行い、1 回目のWS で出たキーワードを実際に体験できる場所などを出していく予定だ。場所などは地域住民だからこそ知っているものなど、地元ならではの素材が集められると思う。

(3) 関連事業（高付加価値なインバウンド観光地づくり事業）との連携について

資料なしく説明/一社知床しゃりく

山崎:来年度については観光庁で行っている事業とIP 業務の内容が被らないようにしたい。

柿沼: IP 業務を環境省が実施する意義は、自然をツーリズムとして活用することは結果的に自然を守ることに繋がる、ということを示せることだ。環境省が主導となって地域住民の方が感じる価値を「どのように利用するか」を考えてほしい。

河井: 完成したストーリーが観光客にとって面白いものか、ということも非常に重要な観点だ。ストーリーをつくると同時にそれが面白いものなのかも調べていく必要がある。また、ストーリーのファクト調査は膨大な労力が必要だ。実施した WS の成果物が、例えばノマドが作成した資料のようなものになる、と WS 参加者に説明しても良いのではないかな。

山本: ノマドの作成した資料は WS の参加者に見せても良いのか。

河井: 最終的なファクト調査が完了していないので、この資料を公に出すことは出来ない。参加者へ見せるのは問題ない。

柿沼: 第 2 回 WS でどこまで議論が深まるかにもよるが、ノマドの資料を参加者へ見せるとしたら 3 回目の WS が理想だ。

(4) その他

資料 2-3 第 2 回 WS 実施企画案と準備状況 <説明/知床財団>

山本: 今年度の目標はストーリー作りに必要となる要素をボトムアップ型で地域住民から拾い上げることだ。第 2 回の WS ではそれに必要な要素をさらに深掘りするという理解で良いか。

柿沼: 問題ない。

山本: 全体を通して南出さんから何かご意見はないか。

南出: 観光振興戦略会議における「観光振興計画」改定の議論の中でも住民と観光客を繋ぐ要素が必要だと言われており、IP 全体計画がその役割の一助になるかと思っている。そのため環境省が、完成させたストーリーや IP 全体計画を具体的にどのように使用するかを整理してくれないと話が進まないと感じる。

山本: 観光振興計画改定の策定はいつか。

南出: 今年度末の予定だ。

山本: 羅臼町の皆さんから何かご意見はないか。

伊藤: 改めて、この計画を誰が誰に向けて使用するものなのかを整理してから議論をすべきだ。

山崎: 観光庁事業で出た要素と本業務の WS で出た要素の重なる点が、両者にとって一番良い価値だと言えるのではないかな。

山本: WS の内容を観光庁事業で裏付けしてもらいたいようなイメージだ。誰が誰に向けて使用するもの

なのか、さらには具体的な使用の用途については第 3 回の作業部会の課題としたい。

(閉会)

3) 第3回作業部会

開催要領：

日時 2025年1月7日(月) 13:00～14:45

場所 オンライン(配信拠点:知床自然センター2階会議室)

議事次第：

- 1) 第2回WSの実施結果
- 2) 第3回のWSの進め方について
- 3) 関連事業(高付加価値なインバウンド観光地づくり事業)からの情報提供等
- 4) その他

出席者名簿(敬称略)：

構成	機関名	役職	氏名
専門家	なみうちぎわをあるこう合同会社	代表者社員	初海 淳
	Clutch.55株式会社	代表取締役	柿沼 宏明
部会員	一般社団法人知床しゃり	専務理事	河井 謙
	斜里町商工観光課	課長	南出 康弘
	羅臼町企画財政課	参事	三宅 悠介
	羅臼町産業創生課	産業創生係長	川口 勇也
オブザーバー	国土交通省 北海道運輸局観光部	次長	山崎 貴志
運営事務局	環境省 釧路自然環境事務所(事業発注者)		
	公益財団法人 知床財団(事業受注者)		

議事概要：

(1) 第2回 WS の実施結果

資料 1-1 第2回 WS の実施概要 <説明/知床財団>

資料 1-2 第2回 WS のまとめ <説明/知床財団・ファシリテーター柿沼・初海>

柿沼:WS 参加者より「この作業は何のためにやっているのか」「その先に何があるのか、自分たちのやっていることが何につながるのかが分からない」という意見がでている。第3回 WS では WS の目的について改めて補足説明することが必要だ。斜里及びウトロの第2回 WS では、議論が散しやすくプロモーションや旅行商品造成によりがちな議論になったため、サポートメンバーの役割が重要である。

山本:ウトロ会場・斜里会場の WS では、参加者が来訪者目線で考えることができています。また、議論が深まりやすい半面、違う方向に議論が進んでしまう印象だ。

初海:羅臼会場の WS で特徴的なのは、ストーリーに対して強い思いはあるのだが「来訪者にどう体験してもらうのか」という視点があまりない。その部分が次の WS のテーマでもある。

山本:羅臼会場は住民目線が強い。一方で、住んでいるからこそわかる魅力や気づけない要素も多くある。現在はファシリテーターが意見を集約し文章化しているので、これらを受けて第3回 WS では、参加者が来訪者に伝える視点で文章化し、テキストやタイトルをまとめていく作業に入りたい。ここまで、第2回 WS についてご意見はあるか。運営側としては、グループによって差はあるが、第2回 WS の到達点には何とか達している状況。ただし、前回作業部会で議題にあがったように、ノマドが作っているロングストーリーのようなものを WS 中に作ることは難しいため、端的なショートストーリーや、ストーリーのたまごが10個程度できあがるとよい。

山崎:ファシリテーターが上手く導いている印象。地域目線での知床の価値が出てきている。WS で出てきたものをストーリーのたまごとしてまとめ、今後はストーリーの肉付けやファクト調査をすること、また、来年度の事業の流れを大まかにでも説明することが、参加者の納得につながる。そうすることで参加者が第3回 WS で取り組む作業について理解できると考える。

山本:柿沼氏からもあったように「この先どうなるのか」という話は、参加者に説明する必要がある。

(2) 第3回の WS の進め方について

資料 2-1 今後の検討スケジュールと議論ポイント<説明/知床財団>

資料 2-2 IP 全体計画の核となる「ストーリー」のアウトプットイメージ<説明/環境省>

山本:イメージとして雲仙の事例のようなボリューム感でまとめればよいと考えている。伝えたい価値を一文で表現し、その下に150字ぐらいで価値を説明する文章がある。来訪者が「知床に来てみたくなる」と思える文章にまで持っていけるのが理想だ。第2回 WS まででは、既にテーマのカ

テゴライズが終わっているため、テーマごとにテキストを抜き出し、具体的な説明分をつけるところまでを第 3 回 WS のゴールとして持っていきたい。そのうえで、事務局の方で文章の編集をすることを考えている。このようなイメージでよいか。

二神: まずはストーリー (のたまご) を作り、その後、検討を進めていく。

山本: ノマドのストーリーは、細かいファクト調査に基づいて商品のようなストーリーになっている。山崎氏の発言のように、「地域の人々が見ている価値を、来訪者にどのように伝えていくか」が作業のキモだ。そこまで持っていきたいと考えている。

柿沼: 第 2 回 WS でだいぶ持ち上げてきたイメージを持っている。今後の持ち上げ方についてだが、各会場の作業の進め方を合わせるということであれば、ケースフォーマットとして雲仙のようなストーリーを例示する必要があると考える。参加者も WS の作業イメージが付きやすいと思うが、いかがか。

二神: 異論はない。

三宅: 今年度の環境省の業務は住民目線の要素を集めることと理解している。来年度以降、観光庁の事業と環境省の事業を統合するイメージがあるのか。

二神: お互い違った視点から積み上げているため、来年度かけ合わせて試すこともよい。

三宅: 最終的なアウトプットは、観光庁と環境省の成果をミックスしたものなのか。

二神: そこまで詰められていないが、そういうストーリーができあがるのもよい。

三宅: 最終的にどうしていくのかがわからないと参加者も戸惑う。前回は議題に出たが、住民目線の価値が来訪者に受けるとは限らない。要素としては必要だが、観光者目線でインプットして最終的なアウトプットをどのように出すかで変わってくる。そのような観点で行くと、住民に作っていただいたストーリーが来訪者に受けないこともあるのでは、と心配している。せっかく作ったストーリーが日の目を見ないと申し訳ない。住民目線のストーリーや価値も活かすべきであるが、参加者が来訪者目線をふまえて考えなければ難しい。

伊藤: 最終的な目的のリクエストについて参加者から「インタープリターガイド養成に役立つのか。具体的にどう動き出すのか」という質問が各会場から寄せられている。これからの事業として約 10 年後に実施する予定はあったが、改めて署内含めて修正しなければと考えているところだ。地域住民の意見の活かし方の点もノマドとクロスし、外向けに作っていくことを意識しなければならないと考えている。皆さんが求める「今すぐこれをやろう」という具体的な回答ができないことは申し訳ないが、地域を巻き込み WS を進められていることに関しては順調に推移していると感じている。WS のテーマである「地域住民からの声をボトムアップする」ということで、このような意見があがっていること自体は、喜ばしい事ととらえている。

秋葉:長期的なことよりも、まず来年度どうしていくのか話が見えてこない、落としどころがつかめず、アウトプットが見えづらい。今回のストーリーの盛り込み先は、エコツーリズム戦略にその要素を入れて、実態からその戦略運用や提案制度の中で使う筋書きで理解している。ただし、戦略にストーリーをどのように入れ込んでいくのかという点は年度内に検討し、それを活かした運用ができるかどうかについては別軸で検討が必要である。取り急ぎ、事業として来年度の組み立ての相談をしていく必要がある。第4回作業部会の活用も含め、具体的に今年の成果をふまえてどう進めていくのか。予算や事業発注の都合もあると思うため、先々の日程をふまえて検討する必要がある。来年度の事業の形など、今ある想定や決まっていることがあればお伺いしたい。

二神:今年度はWSでストーリーを作り、来年度はストーリーを活用した戦略を作っていく予定だ。事業自体の流れ、具体的なことはこれから皆さんのご意見を聞いていく。具体的なことは現段階ではお示しできない。

山本:第4回作業回は2月12日(水)にあるが、エコツーリズム検討会議の資料についても念頭に入れて実施する予定だ。第5回作業部会では、皆さんからご意見も出ている次年度についての議論をしていきたい。その議論に基づいて環境省には予算などについてもご検討いただき、可能であれば、岡野所長(釧路)と次年度についてお話いただきたい。

また、先ほども話題に出たが、第3回WSの冒頭に、今一度WSの目的を参加者に説明すべきと考えている。

二神:これまでのWSをふまえた第3回WSの段階であれば、参加者にリピーターもいるのである程度具体的な説明をしてもご理解いただけると思っているため、説明の場面を設けたい。

山本:「なぜIP全体計画を日本全国でやっているのか」について、環境省としての根柢の目的があるはずだ。IP事業計画の細かい説明ではなく、なぜ住民が参加して知床の価値や魅力を改めて洗い出しているのか、このWSを環境省がやることの意義を冒頭にお伝えいただきたい。

二神:ウトロの環境省保護官事務所内では、「地元の参加者にどう役立つのか」といった説明も必要ではないかという議論がなされた。

山本:皆さんからご意見はあるか？

山崎:WSの目的は、ストーリーから本を作るなど成果物の話ではなく、知床の価値や魅力を(住民目線で)出すことだと認識している。体験やガイド人材育成などに活用する、といった話は、エコツーリズム検討会議で検討していく内容と理解しているが、このあたりが曖昧であるように思う。

柿沼:ファシリテーターである身としても、このあたりを理解しきれていないまま、第1、2回のWSをこなしているのが現状である。

初海:国立公園の活用について、これまでは観光と環境の軸は分離されており制限されてきた。こ

れからは、国立公園の中に入って体験しながら魅力や価値に気づいてもうという流れがある。地元の方が信じている価値をボトムアップで出すことによって、それに共感したり、深い理解がある方に利用していただくためにWSを実施していると理解して、ファシリテーターをしている。

三宅:エコツーリズム戦略改訂後に、ガイドの養成や体験コンテンツの開発を環境省でフォローする意思があるのか。それは観光庁事業なのか。あるいは各々地元で活用していく、ということなのか。戦略と言われても地域の方には理解しきれず納得はできないと思う。そこに対して環境省が一緒に取り組む意思があるとうれしいと思う。

柿沼:WS で出た住民の意見が空玉になるのはよくない。次回はファシリテーターとスタッフで修正していく必要があるのではないかな。全く使われないストーリーが出ることを懸念している。

山本:今年度は、無理に修正せず地域目線を整理することが重要。地域の価値をテキストとして残していくことは、後々大事な要素になることもあり重要であると考え。第3回WS で出たストーリーは報告書に記載する。WS の大事な要素として住民の言葉を吸い上げるという点があると思うので、無理やり修正する必要はないと考える。

初海:ノマドが出した成果物が外向けに強いのは当然だが、WS でやっているのは地域主体でありプロから零れ落ちる価値や魅力を細かく拾い上げていることだと思う。報告書などで成果物として残し、2〜3行の文章と具体的な事実のようなものがセットで数個残るのがよい。

山崎:エコツーリズム戦略での活かし方についてはまた次の段階の議論である。

三宅:WS での作業は、素材集めと理解している。雲仙の例を出すと参加者たちはイメージでき理解しやすいが、あくまでも要素集めであるなら文言を詰める必要はなく、素材集めと割り切って徹した方が個人的にはいいと思う。

柿沼:最終成果物を考えずに、こちらで修正するのではなく残していく方針でファシリテートしていけばよいかな。

山本:その通りだ。その他に意見はあるか。今回の議論を踏まえて第3回WS の進行スケジュールについては、追って環境省とファシリテーターと検討、決定する。アンケートの内容について必須項目などご意見はあるか。特になければ、事務局で作成を進め、改めて確認させていただく。

(3) 関連事業（高付加価値なインバウンド観光地づくり事業）との連携について

資料なし<説明/一社知床しゃり>

三宅:次年度事業のイメージはどのようなものか。

山崎:ヒアリング調査は引き続き実施していく予定である。マーケティング調査を来年度も実施する。宿泊業者やガイド事業者の人材育成ができないかという話もあり、各所からの要望を合わせて今後の方針を地域の方と一緒に検討していく予定だ。

河井:ノマドのストーリーに厚みを持たせることは可能か提案をしている。観光事業者が事業を実施しやすくなるための準備を進めている。補足だが、ガイド事業者の人材育成は観光庁事業には入っていない。

(閉会)

4) 第4回作業部会

開催要領：

日時 2025年2月12日(水) 9:30～11:00

場所 ゆめホール知床 会議室1

議事次第：

- 1) 第3回WSの実施結果
- 2) 各エリアのWSのまとめ、成果物について
- 3) エコツーリズム検討会議への報告について
- 4) 関連事業(高付加価値なインバウンド観光地づくり事業)からの情報提供等
- 5) その他(次年度以降の見通しなど)



写真 2-2 第4回作業部会の様子

出席者名簿（敬称略）：

構成	機関名	役職	氏名
専門家	なみうちぎわをあるこう合同会社	代表者社員	初海 淳
	Clutch.55株式会社	代表取締役	柿沼 宏明
部会員	一般社団法人知床しゃり	専務理事	河井 謙
	斜里町商工観光課	課長	南出 康弘
	羅臼町企画財政課	参事	三宅 悠介
	羅臼町産業創生課	産業創生係長	川口 勇也
	羅臼町産業創生課	まちづくり担当課長	伊藤 芳征
オブザーバー	国土交通省 北海道運輸局観光部	次長	山崎 貴志
運営事務局	環境省 釧路自然環境事務所（事業発注者）		
	公益財団法人 知床財団（事業受注者）		

議事概要:

(1) 第3回 WS の実施結果

資料 1-1 第3回 WS の実施概要 <説明/知床財団>

参考資料 1 第3回 WS 企画内容・進行表

参考資料 2 第3回 WS 各会場レポート

参考資料 3 第3回 WS アンケート結果

- 特に意見なし

(2) 各エリアの WS のまとめ、成果物について

資料 2-1 WS の成果物（テーマとストーリーのたまご案）<説明/知床財団・ファシリテーター>

山本:WS の成果物について、観光庁のストーリーとの比較や地域行政の立場からの観点で何かご意見はあるか。

河井:WS の成果物について、観光庁の作成しているストーリーと重なる部分はある。今後、環境省と観光庁でどのように整理をしていくかが課題である。

山本:同じテーマで別々のストーリーが散在するのは望ましくないため、環境省と観光庁とで同じような価値は照らし合わせながら統一し、すり合わせをしていく必要がある。ウトロ、斜里と羅臼のWS の成果物のボリュームの差を埋める作業は進めていく。

伊藤:ストーリーのファクト調査の作業を進めていただき、知床半島としてまとめたものを作りたい。

(3) エコツーリズム検討会議への報告について

資料 3-1 エコツーリズム検討会議議事次第案 <説明/知床財団>

秋葉:6 日のエコツーリズム検討会議に向けた意見交換会を行った。専門委員の方々からは、IP 全体計画の全体の構成、全貌が見えないという指摘が主な意見だった。エコツーリズム戦略やその他既存のルールにさらに IP 全体計画も組み込むとなると林立しているため、どのように整合性をとっていくのかなどの指摘もあった。エコツーリズム戦略と IP 全体計画をどのように一体化していくのか、もしくは別々のものなのか、全体的な位置づけが見えていないという課題も挙げられた。また、国立公園・世界自然遺産に登録されていること自体が大きな価値であることについて、具体的な体験に落とし込み、外に発信していくためにビジュアルを意識したアウトプットを検討した方がよいというアドバイスを受けた。

20 日のエコツーリズム検討会議では、これらの意見をふまえ、IP 全体計画の現段階での進捗状況を共有する。

(4) 関連事業（高付加価値なインバウンド観光地づくり事業）との連携について

資料なし＜説明/一社知床しゃり＞

特に意見なし

(5) その他（次年度以降の見通しなど）

山崎:観光庁事業では、1 月末に次年度の事業予定や要望などを庁内で提出している。次年度は、地域の意見を取りまとめつつ、今後の活用についても検討も進めていく。なお、次年度予算は、今年度より減額の見込み。予算の決定は3 月中～下旬の予定である。

山本:現段階で想定している IP 全体計画の次年度事業について環境省に伺いたい。

伊藤:ストーリーブックの作成を検討している。今後のインタープリター育成支援にも踏み込み、ガイドの育成については各関係機関との打ち合わせなども実施しながら進めていきたい。また、ストーリーの普及に向けての活動も推進していきたい。両町の役場の方とは話を進めているが、周年事業に合わせて著名人やキャラクターを呼んだシンポジウムを開催予定であり、その際にはストーリーを混ぜ込んだプログラム内容歳、IP 計画のストーリーを地域住民含めて周知することを考えている。

山本:次年度の事業計画は作成するのか。

二神:作成する。ストーリーの普及を意識してストーリーブックという名前で作成を進めたい。

山本:ストーリーブックを作ることが IP 全体計画か。

柿沼:ストーリー、ストーリーブック、IP 計画など、単語とその中身の認識を揃える必要がある。

伊藤:「知床の価値を伝えていく」というのが IP 全体計画であり、そこから派生する活用的一种がストーリーブック、さらにその材料が(今年度の成果物の)ストーリーというような認識。今後、IP 全体計画を基に、環境省は映像作成も着手する。次年度以降は、今年度の WS の成果を活かしていきたいと考えている。

柿沼:ストーリーを作るだけでは意味がない。現在、欠けている部分が2 つある。1 つ目は、来訪者目線のストーリーにシクオリティをあげていくことやファクト調査をして知床の真実を伝えること。2 つ目は、どこでそれが体験できるのか。提供できるように担保すること。特に2 つ目を重点に取り組む必要があると考える。

伊藤:具体的には、知床五湖のレクチャー映像改修の検討が進んでいる。その際に、五湖の具体的な知識をレクチャー映像やガイドの試験の中に組み込むことなどを考えており、(今回のストーリーのたまごの)活用方法について今後ご相談をできたらと考えている。

初海:来訪者はストーリーがあるだけでは体験できないため、次年度は、コンテンツの整備と作成し

たブックや映像などのコミュニケーションの両軸を回していくことが理想的だ。

伊藤:ストーリーのファクト調査などを進めながら作業の整理をつけていき、同時に次年度に向けての予定について第5回目の作業部会で結論付けたい。

三宅:「ストーリーのたまご」はこの場で合意した意見ではなく、WSに参加者した地域の意見を整理したものであり、今後、観光庁事業で進めている観光目線での価値と混ぜ合わせ、地域関係者と認識を合わせていく作業をすると理解していたが、映像やストーリーブックの作成などアウトプットの話まで入ってくると、現在想定されているスケジュール感では少し早いと感じる。インナーブランディングも丁寧に進めていく必要がある。

伊藤:ストーリーブックのスケジュール感はまだ少し長めに考えている。次年度は何かしらのたたき台ができればよいと考えている。

三宅:完成版ではなく、サンプルのようなものができればよいという認識か。進め方に関してはこちらからは意見はないが、地域を巻き込んでいきたいと考えるのであれば、現状のままのスケジュール感では難しい。

柿沼:今後の計画の整理は環境省で進めていただいて、この地域に何が大事かを考えることが必要である。価値をストーリーにしてどう実行に移していくかは、以下の3点に集約される。

- 1つ目、来訪者目線でストーリーを磨く。ファクト調査を実施し事実を伝えること。
- 2つ目、地域の人々が語れるようにする。地域とのコミュニケーション。
- 3つ目、ストーリーが地域のアクティビティに落とされている。体験できる場所の提供があること。

初海:この3つの柱をお示しいただければ、こちらも作業に移れる。

山本:次年度計画は、現在環境省で内容を整理していると理解した。

伊藤:知床の価値について、改めて普及活動をするを少しずつ始めていきたい。ストーリーブックという目に見える成果物にしていく作業は進めていきたい。

山本:インナーブランディングのイメージの共有が必要と考えるが、普及活動というのは行政の観光担当などに対してイメージの統一を一緒にやっていくという理解でよいのか。

二神:これから検討していく。

南出:観光計画でいうと「ルシャ地区」「カムイワッカ全体の利用」「ホロベツ園地」「国立公園外」の利用も推進していくため、ストーリーに加えていただきたい。

三宅:計画として何を目指しているのか明確にならないと、今のように膨大に広がってしまい収拾がつかなくなる。

山本:WSの成果物を実際に五湖の映像の改修に活用するなど、具体的な事例を来年度の終わり

に見せられると、なんのためにやっているのかがわかりやすくなる。

山崎: IP 全体計画の概要の認識や次年度の予定、今後どの順序で作業を進めていけばよいというのかわからないので皆さん困惑している状況。参考に観光庁事業次年度の取り組みの全体像の共有をする。環境省としての今後の予定等も、このような形で示していただきたい。

伊藤: 後日、観光庁と個別にすり合わせさせていただく。

山本: 環境省の次年度の具体的な事業の動かし方を次回の作業部会で共有できるように、事務局側とも打ち合わせをしたい。第 5 回作業部会では、次年度の事業スケジュールの共有と観光庁との共同の仕方について議題にするイメージである。

河井: 環境省が作成した次年度計画が模式図化された資料を第 5 回作業部会で示していただきたい。

伊藤: 来年度以降、WS を追加で実施すべきなのかという点やストーリーの広がりについても、次回の作業部会にてご意見をいただければと思う。

(閉会)

5) 第5回作業部会

開催要領：

日時 2025年3月4日(水) 10:00～12:00

場所 羅臼町役場 2階 庁議室

議事次第

- 1) 適正利用・エコツーリズム検討会議の結果について
- 2) 今年度の成果物のとりまとめ状況
- 3) 来年度以降の事業のあり方について
- 4) 関連事業(高付加価値なインバウンド観光地づくり事業)からの情報提供
- 5) その他



写真 2-3 第5回作業部会の様子

出席者名簿（敬称略）：

構成	機関名	役職	氏名
専門家	なみうちぎわをあるこう合同会社	代表者社員	初海 淳
	Clutch.55株式会社	代表取締役	柿沼 宏明
部会員	一般社団法人知床しゃり	専務理事	河井 謙
	斜里町商工観光課	課長	南出 康弘
	羅臼町企画財政課	参事	三宅 悠介
	羅臼町産業創生課	産業創生係長	川口 勇也
オブザーバー	国土交通省 北海道運輸局観光部	次長	山崎 貴志
	一般社団法人知床羅臼町観光協会	事務局長	和久井 一躬
運営事務局	環境省 釧路自然環境事務所（事業発注者） 公益財団法人 知床財団（事業受注者）		

議事概要:

(1) 適正利用・エコツーリズム検討会議の結果について

資料 1-1 適正利用・エコツーリズム検討会議における意見等 <説明/知床財団>

参考資料 1 インタープリテーション全体計画の策定と活用 <説明/環境省>

河井: 資料を見ても結論が不明である。会議で意見が出ているがその結論はどこにあるのか。今後どのようにまとめていけばよいのか不明だ。IP 全体計画について今もってわからない。前回、環境省が作成した資料等で説明していただきたいと要望したが、曖昧なままである。IP 全体計画がストーリーブックに集約されてしまっていることに違和感がある。当初はそのような話ではなかった認識であったが、今後どうしていくのか議論すべきである。

河井: 資料 1-1 の④の設問にあたる回答の記載がないが、エコツーリズム検討会議で議論があった後、どのような整理になったのか。

秋葉: 環境省から IP 全体計画はストーリーブックとして作る理解であるのご指示をいただいた。それを基に次年度の構成の案を、資料 3 にお示した。

(2) 今年度の成果物のとりまとめ状況

資料 2-1 WS の成果物とファクト調査・バックデータの整理状況 <説明/知床財団>

資料 2-2 成果物のアウトプットイメージ <説明/知床財団>

柿沼: 観光庁事業で作成されたストーリーとの統合はどのように進めるのか。現段階で統合する予定があるのならば、ファクト調査をする意味があるのか。観光庁のストーリーと環境省のストーリーの最終的な活用は一致するのか。

山本: WS の成果物には地域目線のストーリーが含まれており、観光庁のストーリーとは異なる部分もある。現時点では、資料をピックアップしている段階でありノマドのように細かいファクト調査までには至っていない。

山崎: 観光庁では、来訪者目線でのストーリー構築とファクト調査が進行中。次年度に環境省が予定している取り組みを先行している状況だ。今後どのように環境省と統合していくかが課題である。IP ストーリーのファクト調査に関して、観光庁のファクト調査で既にカバーしている可能性があるため、無駄な労力を避けるためにも連携が必要である。

山本: 9 つのストーリーのたまごのリファレンスをピックアップする作業をしており、今年度事業の中ではここまでという認識である。その後の詳細なファクト調査については、次年度、観光庁のストーリーと被る部分は統一して二度手間にならないようにすべきと考えている。

柿沼: 一般の方々にとって、観光庁・環境省のストーリーは区別がなく同じように見え、複数のストーリーが混在すると混乱を招く恐れがあると思う。私見であるが、全てのストーリーを統一し地域

全体で活用できる形にすべきではないか。

秋葉:次年度の議論の中で、環境省は「ストーリーブック」という名の媒体を作成する方向性だ。ストーリーを観光庁と共同でつくり、地域の価値・資源などをストーリー化して一つの媒体として出し、そのストーリーを元にして各自で活用していく。観光庁は「外向けのコンテンツ」の制作を主導とし、環境省は「地域に浸透させていくことや人材育成」、地域のインナーブランディングをしているという大きな役割のイメージができないかと考えている。

山本:観光庁事業と環境省事業での成果物が合流することはできるのか。

柿沼:ストーリーブックという形にはめて考えず、地域に必要な形を考える必要がある。

山本:ストーリーブック以外で、概念的に来訪者に必要なものはあるか。

三宅:ターゲットを明確にし、それにあわせてアウトプットを検討すべきと考える。

南出:利用に結びつけるのならば、現在利用していない場所も含めるべきだ。できあがったテーマは9つだけだが、もっと幅広くあるはずだ。利用と結びつけるとエコツーリズム検討会議との関連もあると思うので難しいと思うが、検討していただきたい。あるいは、例えば、「知床の百科事典」といった、読めば知床のことが分かる冊子を作成し、地域が活用する形もあるかもしれない。

山本:エコツーリズム検討会議との連動も今後考えていかなければならない。読本の作成はボリュームが多く作成に時間がかかり、この事業ではやりきれないこともあるだろう。利用に結びつけるのならば、9つのテーマの中にある「カムイワッカ」について、次年度さらに膨らませ硫黄採掘の歴史などを掘り下げることで、周辺エリアの利用促進にもつながる可能性がある。

三宅:検討プロセスが違うのではないか。それならば、羅臼も先端部の利用をさせたいという利用の話が先行するはずで、WSで吸い上げた住民の価値のストーリーとはかけ離れてしまう。今回のIP事業で作成するストーリーが、利用されていないところを利用させるための足がかりにするためのものならば、議論の前提もメンバー構成も違うはずだ。

川口:町民から意見が出ないから触れなくてよいという考えではないはずだ。それでは行政が作業部会に出席する意義がない。

三宅:今回の作業部会5回目にして、依然として何をしたいのか明確でないために議論が混乱している。

秋葉:取り組みの正当性を示し、今後どのような価値づけをしていくのかを整理する必要がある。住民も含めて、そのような価値があり、来訪者にどのような体験を提供するのかを整理するべき。例えば、クマを見せる体験が知床の価値であるというのであれば、どこでどのように実現していくのか具体的に検討していく。そのためには場所やコンテンツの整理が必要であるが、現在は利用できない場所や整備が不十分なエリアがあるという矛盾がある。それをどう突破し繋げていく

のか、エコツーリズム戦略会議の場に反映させるべきかを明確にする必要がある。現在利用されていない場所を具体的な利用に広げていきましょう、という話には直ちにはならない。

山本:最終的な目標は、ストーリーが完成し町民から出た価値を理解すること。利用していないところを書き込むのは出口の話であり、それありきでの話では進めていない。町民から出てきたストーリーを細かく深堀すると、現在利用できない場所も出てくる。そういったところにも価値を感じ利用できるようにするために、今後検討していく必要があると思う。

三宅:ストーリーを体験させるための利用や環境整備は次のステップの話であり、その前段のためにストーリーを作っているということであれば、町民の意見だけだと弱い。観光庁の成果物や、あるいは来訪者目線での議論をもっと重ねて、いろんな視点から考えていく必要がある。

山本:今年は町民ベースで価値の吸い上げをしてきたが、次年度は中身の作り方についてすり合わせをしたうえで、メンバー構成も含めて検討していく必要がある。

初海:環境省は、地域住民の声を拾うインナーブランディング、観光庁は来訪者目線でプロフェッショナルなアウターブランディングを行っているという理解している。今回の IP 事業では、WS 参加者が価値あるストーリー(のたまご)ができたと言え、胸を張って言える成果物がなければならない。テーマ別で事実に基づいたストーリーがいくつかあり、それを町民が語れるものになるとよい。WS 参加者にもしっかりと共有する必要がある。

山本:WS 参加者に共有する前に、観光庁のストーリーをいただいて確認することはできるのか。

河井:問題ない。博物館チェックは終わっている。今後はチェックを繰り返して精度を上げていく。コンセプトメイキングをするためのファクト調査をメインで進めてきた。完成したストーリーを誰がどう使っていくかは検討中である。

河井:8 月に観光庁と環境省のすり合わせをした当初は、価値を整理する作業を観光庁が進め、対町民や地元の方向けの作業や計画の位置づけは環境省が実施するという分担であったが、現在状況が分からなくなってきた。

資料 2-3 携帯ビッグデータの解析状況について 〈説明/知床財団〉

山崎:観光庁では個別のヒアリングを秋から実施している。季節によってインバウンドや年代別に次年度もヒアリングを続け、ビックデータと今後どうリンクしていくのか検討していきたい。

秋葉:どういったターゲットやマーケットがあるのかを把握することが大事な視点だと考えている。

初海:マーケットデータの分析については、プロにサポートしていただくことも大事である。

秋葉:構造的な示しが必要であり、プロの視点も必要になると思う。

(3) 来年度以降の事業のあり方について

資料 3-1 インナーブランディングの進め方について <説明/知床財団・ファシリテーター>

河井: IP 全体計画がストーリーブックであるというのは、環境省全体として結論を出しているのか。
全国的に統一した見解か。

柿沼: IP 全体計画はストーリーブックであるという認識は、環境省全体では統一されていないと思う。

秋葉: 実際のところ、まだそこまで決まっていないと思う。策定基準や課題整理など現在本省で検討がなされている様子。今まさに、IP 全体計画についてのガイドラインを作っている最中である認識だ。

柿沼: 名称が重要なのではなく、地域にとって何が価値なのか整理することや、利用者がその価値に共感すること、知床の価値が維持・発展できる仕組みづくりに地域が取り組むことが何よりも大事と考える。

山本: 環境省としては、地域への浸透や普及などインナーブランディングに注力していく理解だ。

柿沼: 規制関係の整理やガイドとの関係の取り組みも環境省の役割として、ある理解だ。

山崎: ストーリーのたまごの数について、観光庁としては規制のある場所については、コンテンツ化ができないため扱うことはできない。環境省がインナーブランディング中心で進めていくならば、先端部の利用やルシャの利用などについて抜け落ちていてよいのかという懸念がある。ストーリーとして語る範囲について議論が必要と考える。

山本: 9 つのたまごだけでは確かに抜けて落ちているところもある。インナーブランディングとして進めていくなれば、拾い上げ作業など次年度に改めて整理する必要がある。

秋葉: 住民から観光課題などを無理やり引き出す話でもない。

三宅: コアになるストーリーはしっかり作るべきである。WS の結果だけでなく、世界遺産としての価値が漏れていないかなどの視点で確認や改めての検討を行い、次年度一年間かけてストーリーの中身の作成に取り組むとよいと考える。観光庁にも協力いただけるならノマドでブラッシュアップしてもらい、この部会メンバーで価値が漏れていないのか確認したり、知床全体として伝えたいコアなストーリーは何かなどを整理できたりしたらよいと思う。

山本: 地域に何を浸透させるのかが現在明確ではないため、重要な指摘である。ちなみに、ストーリーの作り方のプロセスについては、観光庁と環境省で真逆である認識だ。

河井: ノマドの基準は面白いかどうかであり、伝えるべき価値や学び、という観点は含まれない可能性がある。それをどのようにボトムアップ型でのストーリーと融合させていくかは課題である。

三宅:来訪者に伝えるべきものはノマドが全て正しいというわけではないが、外から来た方が面白いと思わない部分は多少切り捨てる必要もある。地域で上がってきたものを来訪者目線でブラッシュアップするべきである。

柿沼:斜里、ウトロから出てきたストーリーはノマドが作成したものと近い部分もある。

秋葉:地域目線が出てきた価値に、新しい視点や気づきがある可能性がある。ストーリーとして使えない面白くないものはストーリーには入れないというご意見もあったが、そこを体験できるようにするための議論を行うなど、時間はかかるが両方の視点は重要である。この作業が次年度の作業として取り組めればよいと思った。

資料 3-2 来年度の検討体制とスケジュール <説明/環境省>

南出:園芸スイレンの駆除がなぜ IP 全体計画の事業と関係あるのか。

河井:スイレン除去を IP 全体計画としてやることに違和感がある。

伊藤:ガイドの育成の話も出ていたと思うが、スイレンが課題になっている五湖は溶岩の大地であることや入植の歴史があることなど IP 全体計画に関係があると考え

山本:IP 全体計画のストーリー要素が五湖という場所に入っているため、関連事業として紐づけたということか。

伊藤:その通りだ。スイレン除去と IP 全体計画の関係については改めて整理する。

(4) 関連事業（高付加価値なインバウンド観光地づくり事業）との連携について

資料なし<説明/国土交通省 北海道運輸局観光部・一社知床しやり>

特に意見なし。

(5) その他

山本:本日は、次年度の進め方を中心として議論していただいたが、事業内容やスケジュールはまだ流動的であったり、ストーリーを作りこむことに注力すべきといったご意見も頂いたので、本日のご意見を踏まえて次年度の事業内容・スケジュールについて環境省の中でいったん整理し、次年度に向けて進行していくことになる理解である。

二神:環境省の予算付けは完了していて、次年度の事業内容・スケジュールなど詳細については、観光庁とすり合わせをして進めていく。

南出:次年度は作業部会の開催はあるのか。

二神:引き続き開催する予定はある。年度明けに業者が決まった段階で、作業部会のメンバーや開催についてご相談したい。

(閉会)

3. 地域資源および価値の整理

1) 資源及び地域の価値に関するワークショップの開催

地域資源を洗い出し、その価値を言語化することを目的とした地域にワークショップを開催した。地域関係者等に親しみを持って参加してもらうため、一連のワークショップの名称を「みんなで持ち寄る『シレットコのコト』」と題した(図 2-2)。

ワークショップの対象者は、知床国立公園の保全や利用に係る関係者や地域住民とし、広く参加の機会を設けるため、斜里町市街地・ウトロ地区・羅臼地区の 3 会場で 3 回ずつの計 9 回実施した。募集にあたっては、1 回あたり 20 名程度の参加者定員で公募するとともに、継続した議論を行うため、事務局からも個別に参加依頼を行った。

開催準備として、募集チラシの作成(巻末資料 2-1 に収録)、申込受付、会場手配、資料作成等を行うとともに、ファシリテーターの手配を行った。ファシリテーターは外部の作業部会の専門家に依頼し、規定の謝金と旅費の支払いを行った。

当日は会場準備と進行を行った。会場準備にあたっては、参加者の情報収集やアイデア出しのために既存の発行書籍やパンフレット類、Web サイト等を洗い出し、会場に参考資料として設置した(表 2-2)。ワークショップの実施後には、参加者から出された意見を基に、資源や価値の整理を行い、作業部会に報告した。また、開催状況を関係者に報告し、さらなる参加意欲を喚起することを企図し、開催レポートをブログ形式で発信し、SNS 等を用いて拡散した(図 2-3)。開催レポートは巻末資料 2-2 に収録した。



図 2-2 ワークショップのチラシ(左:1回目、中央:2回目、右:3回目)

表 2-2 ワークショップ会場に配置した図書一覧

資料名	発行元
しれとこライブラリー（1 巻～10 巻）	斜里町立知床博物館
郷土学習シリーズ（第 1 集～第 20 集）	斜里町立知床博物館
知床博物館 特別展図録（第 1 回～第 42 回）	斜里町立知床博物館
海と森のドラマ知床 オホーツク回廊に行く	響文社／読売新聞北海道支社編集部編
パークガイド知床	一般財団法人自然公園財団
日本の国立公園	環境省自然環境局国立公園課
岐路あり 友あり	藤谷 豊
よみがえれ知床	斜里町／朝日新聞出版新書編集部
知床開拓スピリット	拇嶺レイ写真集／柏艚舎
知床・ウトロ海のハンドブック	知床ウトロ海域環境保全協議会
銀の海峡 魚の城下町らうす物語	羅臼町
知床からの出発	野生生物情報センター編／共同文化社
続・羅臼町の地名について	羅臼町郷土資料室
知床半島の山と沢	伊藤正博／共同文化社
世界自然遺産 知床とイエローストーン	知床財団
知床と遊ぼう。（パンフレット）	特定非営利活動法人知床斜里町観光協会
羅臼湖（パンフレット）	環境省
知床世界自然遺産身上書（パンフレット）	北海道
知床ウトロまち歩きマップ（パンフレット）	特定非営利活動法人知床斜里町観光協会
東オホーツク・知床エリア見所マップ	一般国道 334 号斜里－ウトロ間路線連絡会議

 知床自然センター
@shiretoko_NC

【シレットコのコト実施レポート📄】

～みんなで持ち寄るシレットコのコト～
第2回ワークショップが昨年12月にウトロ、斜里、羅臼で開催されました😊

各会場の様子をブログに掲載いたしましたので、ぜひご覧ください✓

【各会場レポートはこちら👉】

 活動ブログ | 知床財団
shiretoko.or.jp

 知床自然センター
@shiretoko_NC

【参加者募集！みんなで持ち寄るシレットコのコト】

標記ワークショップが斜里、ウトロ、羅臼の3会場で開催されます。どなたでも無料でご参加いただけます。どの会場もワークショップの内容は同じです。参加しやすい会場にお越しください😊

申込はこちら👉
docs.google.com/forms/d/e/1FAI...



 知床財団
Shiretoko Foundation

知床財団の活動 | ミニマルのこ | ネットショップ | 知床財団について

REPORT
活動ブログ

TOP > 活動ブログ

 2024年12月17日 斜里会場レポート
2024年12月17日 斜里会場レポートの続きを読む
(2) 2024.12.17

 2024年12月18日 ウトロ会場レポート
2024年12月18日 ウトロ会場レポートの続きを読む
(2) 2024.12.18

 2024年12月19日 羅臼会場レポート
2024年12月19日 羅臼会場レポートの続きを読む
(2) 2024.12.19

 2024年12月20日 斜里会場レポート
2024年12月20日 斜里会場レポートの続きを読む
(2) 2024.12.20

 2024年12月21日 ウトロ会場レポート
2024年12月21日 ウトロ会場レポートの続きを読む
(2) 2024.12.21

 2024年12月22日 羅臼会場レポート
2024年12月22日 羅臼会場レポートの続きを読む
(2) 2024.12.22

 2024年12月23日 斜里会場レポート
2024年12月23日 斜里会場レポートの続きを読む
(2) 2024.12.23

 2024年12月24日 ウトロ会場レポート
2024年12月24日 ウトロ会場レポートの続きを読む
(2) 2024.12.24

 2024年12月25日 羅臼会場レポート
2024年12月25日 羅臼会場レポートの続きを読む
(2) 2024.12.25

 知床財団
Shiretoko Foundation

知床財団の活動 | ミニマルのこ | ネットショップ | 知床財団について

REPORT
活動ブログ

TOP > 活動ブログ

2024.12.28

みんなで持ち寄る「シレットコのコト」第1回
斜里会場レポート

1月10日（月）、斜里にて「みんなで持ち寄るシレットコのコト」が開催されました。

みんなで持ち寄るシレットコのコトとは？



2024年は知床国立公園開園50周年であり、2025年には世界自然遺産登録10周年を迎えます。これらの自然文化遺産のあり方や、観光利用のあり方について知識や気づきも深められています。

一方、こうした「あり方」を発信する土壌の未熟として、地域の魅力（＝知床らしさ）や個性（＝大斜し・小斜し）を整理し、価値のあるストーリー（＝ストーリー）としてまとめることが重要だと。



地域の人々によって、知床の魅力はさらに深まるとしています。

図 2-3 ワークショップの SNS での広報と実施レポートのホームページでの発信

2) 第1回ワークショップの実施概要と結果

■ 実施概要

斜里会場:

日時:2024年11月25日(火)18:30~20:30

場所:斜里町総合保険福祉センターばると21

参加者:27名(教員、町職員、ガイド、地域おこし協力隊、地域住民など)

運営関係者:環境省5名、ファシリテーター1名、知床財団9名

ウトロ会場:

日時:2024年11月26日(水)13:30~15:30

場所:斜里町漁村センター

参加者:15名(会社員、ガイド、団体職員、飲食業など)

運営関係者:環境省5名、ファシリテーター1名、知床財団9名

羅臼会場:

日時:2024年12月4日(水)18:30~20:30

場所:羅臼町民体育館(らうすぽ)

参加者:17名(町議会議員、漁師、自営業、観光業者など)

運営関係者:環境省2名、ファシリテーター1名、知床財団6名

第1回のテーマ:

「他地域にない特別なもの」「大切にしたい特別なもの」を参加者同士で抽出し、共有する。



写真 2-4 WS で活用された知床に関連する資料やチラシ類とワークシート

■ 実施内容と結果

第 1 回ワークショップでは、ファシリテーターの進行の下で、参加者に「知床の価値」についてワークシート(巻末資料 2-3)を用いて自由に意見を抛出してもらった形とした。ワークシートから抽出された各会場のキーワードをまとめ(巻末資料 2-4)、テキストマイニングしたものを図 2-4 に示す。WS 終了後には参加者へアンケートを行った(巻末資料 2-5)。

＜ワークショップの各会場で出た「知床の価値」の一部＞

斜里会場：

野生動物の豊かさ：エゾシカやキツネが日常的に見られる

流氷： 流氷が見えるスキー場は他にはない特別な魅力

食文化： 地元の新鮮な食べ物の美味しさが格別

地域イベント： ねぶた祭りなどの地域文化の魅力

ウトロ会場：

アイヌ文化： 知床半島に由来するアイヌ語の地名が魅力的

漁業文化： 日本一のサケの町

漁師の仕事や水揚げの様子を間近で見られる特別な体験が可能

動植物の多様性： 動植物の種類が多く、撮影対象が豊富で飽きない

自然と歴史のつながり： 地形や景色が命の始まりや生活の歴史を物語る

羅臼会場：

景観の美しさ： 国後島から昇る朝日の美しさは格別

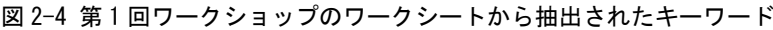
温泉文化： 地元の人と交流できる「熊の湯」が人気

漁業の技術： 羅臼昆布や伝統的な漁法が誇り

海の多様性： 海水温の大きな変化が多様な海洋生物を育む特別な環境



写真 2-5 第 1 回ワークショップ会場の様子（左：斜里、右：ウトロ）



3) 第2回ワークショップの各会場の実施概要と結果

■ 実施概要

斜里会場：

日時:2024年12月18日(水)13:30~15:30

場所:ゆめホール知床 会議室1

参加者:11名(町職員、公務員、地域おこし協力隊など)

運営関係者:環境省3名、ファシリテーター1名、知床財団6名

ウトロ会場：

日時:2024年12月17日(火)18:30~20:30

場所:知床世界遺産センター

参加者:16名(自営業、団体職員、中学生など)

運営関係者:環境省2名、ファシリテーター1名、知床財団5名

羅臼会場：

日時:2024年12月20日(金)18:30~20:30

場所:羅臼町民体育館(らうすぽ)

参加者:14名(観光船事業者、公務員、牧場作業員など)

運営関係者:環境省3名、ファシリテーター1名、知床財団6名

到達目標：

第1回WSで抽出された価値をカテゴリごとに分類し、価値を実際に体験できる場所や、具体的に何を来訪者に体験してほしいのか等を議論する。

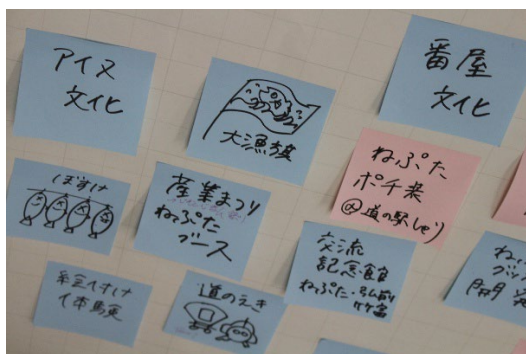


写真 2-6 付箋を用いてアイディア出しや共有をした(第2回ワークショップ)

■ 実施内容と結果

1 回目で参加者から出てきた「価値」のキーワードを 4 つのカテゴリに分類し、それぞれのカテゴリにおいて来訪者目線での価値の具体化、見える化、整理を行い(図 2-5、図 2-6、図 2-7)、各会場のそれぞれ班のまとめは巻末資料 2-6 に収録した。

斜里会場：

- ①自然 …「知床半島」という凝縮された自然環境が生態系の多様性を支えている。
- ②伝統・文化・歴史…ねぶた祭りは津軽藩士との歴史的つながりが魅力。
- ③産業・暮らし・食…漁業は持続可能性を重視し、研究された漁法で高い成果を維持している。

ウトロ会場：

- ①伝統・文化・歴史…しれとこ 100 平方メートル運動を国内外に発信し、若い世代への啓発を強化。
- ②産業・暮らし・食…サケの漁業や「サケテラス」の体験を通じて産業の現場を知る。
- ③自然(動植物)…サケを起点とした海と陸をつなぐ生態系が話題が中心。
- ④地理・地形…知床五湖やカムイワッカ湯の滝など、「Fire and Ice」と形容される景観が特別。

羅臼会場：

- ①自然(自然と暮らしが密接)…自然に基づく生活スタイルが地域独自の魅力。
- ②自然(生物の多様性)…流水がもたらす栄養豊富な環境とそれを活かした観光体験がある。
- ③産業・暮らし・食(漁師と猟師の文化と食)…漁業と狩猟の体験を組み合わせたツアーを提案。
- ④地理・地形(急峻な地形) …地形の美しさだけでなく、霧や断崖絶壁に生息する海鳥など動植物の価値にも注目。



写真 2-7 第 3 回ワークショップの会場の様子

WS グループ発表内容（斜里・ウトロ）

- ・ 知床の自然環境（海・山）を楽しむ地元文化があること
 - ・ 楽しむために良い場所、良い時期、良い方法を知っている
 - ・ 古くを知る語り部がいるうちに継承したい→どうやって？学校の授業やガイドツアー、博物館等で知って→観光客の人たちも体感
 - ・ 知床 100 平方メートル運動
 - ・ 人が一度拓いた場所⇔自然の対比
 - ・ 全国から認められ多くの人たちに大切にされている場所
 - ・ どうしてこの運動が始まったのか。全国で見ても例の少ないナショナル・トラスト運動等。これらを深く知り興味を持ってもらいたい。実際に運動に参加してもらいたい
 - ・ 「サケ」を起点とした生態系。サケが多い要因は産卵しやすい環境があること。それらは流水から得られる栄養分や、火山がつくりだした川などが存在しているからだ
 - ・ 春夏秋冬・海の恵みや産業の魅力がある
 - ・ サケ、マスの漁獲量は日本一！
 - ・ 美味しいサケがたくさん採れるだけでなく、春夏秋冬の漁師の仕事ぶりや移住先としても発信できる魅力がある
- なぜならば、冬は、漁師は定置網や重機、クレーンなど自前で持てるほどの経済力があること。この時期の漁はないけれど、自前の重機で迅速丁寧に町の除雪をしてくれる
- ・ 春は、クレーンを使用して大きな定置網を修理し漁の準備作業の様子を見ることができること。技術のある（深く潜り海中で作業をする）潜水士がいること
 - ・ サケ、マス孵化場でサケの稚魚を養育し、放流していること
 - ・ 夏から秋は、漁の時期。サケ、マスが溯上する様子を身近な河川で見学できることやサケテラスから漁師の仕事の様子や実際に採れた魚を見ることができること
 - ・ 漁師はお金持ち。豊かな自然と産業があるので、観光客から移住者にする魅力がある
 - ・ サケテラスで引退した漁師さんや漁師の奥さんなどがガイドしてくれたらいいな
 - ・ 孵化場で何をしているのか知りたい。見学ツアーをもっと企画してほしい
 - ・ カムイワッカ湯の滝登りで火山やバイオマット等について学べる
 - ・ 流水ウォークで流水について楽しみながら学べる
 - ・ 観光船でも火山・流水の働きについて学べる
 - ・ 知床では体験しながら「地球は不思議。地球は凄い！」ということは感じる・学べる
 - ・ 英語では"Fire and Ice"と言える：その魅力的なコンビネーションはここで体験できる
 - ・ 「地球に生まれて良かった！」と感じられる

図 2-5 WS グループ発表内容（斜里・ウトロ）

WS グループ発表内容（斜里・ウトロ）
「参加者一人ひとりの『短いストーリー』案」

- ・知床の自然、海、山を楽しむ文化がある。楽しみ方を地域の人たちが良く知っている
- ・知床ってどんな場所？→ヒグマが高密度に生息する場所→自然？クマ？観光？→悩みながらいろんな人たちが考え工夫し実践している場所
- ・「自然の大切さを知り、本気で自然を守った結果が、現在の知床国立公園、世界遺産の姿」→ここに至る経緯そのものを知る上で知床 100 平方メートル運動の自慢できる歴史
- ・「しれとこ 100 平方メートル運動」→奇跡ともいえる食物連鎖がなされている自然がある場所に木を植え協力したい人たちが寄付をしてくれている
- ・「海山を楽しむ文化」→昔はタコやウニを自由に採って食べることができたが今は漁業権の問題等があり自由に出来ない事実を受け止め、昔を知っている人のことも大切にし、昔に近づきたい
- ・海山が近く、それゆえの地形、気象、生物の特殊性がある。→流氷への対応、ヒグマとの付き合い方等から知床ならではの文化（ストーリー）が生まれたと思う
- ・地元の人のヒグマの話題の多さからうかがえるヒグマとの距離の近さ＝人の生活圏とクマの生活圏の近さ
- ・知床には生態系の繋がりがもたらす自然が沢山ある。生態系のつながりの代表的な生き物は「サケ」。知床には火山の活動によってできた川が沢山ある。川が沢山あるということはサケの過ごせる環境が沢山あるということ。そのサケは知床の大切な産業物の一つ。サケを見ることができる川やサクラマスはおすすめの観光スポット
- ・動物、気象、地形などの要素がうまく絡み合って体感、体験できるコトモノが多くある。
- ・どの季節に訪れてもアイヌの人々が神と名付けた動物に出会うことができる
- ・人も動物も多く利用している「サケ」は身近でありながらキーポイントともなる動物
- ・流氷は言わずもがな知床を代表する自然現象の一つである
- ・海と陸をつなぐサケは知床の生態系の象徴だった。・住民が知床について知り、多くの人で自然を守って知床の今をたくさんの人に伝えることが大切
- ・サケを起点にはじまる生態系の始まりから終わりを実際に見ることができる
- ・カムイワッカ湯の滝登りをすると、原始の地球と生物発生の秘密が分かるかもしれない
- ・知床の地形は火山と流氷で出来ているんだよね
- ・知床は、テーマパークと博物館のいいところ取りな場所。遊べるし学べる！！
- ・プユニ岬から見る夕陽（Fire）と流氷（Ice）のコラボレーションは何度見ても感動
- ・是非、Experience it! Fire and Ice Collaboration!
- ・知床を体験すれば、世界について、そして自分自身について多くのことを学ぶことができます！

図 2-6 WS グループ発表内容（斜里・ウトロ）

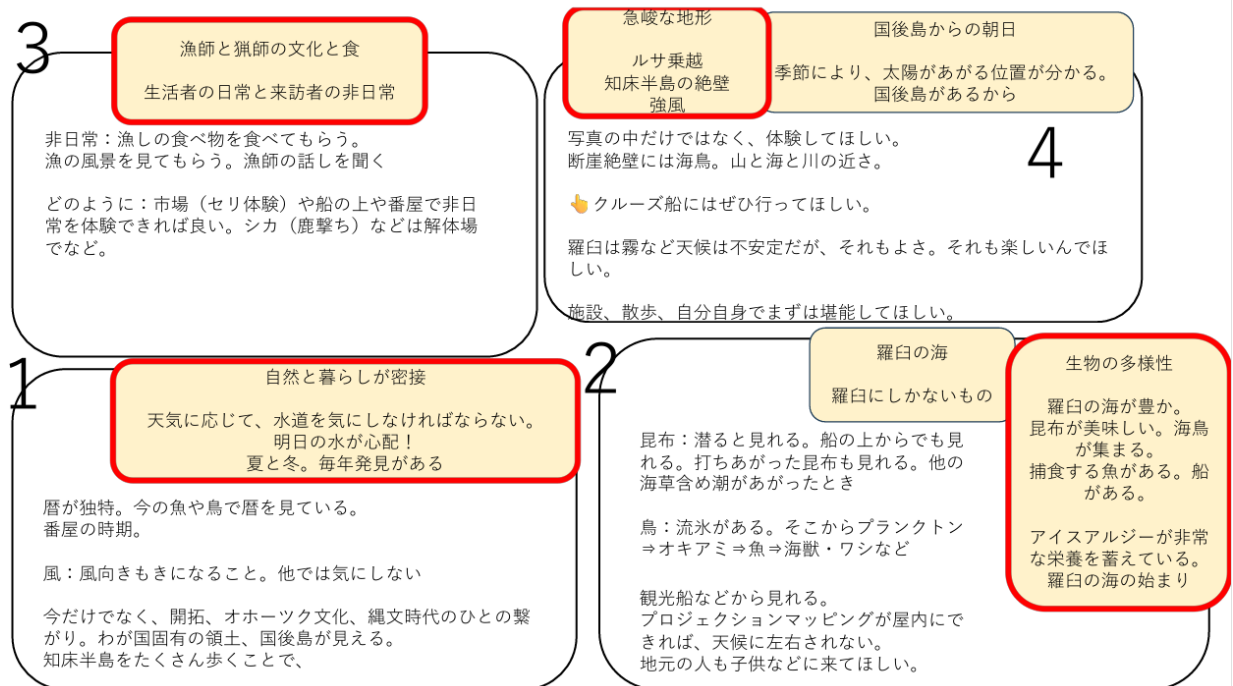
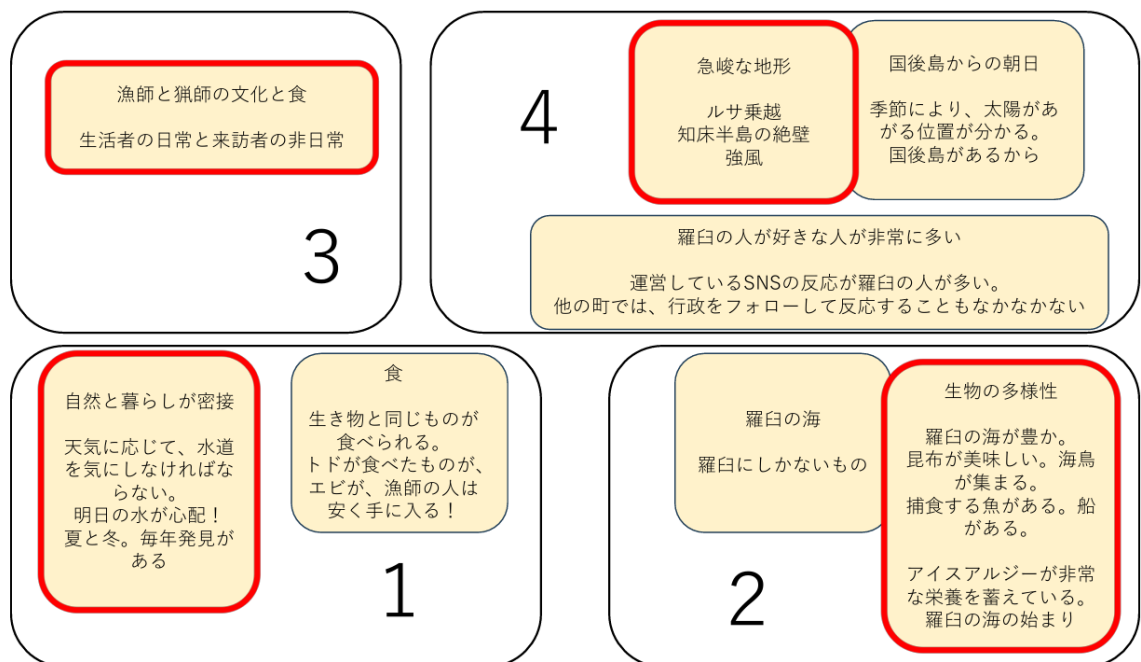


図 2-7 羅臼の WS 取りまとめシート

4) 第3回ワークショップの各会場の実施概要と結果

■ 実施概要

斜里会場:

日時:2025 年 1 月 15 日(水)18:30~20:30

場所:ゆめホール知床 会議室 1

参加者:12 名(団体職員、大学院生、町職員など)

運営関係者: 環境省 2 名、ファシリテーター1 名、知床財団 7 名

ウトロ会場:

日時:2025 年 1 月 16 日(木)18:30~20:30

場所:斜里町漁村センター

参加者:7 名(ネイチャーガイド、漁師、町議会議員など)

運営関係者:環境省 3 名、ファシリテーター1 名、知床財団 6 名

羅臼会場:

日時:2025 年 1 月 17 日(金)18:30~20:30

場所:羅臼町コミュニティセンター

参加者:11 名(観光船事業者、町議会議員、非常勤国家公務員など)

係者:環境省 3 名、ファシリテーター1 名、知床財団 8 名

到達目標:

第1回・第2回WSで整理した価値や魅力を、来訪者向けに向けて伝えるための文章に端的にまとめる作業をする。



写真 2-8 第3回ワークショップのグループワークの様子(羅臼)

■ 内容と結果

- ・班ごとに「小ストーリー」を2～3行程度の文章にまとめた。
- ・地元住民だからこそ知る魅力や視点が集まり、来訪者にとって「体験価値の高い」内容が整理された。
- ・各班が具体的なストーリーを短い文章にまとめることができ、10個のストーリーの素材が集まった(図2-8)。各班のまとめは巻末資料2-7に収録した。

参加者によるショートストーリー案の提示 (斜里①～④、ウトロ⑤～⑥、羅臼⑦～⑩)
①「一次産業（漁業・農業）を担う人の顔が見える町」 ②流水から始まる壮大な知床ストーリー。流水から始まる命の循環。流水が繋ぐ命 ③知床の全ての始まりである「流水」を通じて、生態系の一部であることを実感・体感する ④対・自然、野生動物、隣国…「工夫」と「ロマン」と「語り継ぐ」ことでつながれてきた人々の歴史がある ⑤なぜ全国から寄付が集まったのか？～どんな魅力が知床の森にあったのか？ ⑥「火山にTouch!」火山エリアで自然を体感できる世界一ユニークな場所。アイヌの人たちが神の水と呼んだ「カムイワッカ湯の滝」 ⑦陸の王者ヒグマ、海の王者シャチ、空の王者オオワシ、自然の王者が集う知床。豊かな生態系の循環の中で自分を知り、生の実感を得る ⑧ルサの強風やそこからの景色に代表されるような極端な天候や急峻な地形は知床ならではの山、川、太陽の繋がりをもたらし、イメージ像を眺めるだけでは得られない感動を与えてくれる ⑨厳しい自然の中にある羅臼に漁師と猟師が潮の匂い、血の匂いにまみれて生業として生きている。そこには長い時間をかけて紡いできた誇りがあるからです。羅臼に滞在することで命を五感で味わう体験が出来ます ⑩オホーツク文化から変わらず続く暮らしと厳しい自然と複雑な地形が育てる海と山の食材。その時々を楽しめるところ羅臼。だからまたいくの。

図2-8 10個のストーリーの素材

4. 地域の価値を伝えるストーリー案の作成

3つのエリア(斜里、ウトロ、羅臼)で開催したワークショップで地域資源の抽出と整理、見える化を行い、ワークショップにより抽出された地域資源とその価値を言語化し、テーマとストーリー案(=ストーリーのたまごをまとめ、合計で9つの案が完成した、ストーリーのたまごは、遺産地域周辺を含めた地域の「自然」、「地理・地形」「伝統・文化・歴史」、「産業・暮らし・食」の4つのカテゴリに基づき、各資源とストーリーの価値とを結びつけ、一貫性をもってその魅力を伝える内容に整理した。

斜里およびウトロエリアでは、テーマとそれに付随する文章の作成、羅臼エリアでは、テーマと文章の他に、ストーリーを伝えるためのお勧めの場所や体験の事例抽出までをストーリーのたまごに落とし込んだ。

【カテゴリ：自然】

知床には、流氷からはじまる命の循環、流氷が繋ぐ命がある

シベリア海岸のアムール川河口で生まれた流氷は、季節風や海流によって 1,000km 以上も離れた知床に毎年やってきます。知床は流氷が見られる南端の地でもあります。そんな流氷は知床の人々の生活の一部となっていて、季節の移り変わりを知らせてくれたり、潮の干満や天候により日々違う顔を見せてくれたりします。さらには、「流氷ウォーク」などのアクティビティを通じ、人々は流氷と直接触れ合い、流氷を体感することもできるのです。

流氷は、知床の海・陸の生態系のつながりの源となっていることも忘れてはいけません。流氷が着氷している時期は、漁師さんも漁に出ることは出来ませんが、漁師さんは「流氷の時期は海を休めて海を豊かにする時期」と言います。それは、流氷の下で資源が保護されるとともに、流氷によって大量の栄養が運ばれてくるからなのです。流氷の中に閉じ込められていた植物プランクトンが春になると大増殖し、それをエサにする動物プランクトンが大量に発生します。今度は、これを食べるために魚たちが集まってきて、その魚を求めてアザラシやトドがやってきます。そして、生態系のトップに君臨するシャチがあらわれます。このように知床の海には流氷を起点とした食物連鎖が形成されているのです。

また、流氷は海の生物だけでなく、陸の生物の命も育んでくれます。豊かな海の栄養で育ったサケ・マスは海から川を遡り、ヒグマや、オジロワシ、シマフクロウなどの猛禽類の重要な食物資源となります。これらの動物たちの糞などは、今度は土に還り、森の栄養分となり、最後は雨水とともに海に戻っていきます。このように知床では海・川・陸にわたる流氷で始まる壮大なストーリーがあるのです。

【カテゴリ：地理・地形】

火山が生み出した奇跡のアクティビティ「カムイワッカ湯の滝登り」

知床半島の火山活動が造り上げた知床連山の一角の硫黄山の麓には、アイヌ語で「神の水」を意味するカムイワッカ湯の滝があります。ここを流れるのはただの水ではありません。知床硫黄山から湧き出る硫黄を含んだ強酸性温泉水、まさに名前のごとき「神の水」が流れてくるのです。

カムイワッカ湯の滝では、魚やコケも生きていくことのできない強酸性の温泉水を感じながら、この奇跡の滝を一步一步登っていく沢登りを楽しむことができます。川を登るにつれて温度が上がっていき、最終目的地の「4 の滝」では約 35～38℃という絶妙に気持ちの良い温度になる不思議な川です。

カムイワッカ湯の滝登りは、単なるアドベンチャーアクティビティではなく、世界にも類まれなユニークな体験であり、まさに地球のチカラを体感しつつ学ぶことのできるアクティビティと言えるのではないのでしょうか。

【カテゴリ：伝統・文化・歴史】

クラウドファンディングのはしり「しれとこ 100 平方メートル運動」

知床には、原生的な自然が残されていると言われています。でも、それはたまたま残っているのではなく、我々の先人たちの自然に対する敬意と畏怖により、残されたのです。その代表的な取り組みが 1977 年に始まった「しれとこ 100 平方メートル運動」です。

日本全国が土地への投機ブームで湧く中、その波は知床の地にもやってきました。開拓跡地が不動産業者などの手に次々と渡り、知床も乱開発による自然破壊の危機に瀕しました。それに対して知床では、漁師を中心として「森を豊かにすることで、海が豊かになる」と考え、また、当時の斜里観光協会会長は「知床の自然は元金で、その利息で観光が成り立っている。だから、元金を減らすようなことをしてはいけない」と考えるなど、今で言う「持続可能な資源の利用」、「持続可能な観光」という考えが地域に既に根付いていました。

こうしたことを背景として、当時の藤谷豊町長は、イギリスのナショナル・トラスト運動になぞり、全国に呼びかけて 100 平方メートルの土地を買い上げるためのお金を寄付のひと口として「しれとこ 100 平方メートル運動」をスタートすることを決意したのです。まさに今のクラウド・ファンディングのはしりと言えるかもしれません。

「しれとこで夢を買いませんか」のキャッチフレーズで土地の買い取りや植樹費用等にあてる寄付を募った結果、この運動は自然保護に関心を持つ全国の人々の共感をよび、全国各地から寄附金が寄せられました。

全国の人々の想いは受け継がれ、現場のスタッフはもちろん、ボランティアの方々、地域の人や大学の科学者の方の力と知恵を借りながら、今も原生の森の復元のための活動が進められています。

【カテゴリ：伝統・文化・歴史】

知床では先人たちの「ロマン」の軌跡を辿ることができる

知床は、地理的に見ても北海道の東の果ての地であり、また、冬には寒さ、雪、強風などの厳しい自然環境にさらされます。しかしながら、知床では大昔から人々が住み着き生活をし、様々な歴史を積み重ねてきました。

知床半島にあるカメのような形をした大きな岩、チャシコツ岬上遺跡には、今から 1200 年ほど前、8～9 世紀のオホーツク人の集落跡があります。オホーツク人は、その遺跡からも、海獣狩猟や漁労を中心とする生活を送っていたものと考えられています。

また、知床の語源はアイヌ語の「シリ・エトク(地の突き出たところ)」であるように、知床には現在でも多くのアイヌ語由来の地名が残り、アイヌ文化の跡を感じることができます。そして、知床にはキムンカムイ(ヒグマ)、コタンコルカムイ(シマフクロウ)、レプンカムイ(シャチ)などのアイヌ語の「カムイ(神)」がたくさん存在し、アイヌの人々が知床の動物を崇めながら生活していたことがうかがえます。

斜里で毎夏行われる「ねふた祭り」は、これらと全く違った形で歴史を感じることができます。今から 200 年ほど前に、北海道周辺に出没するロシア船に備え、幕府から斜里での警備を命じられた津軽藩士が、この地で飢えと寒さにより死亡した事件が起きました。その後、斜里で津軽藩士の慰霊が続けられてきたことが縁となり、「ねふた」の本場である弘前市から斜里に伝授されたのが「斜里ねふた」なのです。

このように、知床では、この地ならではの恵みを見つけ出し、知恵や努力で生活を切り拓き、力強く生きてきた人々の軌跡を色々なところで見ることができます。

【カテゴリ：産業・暮らし・食】

漁業、農業を担う人々の顔が見えるまち「知床」で味わう最高の贅沢

知床(斜里町)は、オホーツク海の恵みにより、サケ・マスをはじめとした豊富な水産資源を誇り、漁業がとて盛んなまちです。2023年のサケの漁獲高が日本一、しかも20年もの間、2021年をのぞいて1位の座をキープしています。また、かつて知床の開拓にあたった先人の知恵や努力のおかげで、ジャガイモ、ビート、ニンジンなど農業もとても盛んです。このように、知床は、日本にとって重要な食料生産基地の1つなのです。

こうした漁業、農業を担う生産者の人々の「顔が見える」ということも知床の大きな特徴です。

ウトロ漁港では、大量のサケが積まれた漁船が戻ってくると、水揚げと選別作業が始まります。成熟度やサイズ、オスカメスカなどが漁師によって素早く判断され、右に左に振り分けられていきます。「ウトロ鮭テラス」では、その迫力あるスピーディーな作業現場を、2階の見学スペースで真上から眺めることができます。大きなものでは3kgにもなるサケをあつという間に選別して魚箱へと収めていく様子は、迫力満点で1時間眺め続けていても飽きません。

一方、道路を車で走っていると、その車窓からは広大な斜里平野に広がる美しい農地で作業する農家さんの姿が見られます。ジャガイモの花で埋め尽くされる畑や、収穫間際の金色に光る麦畑などは、知床の大地を鮮やかに彩ってくれます。

町内にあるスーパーでは、収穫時期になると知床で獲れたジャガイモならび、小麦やニンジンは加工品を買うことができます。知床のニンジンで作るニンジンジュースは、斜里産ニンジン100%にほんの少しのレモンを入れただけの一品で、ニンジン嫌いの人も大好きになるという、地元にも観光客にも評判のジュースです。

また、スーパーの魚コーナーでは、その時の旬な魚がきれいにパックされて並びます。付けられた値段によって、たくさん獲れているのか、不漁なのかが分かるのも、地元ならではの光景です。このように、海産物も農作物も、旬なものを、最高の瞬間に手に入れ、味わうことができるのが、ここ知床なのです。

【カテゴリ：自然】生物の多様性

陸の王者ヒグマ、海の王者シャチ、空の王者オオワシ、自然の王者が集う知床。流水から始まる豊かな生態系の循環のなかに、来訪者は身を置くことで、人間も自然のサイクルの一部ということを再確認し、自らを知り・生の実感を得ることができる。

知床では、流水がもたらすアイスアルジーから始まる、豊かな自然の恵みのサイクルが存在します。プランクトン→オキアミ→魚→海獣・ワシという食物連鎖、その頂点に立つヒグマ・シャチ・オオワシ。沖合 10km までの範囲で、多様な動物や植物、例えばアホウドリ 3 種が見えたり、陸では希少な鳥類シマフクロウなども時には見ることができます。知床、羅臼町では陸海空の生態系の頂点に立つ生き物、すべてを見ることができます。

また、深海魚の新種がいくつも発見されるなど、いまだによくわからないものが日々、出てきます。知床の海で繰り広げられる多様な生物の世界は、バリエーションに富んだ魚のどれもが美味しい・羅臼昆布が日本三大昆布の一つ、という単なる味覚の話にとどまりません。クジラやシャチ、海鳥を見学するクルーズなど観光の魅力にもつながっています。また、海産物などの加工品の工程に触れられたり、鮭を実際に触れるお祭りがあったり、漁師をはじめ地元の人々の魅力的な話が聞けたり、沖合に浮かぶ漁火の美しさを見ることができるのも、知床、羅臼町ならではの魅力です。

海から始まり陸や空につながる知床の生物の多様性が、食や祭り、伝統文化など人の営みに直結していることを、来訪者は体感できます。

ストーリーを伝えるおすすめの場所や体験

- 春はシャチ。夏はクジラ。秋はヒグマ。冬はワシ。どれもクルーズで見ることができる。
- もしもクルーズが欠航しても、春先はヒグマが食べるような山菜(イラクサ、フキなど)、夏はトキシラズ(サケ)やエビ、秋はシカ肉やクマ肉、サケ、冬はウニやタラなどを食べることができる。
- 昆布番屋で、昆布を加工し歴史を学べる体験ツアーがある。

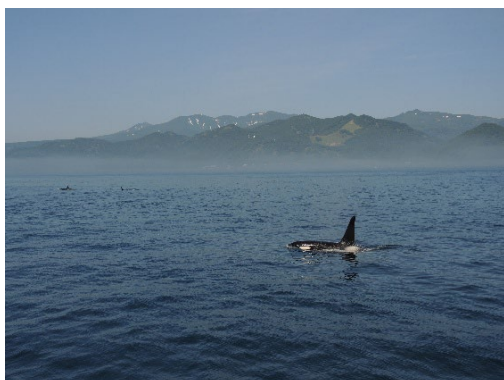


写真 2-9 知床半島沖でみられるシャチ



写真 2-10 知床半島沿岸で獲れるエゾバフンウニ

【カテゴリ：地理地形】急峻な地形

ルサの強風やそこからの景色に代表されるような極端な天候や急峻な地形は知床ならではの山・川・海そして太陽の繋がりをもち、人間の五感すべてに訴えかけてくる。来訪者は五感を開放し、能動的に動く力強さを得ることができる。

知床は山・川・海が近く、火山活動が生み出した断崖絶壁など急峻な地形と、そこから生まれる極端な自然現象が存在します。山から海へ吹き抜ける「ルサ(ルシャ)のだし風(ルシャモン)」と呼ばれる強風や、羅臼岳から吹き降ろす「羅臼おろし」など強風という自然現象に名前がついているのも特徴です。

日本で一番開通期間が短い国道「知床横断道」も急峻な地形という特徴を表す代表格とも言えます。

霧、吹雪など天候の不安定さは緊張感を抱かせますが、それ自体を楽しむという感覚が育まれます。この地で生き抜いている海鳥など動物・植物を目の前で見ること、人間がここで生きていくために必要な知恵・技術に触れることにより、生命の力強さを学ぶことができます。山・川・海の近さから、山と海の恵みを享受し、同時に体感することもできます。

「海拔0mの高山」とも形容できる地形、息を飲むような絶景と、荒れ狂う原始のままの風は、来訪者のそれまでの世界観を崩し、野生を呼び覚まします。

ストーリーを伝えるおすすめの場所や体験

- ルサのっこし。羅臼とウトロをつなぐ道。冬になるとウトロと羅臼の流氷を同時に見ることができる。
- 日本で一番開通期間が短い国道「知床横断道路」にスリリングな橋もある。小鳥のさえずりもある。カーブを曲がるとすごい景色が広がる。国後島も見ることができる。
- たった 40 分のドライブでオホーツクの海、根室海峡、100 名山の羅臼岳を間近に感じ、様々な天候を感じられる。

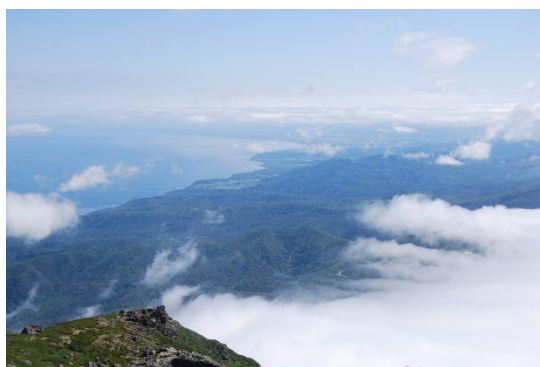


写真 2-11 羅臼岳山頂から望む景色

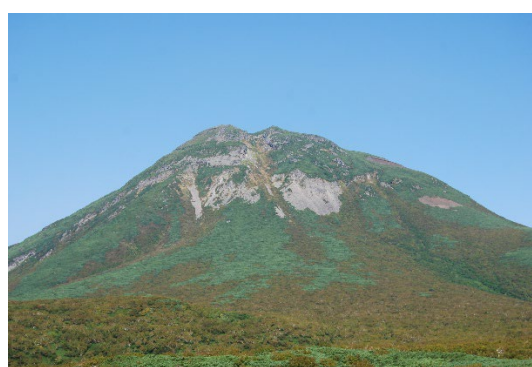


写真 2-12 知床横断道路から眺める羅臼岳

【カテゴリ：伝統・文化】漁師と猟師の文化と食

極めて厳しい自然の中で「りょう」を生業とする漁師と猟師は、長い時間をかけて紡いできた誇りと共に、潮の匂い・血の匂いにまみれて生きている。「りょう」から食卓まで境界線がなく、来訪者は生命を五感で味わう体験ができる。

知床では、生活者の日常が来訪者の非日常ということが際立っています。厳しい自然の中で生きていくには命がけの部分があり、海の漁師と陸の猟師ならではの知恵と気質があります。一人ひとり、やり方の違いやポリシーがあるように、その手法は独自の文化にまで昇華されています。例えば、知床の、特に羅臼側の海は火山活動により深海となっており、深い海の地形とそれゆえ多種多様となっている魚介類に合わせた漁師の技術があります。そして、知床に暮らす漁師や猟師は、自分たちの手を汚したものでお腹を満たすことで、初めて生命を感じることができる、ということを知ります。

市場には魚が上がり、海鮮工房では鹿肉やトドの肉が売られています。それらは新鮮で美味しいだけでなく、厳しい自然の中で生き抜く漁師と猟師の知恵を学ぶことや、獲られたものが自分の口に入る過程を知っているという安心感にもつながります。

自然そのものを食べることで、来訪者は活力、知恵と安心感を得、生き抜く力までももらうことができるでしょう。

ストーリーを伝えるおすすめの場所や体験

- 市場や海鮮工房などの販売場
- 市場でのセリ・船の上・番屋、シカ（鹿撃ち）などの解体場での非日常体験　＜現在は限定公開＞
- 暮らすように何泊か滞在し、知床の生活者の一部となる体験をする



写真 2-13 羅臼町の市場見学の様子



写真 2-14 羅臼の海岸線でみられる羅臼昆布の干場

【カテゴリ：産業・暮らし・食（四季）】自然と暮らしが密接

オホーツク文化から続く、自然と密着した四季折々の極めて特徴的な暮らしがある。来訪者はさまざまな景色・食事・人の営みを楽しむことができ、訪れるたびに知らない体験ができる。

知床には、はるか昔のオホーツク文化から現代まで続く、自然と密着した暮らしがあります。それゆえ、四季で変わる景色、四季で変わる食べ物（魚介・山菜）、四季で変わる動物・植物、四季で変わる人の流れが極めて特徴的です。特に海の中は季節により 20～21 度の変化があり、海の中の四季も存在します。

来訪者は魚の旬だけでなく、鳥の種類、国後島からのぼる朝陽の位置、漁師など人の動き、風向き、海の中まで、と実にさまざまな面から四季を感じることができます。登山・カヤックなどのアクティビティ、市場の競りなどの産業文化、オホーツク文化などの歴史を体験できたり、魚介・鹿・山菜・昆布・ウニ、場合によってはトド・ヒグマまで食することもできたりします。

四季によって表情が変わることは、来訪者をリピーターにする強い要因であり、来訪者は、訪れるたびに知らない体験を手に入れることができます。

ストーリーを伝えるおすすめの場所や体験

- 知床半島の海岸線や番屋などを歩く
- 知床羅臼ビジターセンター、ルサフィールドハウス、知床自然センター
- シーカヤック



写真 2-15 知床半島の海岸線トレッキング



写真 2-16 知床半島を一周するシーカヤックツアー

5. 既存情報の整理分析

作成された 9 つの「ストーリーのたまご」について、表 2-3 に示す。参考文献を用いて既存情報の整理を行うとともに、ストーリーのファクト調査を実施した。

本文中の事実確認が必要な個所には下線を引き、脚注をつけ、情報の基となる資料名を掲載した。また、次年度にさらにストーリーとして発展させることが可能と思われる要素には二重下線でマーキングをおこなった。なお、タイトルについては英訳を付記した。

脚注で使用した参考文献は全てリファレンスデータベースに管理している(巻末資料 2-8)。

表 2-3 参考文献

参考文献名	出版社等
しれとこライブラリー (1 巻～10 巻)	斜里町立知床博物館
郷土学習シリーズ (第 1 集～第 20 集)	斜里町立知床博物館
知床博物館 特別展図録 (第 1 回～第 42 回)	斜里町立知床博物館
斜里町史	斜里町
羅臼町史	羅臼町
斜里町立図書館の書籍	
Web サイト全般	

知床には、流水からはじまる命の循環、流水が繋ぐ命がある

In Shiretoko, the cycle of life begins with drift ice;
its life interconnects life and ecosystems

シベリア海岸のアムール川河口で生まれた流水ⁱは、季節風や海流によってⁱⁱ1,000km以上も離れた知床に毎年やってきます。知床は流水が見られる南端の地ⁱⁱⁱでもあります。そんな流水は知床の人々の生活の一部となっていて、季節の移り変わりを知らせてくれたり、潮の干満や天候により日々違う顔を見せてくれたりします。さらには、「流水ウォーク」^{iv}などのアクティビティを通じ、人々は流水と直接触れ合い、流水を体感することもできるのです。

流水は、知床の海・陸の生態系のつながりの源となっていることも忘れてはいけません。流水が着氷している時期は、漁師も漁に出ることは出来ませんが、漁師は「流水の時期は海を休めて海を豊かにする時期」と言います。それは、流水の下で資源が保護されるとともに、流水によって大量の栄養が運ばれてくる^vからなのです。流水の中に閉じ込められていた植物プランクトンが春になると大増殖し、それをエサにする動物プランクトンが大量に発生します。今度は、これを食べるために魚たちが集まってきて、その魚を求めてアザラシやトドがやってきます。そして、生態系のトップに君臨するシャチがあらわれます。このように知床の海には流水を起点とした食物連鎖が形成されている^{vi}のです。

また、流水は海の生物だけでなく、陸の生物の命も育んでくれます。豊かな海の栄養で育ったサケ・マスは海から川を遡り、ヒグマや、オジロワシ、シマフクロウなどの猛禽類の重要な食物資源^{vii}となります。これらの動物たちの糞などは、今度は土に還り、森の栄養分となり^{viii}、最後は雨水とともに海に戻っていきます。

このように知床では海- 川- 陸にわたる流水で始まる壮大なストーリーがあるのです。

ⁱ 菊地慶一 (2004)『流水～白いオホーツクからの伝言』響文社. p. 56-62.

ⁱⁱ 菊地慶一 (2004)『流水～白いオホーツクからの伝言』響文社. p.61

ⁱⁱⁱ 同上

^{iv} 知床斜里町観光協会 (2000～)「流水体験」(Website; url: https://www.shiretoko.asia/list/drift_ice_experience).

菊地慶一 (2004)『流水～白いオホーツクからの伝言』響文社. p.242

^v 菊地慶一 (2004)『流水～白いオホーツクからの伝言』響文社. p.276

^{vi} 斜里町立知床博物館協力会 (1994)『知床の人と自然』郷土学習シリーズ 17 斜里町立知

床博物館協力会. p. 23.

vii 斜里町立知床博物館協力会（1994）『知床の人と自然』郷土学習シリーズ 17 斜里町立
知床博物館協力会. p. 23.

viii 中川 元（2006）『世界遺産・知床がわかる本』山口昭男 p.124-128.

火山が生み出した奇跡のアクティビティ

「カムイワッカ湯の滝登り」

Shiretoko's unique, miraculous activity born from a volcano:

"Kamuywakka Hot Falls Climbing"

知床半島の火山活動が造り上げた知床連山ⁱの一角の硫黄山の麓には、アイヌ語で「神の水」ⁱⁱを意味するカムイワッカ湯の滝があります。ここを流れるのはただの水ではありません。知床硫黄山から湧き出る硫黄を含んだ強酸性温泉水ⁱⁱⁱ、まさに名前のごとき「神の水」が流れてくるのです。

カムイワッカ湯の滝では、魚やコケも生きていくことのできない強酸性^{iv}の温泉水を感じながら、この奇跡の滝を一步一步登っていく沢登りを楽しむことができます。川を登るにつれて温度が上がっていき、最終目的地の「4の滝」では約 35～38℃^vという絶妙に気持ちのいい温度になる不思議な川です。

カムイワッカ湯の滝登りは、単なるアドベンチャーアクティビティではなく、世界にも類まれなユニークな体験であり、まさに地球のチカラを体感しつつ学ぶことのできるアクティビティと言えるのではないのでしょうか。

ⁱ 知床ライブラリー8 (2007) 『知床の地質』 斜里町・斜里町教育委員会 p.152

ⁱⁱ 斜里町立知床博物館協力会(1984)『知床半島西岸の地名と伝説』郷土学習シリーズ (6) 斜里町立知床博物館協力会

ⁱⁱⁱ 斜里町立知床博物館協力会 (1997) 『知床の温泉 知床博物館特別展示図録第 19 回』 p. 5.

^{iv} 斜里町立知床博物館協力会 (1997) 『知床の温泉 知床博物館特別展示図録第 19 回』 p. 8

^v 斜里町立知床博物館協力会 (1997) 『知床の温泉 知床博物館特別展示図録第 19 回』 p. 5-6

クラウドファンディングのはしり「しれとこ 100 平方メートル運動」
The birth of crowdfunding: the "Shiretoko 100-Square-Meter Movement"

知床には、原生的な自然が残されているⁱとされています。でも、それはたまたま残っているのではなく、我々の先人たちの自然に対する敬意と畏怖により、残されたのです。その代表的な取り組みが 1977 年に始まった「しれとこ 100 平方メートル運動」ⁱⁱです。

日本全国が土地への投機ブームで湧く中、その波は知床の地にもやってきました。開拓跡地が不動産業者などの手に次々と渡りⁱⁱⁱ、知床も乱開発による自然破壊の危機に瀕しました。それに対して知床では、漁師を中心として「森を豊かにすることで、海が豊かになる」^{iv}と考え、また、当時「知床の自然は元金で、その利息で観光が成り立っている。だから、元金を減らすようなことをしてはいけない」と考えるなど、今で言う「持続可能な資源の利用」、「持続可能な観光」という考えが既に地域に既に根付いていた様子がうかがえます。

こうしたことを背景として、当時の藤谷豊町長は、イギリスのナショナル・トラスト運動になぞり、全国に呼びかけて 100 平方メートルの土地を買い上げるためのお金を寄付のひと口として「しれとこ 100 平方メートル運動」をスタートすることを決意した^vのです。まさに今のクラウド・ファンディングのはしりと言えるかもしれません。

「しれとこで夢を買いませんか」のキャッチフレーズで土地の買い取りや植樹費用等にアてる寄付を募った結果、この運動は自然保護に関心を持つ全国の人々の共感をよび、全国各地から寄附金が寄せられました^{vi}。

全国の人々の想いは受け継がれ、現場のスタッフはもちろん、ボランティアの方々、地域の人や大学の科学者の方の力と知恵を借りながら、今も原生の森の復元のための活動が進められています^{vii}。

ⁱ 斜里町立知床博物館 (2010) 『知床の自然保護 しれとこライブラリー第 10 巻』北海道新聞社 p. 184.

ⁱⁱ 斜里町 (2010) 『報告集・知床 100 平方メートル運動の記録』／斜里町立知床博物館 (2010) 『知床の自然保護 しれとこライブラリー第 10 巻』北海道新聞社 p. 200. ／斜里町立知床博物館協力会 (1994) 『知床の人と自然 郷土学習シリーズ第 17』斜里町立知床博物館. p. 62～.

ⁱⁱⁱ 菊池慶一 (2005) 『もうひとつの知床～戦後開拓ものがたり～』北海道新聞. p. 175.

^{iv} 辰濃 和男 (2010) 『よみがえれ知床 100 平方メートル運動の夢』朝日新聞出版. p. 22.

^v 菊池慶一 (2005) 『もうひとつの知床～戦後開拓ものがたり～』北海道新聞. p. 45.

または：

藤谷豊（1978）『知床の町で～斜里町長の手帳』毎日新聞. p. 370.

vi 菊池慶一（2005）『もうひとつの知床～戦後開拓ものがたり～』北海道新聞. p. 57.

vii 斜里町立知床博物館（2010）『知床の自然保護 しれとこライブラリー第 10 巻』北海道新聞社. p. 213.

知床では先人たちの「ロマン」の軌跡を辿ることができる

In Shiretoko, you can follow the footsteps of those who came before us,
and feel the “adventure” of their lives

知床は、地理的に見ても北海道の東の果ての地であり、また、冬には寒さ、雪、強風などの厳しい自然環境ⁱにさらされます。しかしながら、知床では大昔から人々が住み着き生活をし、様々な歴史を積み重ねてきました。

知床半島にあるカメのような形をした大きな岩、チャシコツ岬上遺跡には、今から 1200 年ほど前、8～9 世紀のオホーツク人の集落跡があります。オホーツク人は、その遺跡からも、海獣狩猟や漁労を中心とする生活ⁱⁱを送っていたものと考えられています。

また、知床の語源はアイヌ語の「シリ・エトク（地の突き出たところ）」ⁱⁱⁱであるように、知床には現在でも多くのアイヌ語由来の地名が残り^{iv}、アイヌ文化の跡を感じることができます。そして、知床にはキムンカムイ（ヒグマ）、コタンコルカムイ（シマフクロウ）、レブンカムイ（シャチ）などのアイヌ語の「カムイ（神）」がたくさん存在し、アイヌの人々が知床の動物を崇めながら生活していたことがうかがえます。

斜里で毎夏行われる「ねぶた祭り」は、これらと全く違った形で歴史を感じることができます。今から 200 年ほど前に、北海道周辺に出没するロシア船に備え、幕府から斜里での警備を命じられた津軽藩士が、この地で飢えと寒さにより死亡した事件が起きた^v。その後、斜里で津軽藩士の慰霊が続けられてきた^{vi}ことが縁となり、「ねぶた」の本場である弘前市から斜里に伝授されたのが「斜里ねぶた」^{vii}なのです。

このように、知床では、知恵や努力で生活を切り拓き、力強く生きてきた人々の軌跡を色々なところで見ることができます。

ⁱ 斜里町立知床博物館協定会（1985）『知床の気象』斜里町立知床博物館 pp. 12-32.

ⁱⁱ 斜里町立知床博物館協定会（1998）『知床の海獣狩猟』斜里町立知床博物館 pp. 8-11.

ⁱⁱⁱ 村田良介（2023）「点から線へ、そしてゾーニングへ」『日本の世界自然遺産 30 年 自然保護と暮らしの両立モデルへ（ビオシティ 96 号）』ブックエンド pp. 26-35. p. 26.

^{iv} 松浦武二郎著・秋葉實解説（1994）『松浦武二郎 知床紀行集』斜里町立知床博物館協定会.

^v 斜里町立知床博物館協定会（1981）『斜里一丁町の歴史散歩』斜里町立知床博物館協定会. p. 10.

^{vi} (??) [自然と歴史が結んだ絆―竹富町・弘前市と斜里町との交流の歴史, p. 36.

^{vii} 同上.

漁業、農業を担う人々の顔が見えるまち

「知床」で味わう最高の贅沢

Savor supreme luxury in "Shiretoko" –

A town where the people who pursue fishing and farming are familiar faces.

知床・斜里町は、オホーツク海の恵みにより、サケ・マスをはじめとした豊富な水産資源を誇り、漁業がとても盛んなまちⁱです。2023年のサケの漁獲高が日本一、しかも20年もの間、2021年をのぞいて1位の座をキープⁱⁱしています。また、かつて知床の開拓にあたった先人の知恵や努力のおかげで、ジャガイモ、ビート、ニンジンなど農業もとても盛んⁱⁱⁱです。このように、知床は、日本にとって重要な食料生産基地の1つなのです。

こうした漁業、農業を担う生産者の人々の「顔が見える」ということも知床の大きな特徴です。

ウトロ漁港では、大量のサケが積まれた漁船が戻ってくると、水揚げと選別作業が始まります。成熟度やサイズ、オスカメスカなどが漁師によって素早く判断され、右に左に振り分けられていきます。「ウトロ鮭テラス」^{iv}では、その迫力あるスピーディーな作業現場を、2階の見学スペースで真上から眺めることができます。大きなものでは3-5 kgにもなるサケ^vをあっという間に選別して魚箱へと収めていく様は、迫力満点で1時間眺め続けていても飽きません。

一方、道路を車で走っていると、その車窓からは広大な斜里平野に広がる美しい農地で作業する農家さんの姿が見られます。ジャガイモの花で埋め尽くされる畑や、収穫間際の金色に光る麦畑^{vi}などは、知床の大地を鮮やかに彩ってくれます。

町内にあるスーパーでは、収穫時期になると知床で獲れたジャガイモがならび、小麦やニンジンは加工品を買うことができます。知床のニンジンで作るニンジンジュースは、斜里産ニンジン100%にほんの少しのレモンを入れただけ^{vii}の一品で、ニンジン嫌いの人も大好きになるという、地元にも観光客にも評判のジュースです。

また、スーパーの魚コーナーでは、その時の旬な魚がきれいにパックされて並びます。付けられた値段によって、たくさん獲れているのか、不漁なのかが分かるのも、地元ならではの。このように、海産物も農作物も、旬なものを、最高の瞬間に手に入れ、味わうことが出来るのが、ここ知床なのです。

-
- ⁱ 斜里町立知床博物館協力会（1992）『ウトロの自然と歴史』斜里町立知床博物館協力会 p. 22-25.
斜里町立知床博物館協力会（2001）『知床の漁業』郷土学習シリーズ 14 斜里町立知床博物館協力会 p.3.
- ⁱⁱ 斜里町公式ホームページ（2024）『広報しゃり 2月号』
(<https://www.town.shari.hokkaido.jp/material/files/group/3/202402a4.pdf>).
- ⁱⁱⁱ 斜里町立知床博物館協力会（1992）『ウトロの自然と歴史』郷土学習シリーズ 14 斜里町立知床博物館協力会 p.28.
- ^{iv} 斜里町公式ホームページ（2020）『広報しゃり 10月号』
(<https://www.town.shari.hokkaido.jp/material/files/group/3/koho202010a4.pdf>).
- ^v 国立研究開発法人水産研究・教育機構ホームページ『SALMON 情報 NO.6』（2012年3月）chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/book/salmon/files/srr006_p22-25.pdf
- ^{vi} 斜里町公式ホームページ（2024）『斜里町について（産業）』
(<https://www.town.shari.hokkaido.jp/soshikikarasagasu/seisakusuisin/miryoku/ijujoho/sharichounogaiyou/1204.html>).
- ^{vii} 知床しゃブランド（2025）『にんじんジュース』（https://www.shiretoko-gourmet.com/product_ninjin_juce.html).

陸の王者ヒグマ、海の王者シャチ、空の王者オオワシ、自然の王者が集う知床。
流水から始まる豊かな生態系の循環のなかに、来訪者は身を置くことで、人間も自然のサイクルの一部ということを再確認し、自らを知り・生の実感を得ることができる。

In Shiretoko, the kings of nature gather: the brown bear, lord of the land; the orca, commander of the sea; and the Steller's sea eagle, ruler of the skies.
Here, visitors can immerse themselves in the diverse ecosystem which starts with the drift ice, and reaffirm that humans also form part of the grand cycle of life; they will gain insight into themselves and a more authentic appreciation of life.

知床では、流水がもたらすアイスアルジーから始まる、豊かな自然の恵みのサイクルⁱが存在します。プランクトン→オキアミ→魚→海獣類やワシという食物連鎖ⁱⁱ、その頂点に立つヒグマ・シャチ・オオワシⁱⁱⁱ。沖合 10km までの範囲で、多様な動物や植物、例えばアホウドリが見えたり^{iv}、陸では希少な猛禽類であるシマフクロウなども時には見る^vことができます。知床、羅臼町では陸海空の生態系の頂点に立つ生き物、すべてを見ることができます。

また、深海魚の新種がいくつも発見される^{vi}など、未だによくわからないものが日々、知床の海では出てきています。

知床の海で繰り広げられる多様な生物の世界は、バリエーションに富んだ魚のどれもが美味しいことや、羅臼昆布が日本三大昆布の一つ、という単なる味覚の話にとどまりません。クジラやシャチ、海鳥を見学するクルーズ^{vii}など観光の魅力にもつながっています。

また、海産物などの加工品の工程に触れられたり^{viii}、鮭を実際に触れるお祭り^{ix}があったり、漁師をはじめ地元の人々の魅力的な話が聞けたり^x、沖合に浮かぶ漁火の美しさを見る^{xi}ことができるのも、知床、羅臼町ならではの。

海から始まり陸や空につながる知床の生物の多様性が、食や祭り、伝統文化など人の営みに直結している^{xii}ことを、来訪者は体感できます。

ⁱ 菊地慶一（2004）『流水～白いオホーツクからの伝言』響文社. p. 278.

ⁱⁱ 同上.

ⁱⁱⁱ 斜里町立知床博物館協定会（1994）『知床の人と自然』郷土学習シリーズ 17 斜里町立知床博物館協定会. p. 23.

^{iv} 読売新聞北海道支社編集部編（2015）『海と森のドラマ 知床 オホーツク回廊に行く』響文社. p. 24.

^v 斜里町立知床博物館編（1999）『『知床の鳥類』しれとこライブラリー 第1巻』北海道新聞社. pp. 80-125.

^{vi} 読売新聞北海道支社編集部編（2015）『海と森のドラマ 知床 オホーツク回廊に行く』響文社. p. 24.

^{vii} 知床羅臼町観光協会（2000～）『観光船』（Website; url: rausu-shiretoko.com/ocean-tourism/）.

-
- viii 知床羅臼町観光協会 (2000~)「ツアー・アクティビティー」(Website; url: rausu-shiretoko.com/main-menu/learn/).
- ix 同上. / 羅臼町ホームページイベント一覧 > 知床らうす産業祭 羅来楽 (Website; url: <https://kanko.rausu-town.jp/spots/event/53>)
- * 北海道観光機構 (2025)「羅臼の奥深さ、五感を刺激する没入型体験」(Website; https://visit-hokkaido.jp/adventure-travel/traveltrade-press/news/20250212_sustainable_03/).
- xi 羅臼ブログ第3回「羅臼の海は眠らない」(2019). (Website; <https://www.shiretoko.or.jp/report/2019/11/4856.html>)
- xii 斜里町立知床博物館協力会 (1994)「知床の人と自然」郷土学習シリーズ17 斜里町立知床博物館協力会.

ルサの強風やそこからの景色に代表されるような極端な天候や急峻な地形は知床ならではの山・川・海そして太陽の繋がりをもたらし、人間の五感すべてに訴えかけてくる。来訪者は五感を開放し、能動的に動く力強さを得ることができる。

Steep terrain and extreme weather conditions, such as the strong winds of Rusha, combine to create interconnections of mountains, rivers, sun and seas that are unique to Shiretoko, appealing to all of the five human senses. Visitors here can open wide their senses, gaining a power that leads to action.

知床は山・川・海が近くⁱ、火山活動が生み出した断崖絶壁など急峻な地形ⁱⁱと、そこから生まれる極端な自然現象が存在します。山から海へ吹き抜ける「ルサ（ルシャ）のだし風（ルシャモン）」ⁱⁱⁱと呼ばれる強風や、羅臼岳から吹き降ろす「羅臼おろし」^{iv}など強風という自然現象に名前がついているのも特徴です。

日本で一番開通期間が短い国道「知床横断道路」^vも急峻な地形という特徴を表す代表格とも言えます。

霧、吹雪など天候の不安定さは緊張感を抱かせますが、それ自体を楽しむという感覚が育まれます。この地で生き抜いている海鳥など動物・植物を目の前で見ることで、人間がここで生きていくために必要な知恵・技術に触れることにより、生命の力強さを学ぶことができます。山・川・海の近さから、山と海の恵みを享受し、同時に体感することもできます。「海拔0mの高山」とも形容できる地形、息を飲むような絶景と、荒れ狂う原始のままの風は、来訪者のそれまでの世界観を崩し、野生を呼び覚まします。

ⁱ 斜里町立知床博物館協力会（1989）『知床半島の生き立ち』斜里町立知床博物館協力会. p. 42.

ⁱⁱ 同上.

ⁱⁱⁱ 羅臼町百年史編集委員会（平成13）『羅臼町史 第3巻』羅臼町長 辻中義一 p.23

斜里町立知床博物館協力会（1985）『知床の気象』斜里町立知床博物館協力会. pp. 7-11（強風について）

または：読売新聞北海道支社編集部編（2015）『海と森のドラマ 知床 オホーツク回廊に行く』響文社. p. 74.（ルシャおろしについて）

羅臼町副読本「知床学(改訂版)」編集委員会（2023）『私たちの知床と海』羅臼町海洋教育推進協議会. p.10.

^{iv} 樽嶺レイ（2007）『知床開拓スピリット：樽嶺レイ写真集』星雲社. p. 75

または：斜里町立知床博物館協力会（1985）『知床の気象』斜里町立知床博物館協力会. p. 7.

^v 北海道観光機構（2022-2025）「知床横断道路」（Website; https://www.visit-hokkaido.jp/spot/detail_10406.html）

活火山 羅臼岳 第26回特別展, p. 14

極めて厳しい自然の中で「りょう」を生業とする漁師と猟師は、
長い時間をかけて紡いできた誇りと共に、潮の匂い、血の匂いにまみれて生きている。

「りょう」から食卓まで境界線がなく、

来訪者は生命を五感で味わう体験ができる。

Confronting Shiretoko's extremely harsh natural environment, there are those who follow the ageless vocations of fishing and hunting. Enveloped by the pungent aromas of the sea and the blood of their catch, they work with a sense of pride gained through long years of dedication and endurance. There is an unbreakable connection between this work and the bounty on our dining tables.

Visitors can have all their senses stimulated as they experience their connection with life.

知床では、生活者の日常が来訪者の非日常ということが際立っています。厳しい自然の中で生きていくには命がけの部分があり、海の漁師と陸の猟師ならではの知恵と気質があります。一人ひとり、やり方の違いやポリシーがあるように、その手法は独自の文化にまで昇華されていますⁱ。例えば、知床の、特に羅臼側の海、根室海峡は火山活動により深海となっておりⁱⁱ、深い海の地形とそれゆえ多種多様となっている魚介類に合わせた漁師の技術ⁱⁱⁱがあります。そして、知床に暮らす漁師や猟師は、自分たちの手を汚したものでお腹を満たすことで、初めて生命を感じることができる、ということを知ります。

市場には魚が上がり、海鮮工房では鹿肉やトドの肉が売られています^{iv}。それらは新鮮で美味しいだけではなく、厳しい自然の中で生き抜く漁師と猟師の知恵を学ぶことや、獲られたものが自分の口に入る過程を知っているという安心感にもつながります。

自然そのものを食べることで、来訪者は活力、知恵と安心感を得ることができ、また、生き抜く力までもらうことができるでしょう。

ⁱ 一般社団法人日本昆布協会「世界自然遺産知床 羅臼昆布漁」2023.1.27(Website; <https://kombu.or.jp/column/5862/>／公益財団法人知床財団会報誌「SEEDS」2014 年秋号 NO.224

ⁱⁱ 羅臼町史編集委員会 (1970)『羅臼町史 第1巻』北海道目梨羅臼町 p.12

ⁱⁱⁱ 知床の漁業 特別展 p. 4-32

知床の人と自然 郷土シリーズ 17, p. 55

^{iv} 羅臼漁業協同組合 直営海鮮工房 (2025)「商品一覧 (えぞ鹿・トド肉)」(Website; <https://www.jf-rausu.shop/shopdetail/000000000194/?srsid=AfmBOoqp-R8dy-H5G1UsFnHOYZHIV2c3RpMDSE0TPmDUq1Q6SDsP0SbL>).

オホーツク文化から続く、自然と密着した四季折々の極めて特徴的な暮らしが、知床にはある。来訪者はさまざまな景色・食事・人の営みを楽しむことができ、訪れるたびに知らない体験ができる。

The lifestyle of Shiretoko, since the time of the ancient Okhotsk culture, is unique, closely connected to nature and linked to the change of the seasons. Visitors can enjoy diverse scenery, food, and human activities, which provide new experiences each time they visit.

知床には、はるか昔のオホーツク文化時代から現代まで続く、自然と密着した暮らしⁱがあります。それゆえ、四季で変わる景色、四季で変わる食べ物（魚介・山菜）、四季で変わる動植物、四季で変わる人の流れが極めて特徴的です。特に海の中は季節により 20～21 度の温度変化がありⁱⁱ、海の中でも四季が存在します。

来訪者は魚の旬だけでなく、鳥の種類ⁱⁱⁱ、国後島からのぼる朝陽の位置^{iv}、漁師など人の動き、風向き、海の中、と実にさまざまな面から四季を感じることができます。登山やカヤックなどのアクティビティ、市場の競りなどの産業文化、オホーツク文化などの歴史を体験できたり、魚介・鹿・山菜・昆布・ウニ、場合によってはトド・ヒグマまで食することもできたりします。

四季によって表情が変わることは、来訪者をリピーターにする強い要因であり、来訪者は、訪れるたびに知らない体験を手に入れることができます。

ⁱ 平河内毅（2021）『丘に眠るオホーツク文化』斜里町立知床博物館協力会 p.6-26.

ⁱⁱ 国土交通省 気象庁(2025)「沿岸域の海面水温情報 根室海峡」(Website; <https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/data/db/kaikyo/series/engan/engan105.html>).

ⁱⁱⁱ 斜里町立知床博物館協力会（1998）『こんなに多様な知床の鳥たち』斜里町立知床博物館. pp. 1-3.
斜里町立知床博物館協力会（1986）『知床の鳥』斜里町立知床博物館. pp. 16-21.

^{iv} NHK for school「太陽高度の季節変化」(Website; https://www2.nhk.or.jp/school/watch/clip/?das_id=D0005401818_00000).

6. 地域資源の価値の整理におけるまとめおよび次年度の施策

本事業における地域資源の価値の整理は、全 9 回のワークショップ、および全 5 回の作業部会において実施した。地域参加のワークショップによる価値の洗い出しや整理は、いわばボトムアップ型の手法であり、地域資源の価値を地域全体が認識、共有し、一貫性をもって来訪者へ提示していくためには必要不可欠なプロセスである。また、地域で暮らす人だからこそ掘り起こせる地域資源や価値があり、ワークショップの場によってそれらが明るみになることも、今回のワークショップ実施で狙ったひとつの成果であった。

実際に、「海の中で感じる四季」や「日本一の漁師技術」、「人の営みによる季節の体感」など住んでいるからこそ感じ取ることができる価値で、しかしながら工夫すれば来訪者への体験にも繋げることができるものもワークショップの参加者から意見として挙げた。また、既に地域資源として活用されている価値、例えば、海産物や農産物など「食文化」や朝陽や夕陽、流氷などの「景色」についても、地域住民とワークショップの場で改めて整理することにより、来訪者に向けたさらなる価値として磨き上げるうえで現在何が不足しているか、体感するための十分な場所があるか、など資源の価値化における課題も見えてきた。

今年度 9 回のワークショップ実施を経て出来上がった 9 個のストーリーのたまごは、地域目線による新たな資源価値を含めた価値の整理、可視化が行われた成果物であり、次年度においてはこのストーリーのたまごを基に、改めて来訪者目線に立ち返ったストーリーのブラッシュアップを図っていくことが望まれる。このことは、作業部会においても、構成員から複数回挙げられた意見である。

作業部会においては、価値のストーリー化に関する意見のほか、知床 IP 全体計画とは最終的にどのような成果物を想定しているか、また、その活用方法はどのようなものか、さらには、知床エコツアーリズム戦略等、既存の計画とどのようにすみわけ、またどのように関係させていくのか、など本事業の根本的な意義を問う意見も全 5 回を通して数多く挙げた。

次年度においては、ストーリーブックが知床 IP 全体計画の最終的な成果物という回答が作業部会において提示されたが、この計画＝ブックを作成するにあたっては、ストーリーの活用方法や活用を想定する場所、活用する対象者等について、今後より具体的に精査し、定めていく必要がある。さらに、ブックが活用されるための計画全体の地域への浸透や活用対象者の理解が不可欠であり、そのための施策も同時に進めていかなければならない。計画を策定して終わりではなく、それらが活用されるより具体的なイメージをもって計画を整理し、地域に浸透させていくことが最も重要である。

図 2-9 に本年度の事業を通して次年度の施策とステップを提示するものである。

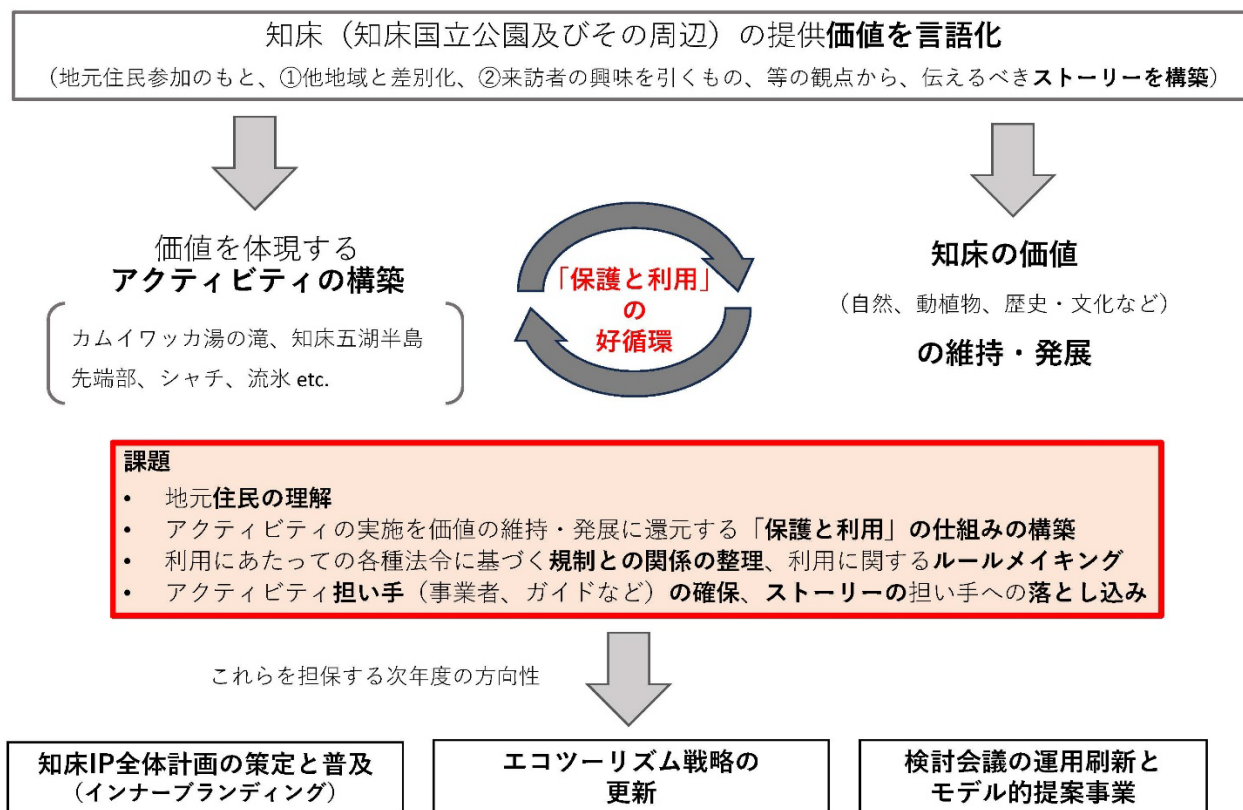


図 2-9 知床 IP 全体計画に関する今後の施策展開案

今年度、地域が主体となって整理した地域資源の価値について、以下の観点をもって施策を展開していく必要がある。

- ・ 抽出した地域資源の価値を具体的に体感するための場の整備、プログラムの構築
- ・ 地域資源の価値の保全、発展のための体制構築（または体制の維持）
- ・ 価値の体験の場の提供と、価値の保全および発展の有機的な繋がり
- ・ 価値の体験と保全のための地域におけるルール制定
- ・ 価値を地域全体で共有していくための関係者への価値の普及

このような要点をおさえながら、次年度の施策 4 つを下記の通り提案する(表 2-4)。

① ストーリーの精緻化

今年度生み出されたストーリーのたまごを基に、ファクトによる裏付け等を通じたストーリーのブラッシュアップを行い、来訪者目線に立ち返ったストーリーの作成、精緻化を行う。精緻化にあたっては地域内外からメンバーを数名招集し、今年度の成果物の深掘りや、観光庁事業における成果物との整合性を図る作業を進める。

② ストーリーブックの作成

精緻化されたストーリーを含めて、知床 IP 全体計画をまとめるためのストーリーブックを作成する。ストーリーブックの作成にあたっては、本事業で行った来訪者分析の結果等を用いて、知床 IP 全体計画の活用先についても具体的に検討をおこなう。ストーリーブックはビジュアルを重視して作成し、ひろく一般の地域住民が手に取りやすく、読みやすいものとする。

③ ストーリーの住民への浸透と取り組み全体に対する地域理解の醸成

作成したストーリーをひろく住民に活用してもらうため、地域におけるストーリーの普及活動を展開する。具体的には、ストーリーブックを全戸配布するほか、ストーリーブックを基にした地域参加型のワークショップ等を開催する。また、ストーリーを含め、今年度整理した地域資源の価値やキーセンテンス等について、地域の人々がその意味を理解し、実際に活用できるようになるための土壌を醸成することを目的に、インナーブランディングの取り組みを進める。

④ 知床 IP 全体計画を施行していくための体制構築

知床 IP 全体計画をブックとしてまとめて作成したのち、本計画を実際に現場で活用していくための地域の体制構築が重要である。国立公園及びその周辺地域における施設管理者や地域のネイチャーガイド、あるいは宿泊事業者等観光関係者等、実際に計画を日々の業務で活用し、推し進めていく施行者を明確にし、またそれらの人々が体系的に繋がるための体制を構築する。

表 2-4 次年度の施策のスケジュール

施策	2025年							2026年		
	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①ストーリーの精緻化										
…メンバーの選定(地域内外の組み合わせ)	→									
…ストーリーのたまごの振り返りと深掘り		→								
…観光庁業務における成果物とのすり合わせ		→								
②ストーリーブックの作成					→					
③地域理解の醸成（インナーブランディング）										
…ストーリーブックの配布、普及								→		
…ワークショップの開催								→		
④計画施行のための地域体制の構築							→			

知床 IP 全体計画(ストーリーブック)の構成案については、以下の表 2-5 を提案する。

表 2-5 ストーリーブックの構成案

目次	備考
1. はじめに	
2. 来訪者に伝える地域資源の価値のストーリー (1) 価値のカテゴリについて (2) ストーリー (3) ストーリー作成にあたり抽出されたキーセンテンス	・ イラスト等を用いてビジュアルを重視した体裁とする
3. 知床 IP 全体計画とは (1) 概要説明 (2) 計画の目的	
4. ストーリーの活用方法 (1) 活用する対象者の整理 (2) 伝える対象者について (3) 伝える場所のイメージ	・ 地域関係者の整理 ・ 来訪者の想定 ・ 地域内のマップや写真等を用いた活用場所のイメージを提示
5. 資料編 (1) 来訪者分析データと結果 (2) 分析結果からみた知床のターゲット層 (3) ストーリー作成のためのリファレンスデータ	・ これまでのマーケティングデータの公開 ・ マーケティングデータからみた知床の来訪者のターゲット提示

7. 価値観等の理解と共有

地域資源の価値の共有や活用を行うにあたっては、インナーブランディングによって地域ブランディングの土壌が造成され、地域の一人ひとりへとその価値が浸透していくことが重要である。

一方で、インナーブランディングが地域において浸透していくためには、地域の中に「コミュニティ」が醸成されることが必要不可欠である。このことを前提に、前項で挙げた次年度提案のうち、特に価値観等の理解と共有を目的とした地域のインナーブランディング施策について、追加的に以下を提案する。

1) コミュニティカフェの設置

地域内に気軽に立ち寄り集まったりできるカフェのような「場」を設定し、地域のことを気軽に楽しく前向きに語り合える「場づくり」を目指す。ここでは、本業務で作成されたストーリーのたまごや次年度作成されるストーリーブックを定例会の教科書として活用し、今年度ワークショップに参加した地域住民にとっても親しみやすく、立ち寄りやすい場づくりを心掛ける。

また、地域ブランディングをテーマに外部講師を招聘し、講演または参加者との対談形式でカフェでの勉強会を開催する。

2) ワークショップの開催

具体的なテーマや場所等を絞ったワークショップを開催する。たとえば、今年度のストーリーのたまごのひとつで出てきた「カムイワッカ」について取り上げ、①現地へ行って実際に場を体験し、②体験レポートを作成し、③体験や体験レポート活用した価値の発信の実践を行う、など地域の価値を来訪者へ伝える立場になって自ら考えるワークショップを各種、実施する。

3) 地域ブランディングコミュニティチームの形成

知床の地域ブランディングのためのプロジェクトチームを作り、施策を進めていく。チームの活動拠点は 1) で挙げたカフェとし、地域のクラブ活動のような位置づけとしてチームメンバー全体が徐々に成長過程を踏みながらチーム醸成されていくイメージである。

第3章 来訪者分析

「令和3年度知床世界自然遺産地域における“半島一体型”コンテンツ提供体制・計画策定検討業務報告書」（以下、半島一体型コンテンツ業務）で実施する。携帯電話ビッグデータに基づく利用者の動線やその利用の状況について把握した。また、利用者の動向に関する既存データの収集及び観光関係者からのヒアリングも行い、その結果を、令和3年度の業務報告の内容と比較し考察を行うこと。特にコロナ前後利用の変化やインバウンドの利用の変化に留意すること。

1. 対象とする調査の種類と分類、定義など

本項では、分析に用いる調査データの特性と出典について整理する。なお、次項以降で分析結果を図表等で示すにあたっては、以下に解説する調査コード、整理番号に付してデータの出典を示す。

1) 観光統計・利用モニタリングに関する調査（既存データ）（i）

知床半島の観光利用者数を把握する基本情報として、観光統計・利用モニタリング調査のデータを用いた（表3-1-1）。i-a 観光入込客数調査、i-b 外国人宿泊数調査は、観光庁が定めた「観光入込客統計に関する共通基準」に準じて平成22年度に道が改正した「北海道観光入込客数調査要領」に基づき、市町村ごとに行われている統計調査であり、継続性がある。i-c 国立公園入込数調査、i-d 利用状況調査は、環境省により実施されている調査であり、知床地域においては利用地点や施設等の入り込み数が仔細にデータ化されている。

表 3-1-1 観光統計・利用モニタリングに関するデータ一覧

調査コード	調査項目	頻度	調査地域	データ単位	調査主体
i-a 観光客入込客数調査	・交通手段(バス/自家用車)	毎年	町単位	月毎	斜里町 羅臼町
	・入込み客数(日帰り/宿泊)				
	・居住地(道内/道外)				
i-b 外国人宿泊客数調査	・居住国別宿泊数	毎年	町単位	月毎	斜里町 羅臼町
i-c 国立公園入込数調査	・国立公園利用者数	毎年	国立公園	月毎	環境省
i-d 知床国立公園 利用状況調査	・施設(8か所)	毎年	知床半島 全域	月毎/日毎	環境省
	・観光地点、登山口、遊歩道				
	・アクティビティ(観光船等)				

2) 携帯電話ビッグデータ (iii)

本業務では、携帯電話ビッグデータとして NTT ドコモの携帯電話データを用いる「モバイル空間統計」を用いて分析を行った。

使用データ	分析コード	分析内容	分析項目	属性	地理的 解像度	分析期間
モバイル 空間統計	iii-a	定量分析	旅行客数 宿泊客数 日帰り客数 平均訪問滞在日数 旅行客数の全国における順位 宿泊客数の全国における順位	総数、性年代、 居住地別	市区町村	季節単位 4季節分 春:3-5月 夏:6-8月 秋:9-11月 冬:12-2月
				総数		
	iii-b	移動分析	他旅行先別の旅行客数 吸引率	総数、 性年代別		

モバイル空間統計は、契約者の携帯電話端末から、対象者（ここでは知床地域への旅行者）の位置情報や移動行動、属性等を抽出・集計し、国内全体の人口統計に合せて拡大推計する人口統計である。豊富な契約数（国内 8,900 万台）に加え、携帯電話基地局データを用いることが特徴である。携帯電話基地局によるデータは、特定のアプリや GPS 機能を用いず、携帯電話の電源が ON になっており、かつ通信圏内であれば自動的にデータが取得できるものであり、都市部と比較し絶対的な人流の少ない地方部においても一定数のデータの確保が期待できる。モバイル空間統計によるデータの定義を表 1-2-5 に示す。

表 3-1-3 モバイル空間統計における抽出データの定義

分析期間	2023年12月～2024年11月
季節単位	冬(12月～2月)、春(3月～5月)、夏(6月～8月)、秋(9月～11月)の4季区分
対象エリア	斜里町と羅臼町と1エリアとして合算
集計方法	分析期間内ユニーク数(同一エリアにおいて、滞在期間に関わらず1人と集計)
抽出対象となる 旅行者	①対象エリアと隣接する市町村(斜里町、羅臼町、小清水町、清里町、標津町)の居住者を除く ②片道移動距離80km以上もしくは所要時間8時間以上の移動を観光客としてビッグデータから抽出
旅行客数	時間区分なく対象エリアに 2 時間以上滞在した人数
宿泊客数	対象エリアに午前2時～ 午前5 時台の夜間帯に2 時間以上滞在した人数
日帰り客数	旅行客数から宿泊客数を引いた人数
インバウンド	含まれない

本業務ではコロナ禍後における令和 3 年度実施の半島一体型コンテンツの比較をメインに実施するため、コロナ禍期間外間及び同一条件下のデータを用いる必要がある。そのため、表 3-1-4 に示した 2023 年 12 月～2024 年 11 月を分析対象とした。

表 3-1-4 2019 年と 2024 年のモバイル空間統計の分析期間

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
2018年												1 Q
2019年	1 Q	1 Q	2 Q	2 Q	2 Q	3 Q	3 Q	3 Q	4 Q	4 Q	4 Q	
2020年	コロナ禍本格化											
2021年	コロナ禍底											
2022年	コロナ禍回復基調			観光船事故								
2023年	コロナ5類移行											1 Q
2024年	1 Q	1 Q	2 Q	2 Q	2 Q	3 Q	3 Q	3 Q	4 Q	4 Q	4 Q	
2025年												

2. 2024 年における携帯電話ビッグデータから見た知床の現状

羅臼町 2024 年 10 月～11 月の観光客入込客数のデータなし。

1) 利用者数

国立公園利用者数と公園間比較

環境省自然環境局より公表されている「自然公園等利用者数調」による知床国立公園の利用者数とその推移を図 3-2-1 に示す。過去 20 年間を 6 期に分割すると、以下の傾向が指摘できる。

2000 (H12) 年 - 2004 (H16) 年 - 遺産登録前でおおむね 230 万人程度の推移。

2005 (H17) 年 - 2009 (H21) 年 - 遺産登録 (2005 年) 効果による増加により 250 万人弱まで増加するが、その後減少。

2010 (H22) 年 - 2014 (H26) 年 - おおむね 170 万人 - 180 万人水準で安定推移。

2015 (H27) 年 - 2019 (R1) 年 - 前期と同様の傾向。

2020 (R2) 年 - 2022 (R4) 年 - コロナ禍により、約 50%の減少。

2023 (R5) 年 - -アフターコロナ期を迎え、回復傾向に転換。

また、斜里町と羅臼町の比率はおおむね、7 : 3 の割合が継続している。知床国立公園の利用者数がおおよそ 180 万人とされる根拠はこれに基づくものだが、このデータは斜里町および羅臼町の観光入込数の単純合計であり、以下の課題が指摘できる。

- 両町の重複関係が考慮されていない。また、公園外の利用者数も含まれる。
- 町による観光入込数調査は、「宿泊客数」と「日帰り客数」とを調査しているが、「日帰り客数」は交通量調査等に基づく推定であり、精度に課題がある。

ただし、国立公園を対象とした長期かつ比較可能なデータは限られていることに鑑みると、長期傾向を把握する指標として一定の有効性があると考えられる。

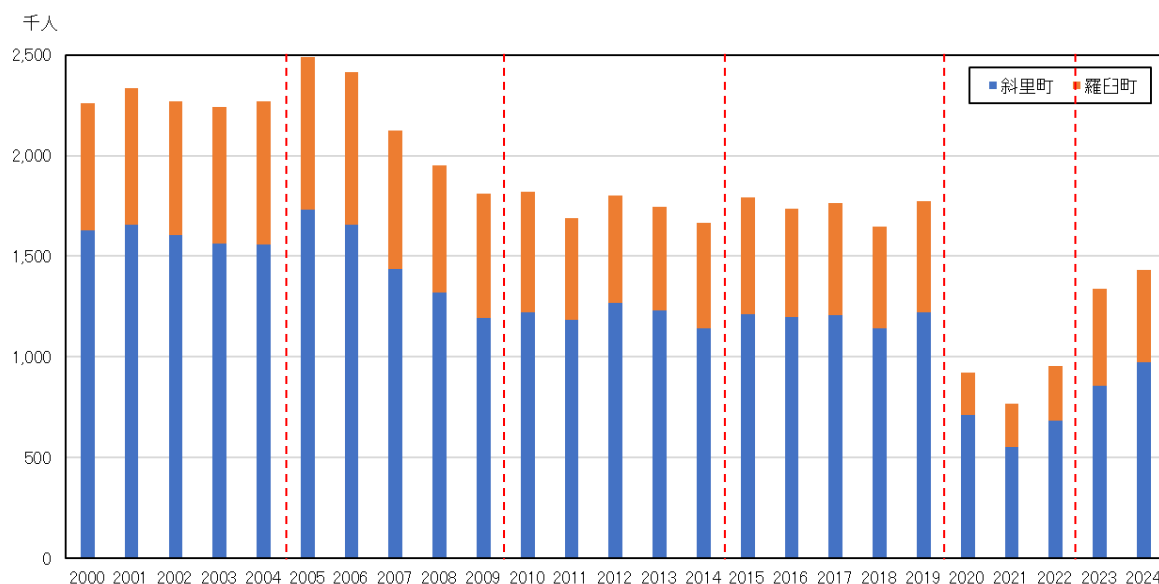


図 3-2-1 斜里町及び羅臼町の観光入込数の年推移 (2000-2024)

宿泊客・日帰り客の内訳と関係性

過去 10 年間の利用者数を宿泊・日帰りの別に分け、斜里町と羅臼町の割合を示した（図 3-2-2）。2024 年の宿泊客数はおよそ 39 万人であり、斜里町の 35 万人（91%）に対し、羅臼町の 4 万人（9%）と圧倒的に斜里町の占める割合が高い。また、このデータは宿泊施設の報告に基づく実数のため信頼性が高く、両町の重複関係も想定されない。一方、日帰り客数はおよそ 105 万人程度で推移しており、斜里町の 62 万人（59%）に対し、羅臼町が 43 万人（41%）とこちらも斜里町の割合が高い。ただし、これらは推定の信頼性が低く、重複するデータであることは前述した通りである。

直近の 2024 年を対象に、観光客入込客数調査（i-a）の結果とモバイル空間統計（iii-a）とを比較したのが図 3-2-3 である。観光統計による 144.8 万人に対し、携帯電話ビッグデータのそれは 40 万人とおおよそ 3.6 倍の差異が発生した。宿泊客数は比較的差異が少なく、ビッグデータにインバウンドや 15 歳以下のデータが含まれていないことを想定すると、ほぼ同水準の結果に収まるものと考えられる。一方、日帰り客による差異は 6 倍以上と顕著に大きい。これは、携帯電話ビッグデータの特性（通過利用はカウントされないなど）や抽出基準により、過小に評価されている要因と、既存統計が過大に評価されている要因の両者が指

摘できる。両者のデータ特性を表 3-2-1 にまとめた。いずれにしても、実態把握や目標設定においては、宿泊客数を主眼に検討することが適当と考えられる。

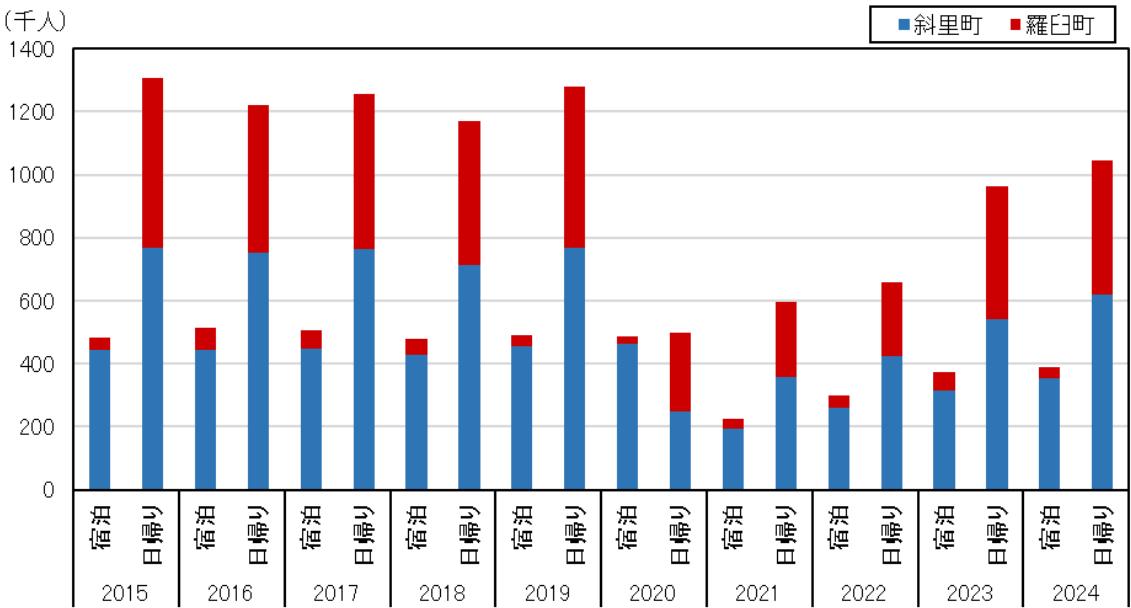


図 3-2-2 日帰り客数と宿泊客数の町別内訳 (2015-2024)

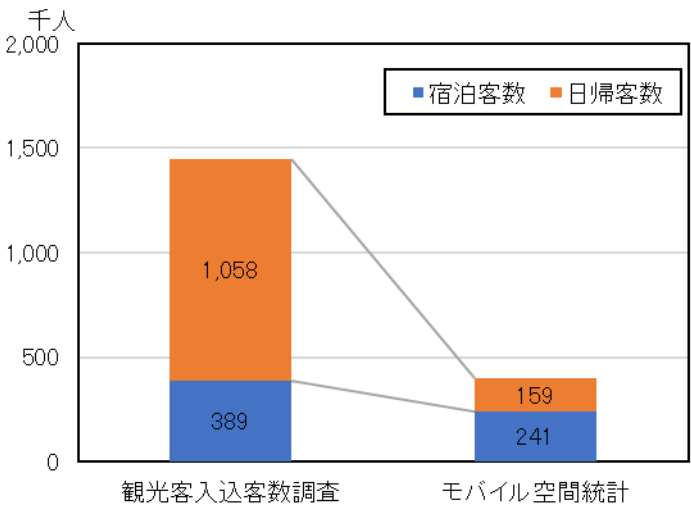


図 3-2-3 観光客入込客数とモバイル空間統計の比較 (2024)

表 3-2-1 観光客入込数調査とモバイル空間統計のデータ特性

	i-a 観光客入込数調査	iii-a モバイル空間統計
＋要因	・斜里、羅臼が一部重複してカウント(日帰り) ・実測データでなく、過大推定の可能性(日帰り) ・インバウンド、地元利用者も含まれる(宿泊)	・キャンプや車中泊が含まれる(宿泊者)
－要因		・インバウンドおよび15歳以下は含まれない ・地域住民、隣接住民の利用者は除外 ・2時間以下の滞在、通過型利用は除外(日帰り) ・圏外のデータはカウントされない

季節性

2019 年の 1 年間について、斜里町と羅臼町それぞれの月別の入込み客数を宿泊と日帰り別に示した(図 3-2-4, 図 3-2-5)。宿泊客数は、両町とも 2 山型の共通パターンが見られる。いずれもピークは 8 月であり、年間の宿泊客数に対する割合は、斜里町の 16.7%に対し、羅臼町のそれは 22.5%であり、羅臼町の方がピーク時の割合が高い。日帰り客について、斜里町はピーク時に顕著に偏る一方、羅臼町は上下幅が狭く分散されていた。

両町の宿泊客数の季節変動について、観光客入込数調査(i-a)の結果とモバイル空間統計(iii-a)とを比較した結果が図 3-2-6 である。絶対数の差異はあるが、年変動のパターンはほぼ一致し、特に夏季の入込みが全体の 40%程度であった。

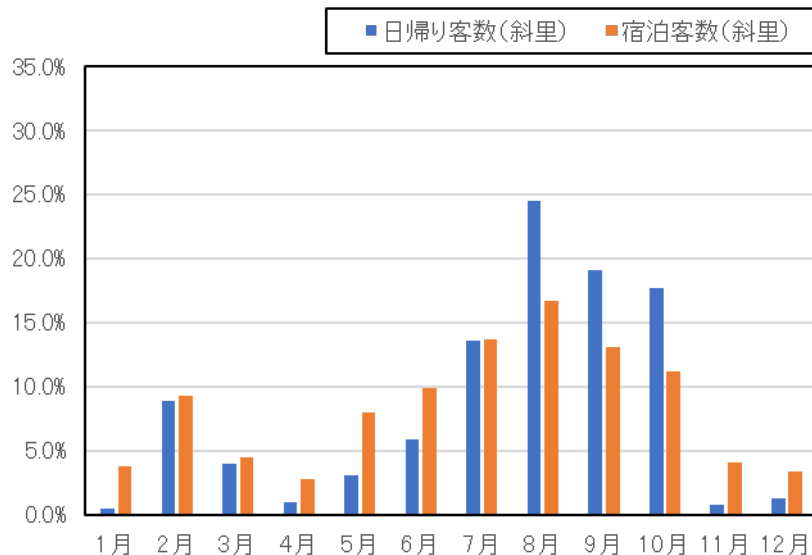


図 3-2-4 斜里町観光客入込数調査における月別入込み割合(2024) , i-a

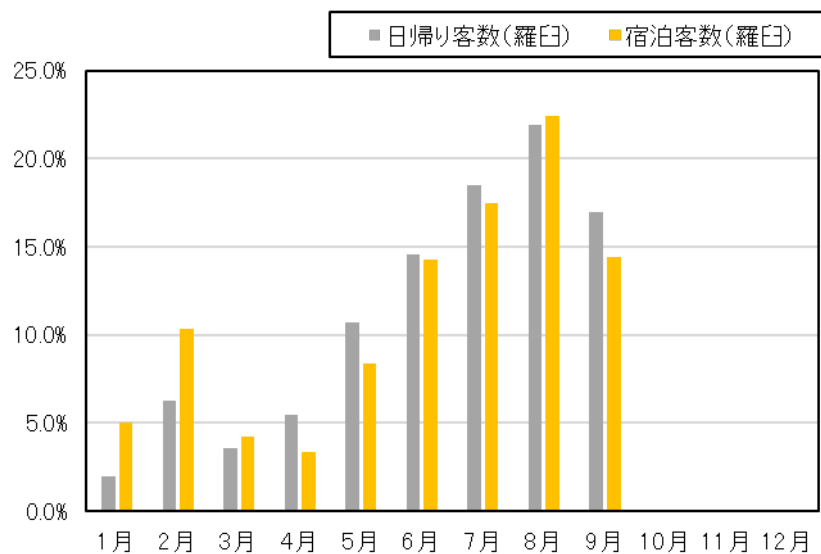


図 3-2-5 羅臼町観光客入込客数調査における月別入込み割合 (2024) , i -a

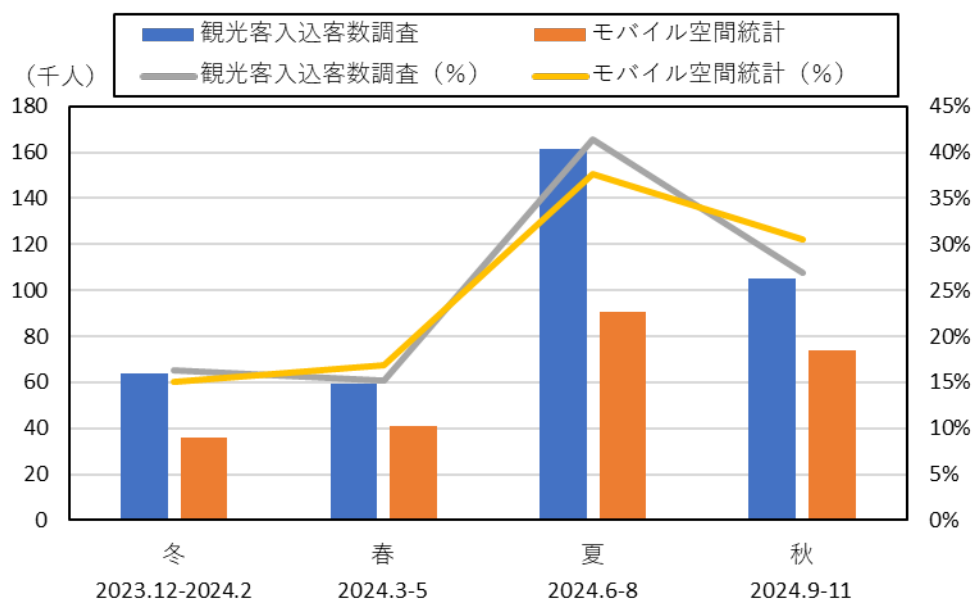


図 3-2-6 観光客入込客数調査とモバイル空間統計の季節変動比較 (2024, 宿泊客数ベース)

2) 利用者の属性

本項では、携帯電話ビッグデータによる分析結果と観光統計データを組み合わせ、性別や年齢層、インバウンドを含む居住地、旅行形態（個人・団体）についての把握を行う。

性別及び年齢層

モバイル空間統計の定量分析（iii-a）により、季節毎の男女比率を把握した（表 3-2-2）。宿泊客の男女比はほぼ同率である。一方、日帰りを含む旅行者全体においては、男性の比率が顕著に高い。これは、運送業や建設業を含むビジネス客が高い割合で含まれているためと考えられる。そのため本項では、宿泊客のデータに着目した分析を行う。

季節毎の宿泊客について、男女比別の年齢層の分布とその割合を示したのが図 3-2-7、図 3-2-8 である。いずれの季節においても男女の年齢構成はほぼ同様の傾向であり、最も多い年齢層は 50 代であった。続いて 60 代・40 代・30 代が多く、宿泊客に占める 50 歳代以上の割合は 50%以上を占めた。

表 3-2-2 モバイル空間統計による季節ごとの男女比率（2024）

	日帰り客数		宿泊客数	
	男性	女性	男性	女性
冬(2023.12-2024.2)	73%	27%	52%	48%
春(2024.3-2024.5)	63%	37%	50%	50%
夏(2024.6-2024.8)	59%	41%	52%	48%
秋(2024.9-2024.11)	65%	35%	57%	43%

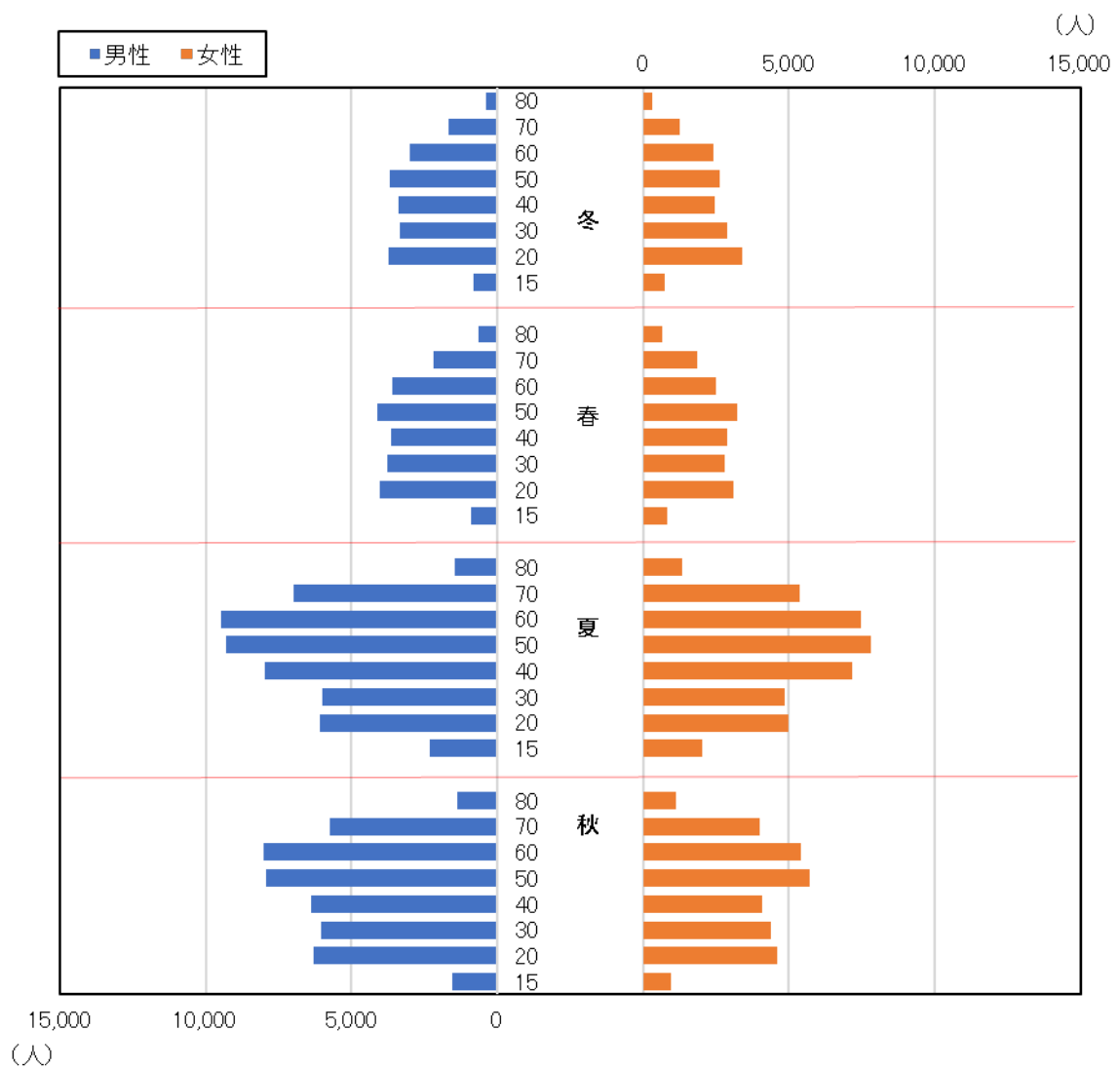


図 3-2-7 モバイル空間統計による季節ごとの宿泊客の男女比別年齢層 (2024)

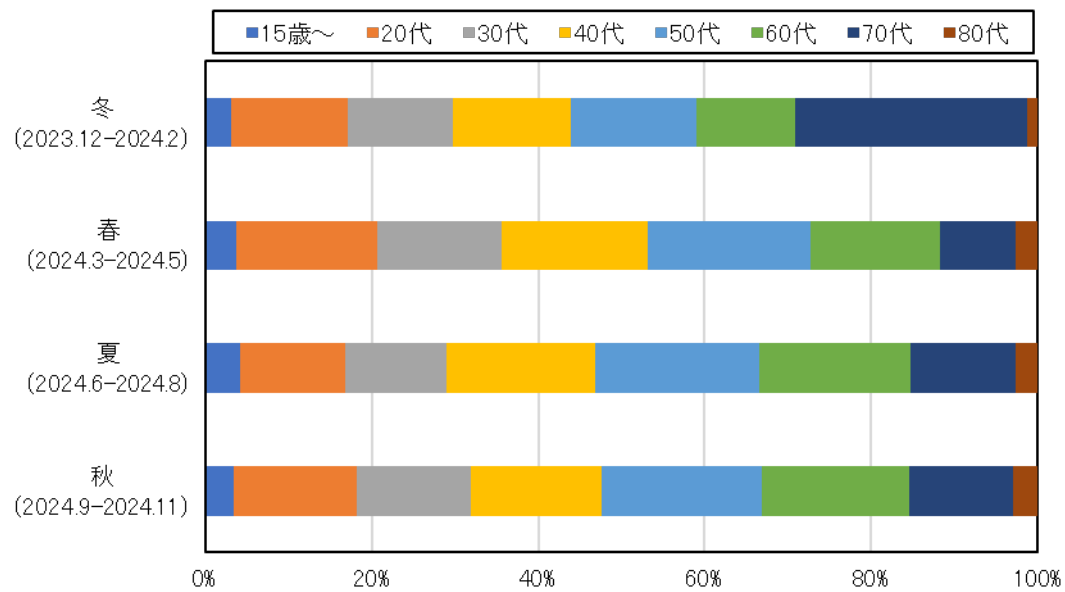


図 3-2-8 モバイル空間統計による季節毎の宿泊客の年齢層の割合（2024）

居住地

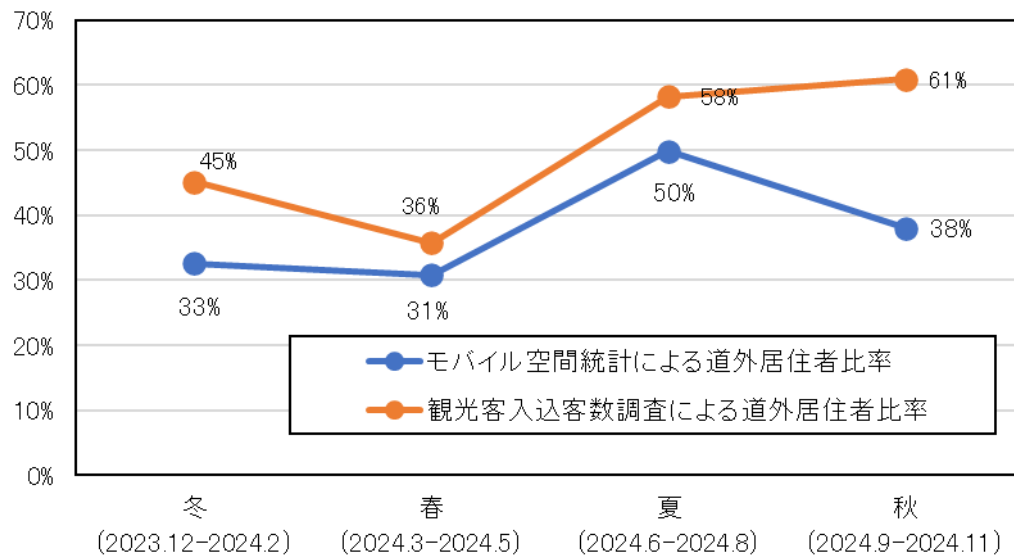


図 3-2-9 季節毎の入込客の道外居住者の割合（2024，宿泊客数ベース）

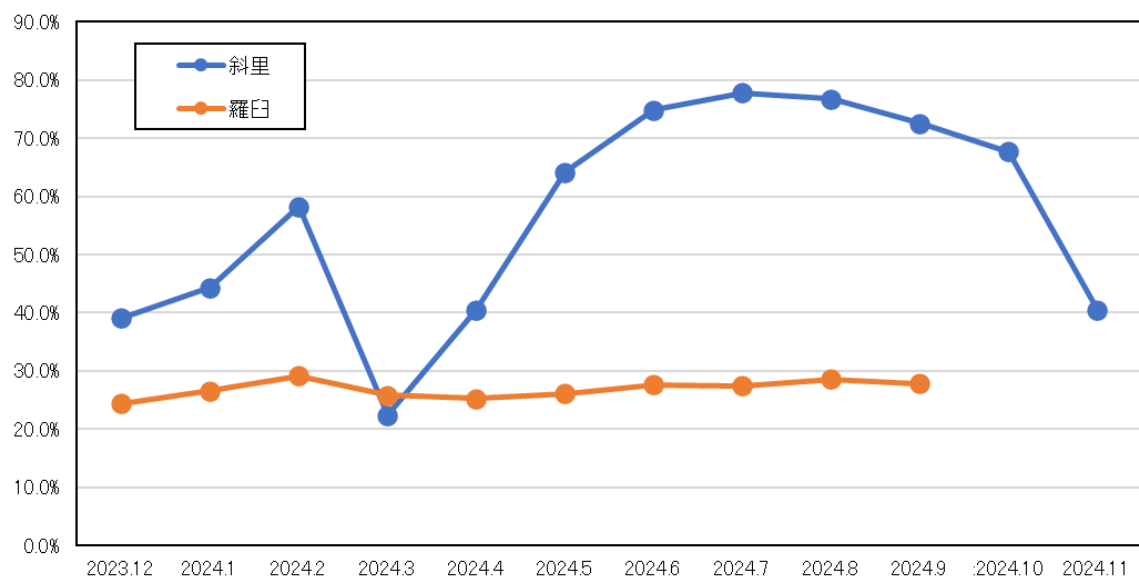


図 3-2-10 観光客入込客数調査による月別の道外居住者の割合 (2024, 宿泊客数ベース)

表 3-2-3 モバイル空間統計による都道府県別の居住地データの上位 15 位 (2024, 宿泊客数ベース)

	2023/2024冬		2024春		2024夏		2024秋	
1	北海道	67.4%	北海道	69.2%	北海道	50.1%	北海道	62.0%
2	東京都	8.9%	東京都	7.6%	東京都	10.8%	東京都	8.6%
3	神奈川県	4.7%	神奈川県	4.1%	神奈川県	6.1%	神奈川県	4.8%
4	埼玉県	2.6%	埼玉県	2.4%	大阪府	3.9%	埼玉県	3.0%
5	大阪府	2.4%	大阪府	2.3%	埼玉県	3.6%	大阪府	2.8%
6	千葉県	2.3%	千葉県	2.1%	千葉県	3.3%	千葉県	2.6%
7	愛知県	2.2%	愛知県	1.6%	愛知県	3.1%	愛知県	2.1%
8	兵庫県	1.4%	兵庫県	1.2%	兵庫県	2.4%	兵庫県	1.5%
9	福岡県	0.9%	静岡県	1.0%	静岡県	1.0%	静岡県	0.9%
10	静岡県	0.7%	福岡県	0.9%	京都府	1.0%	京都府	0.9%
11	茨城県	0.6%	広島県	0.6%	福岡県	0.9%	福岡県	0.8%
12	京都府	0.5%	京都府	0.6%	茨城県	0.9%	茨城県	0.7%
13	岐阜県	0.4%	茨城県	0.5%	宮城県	0.8%	広島県	0.6%
14	沖縄県	0.3%	長野県	0.4%	広島県	0.8%	宮城県	0.6%
15	三重県	0.3%	栃木県	0.3%	長野県	0.7%	群馬県	0.5%

インバウンド（訪日外国人観光客）

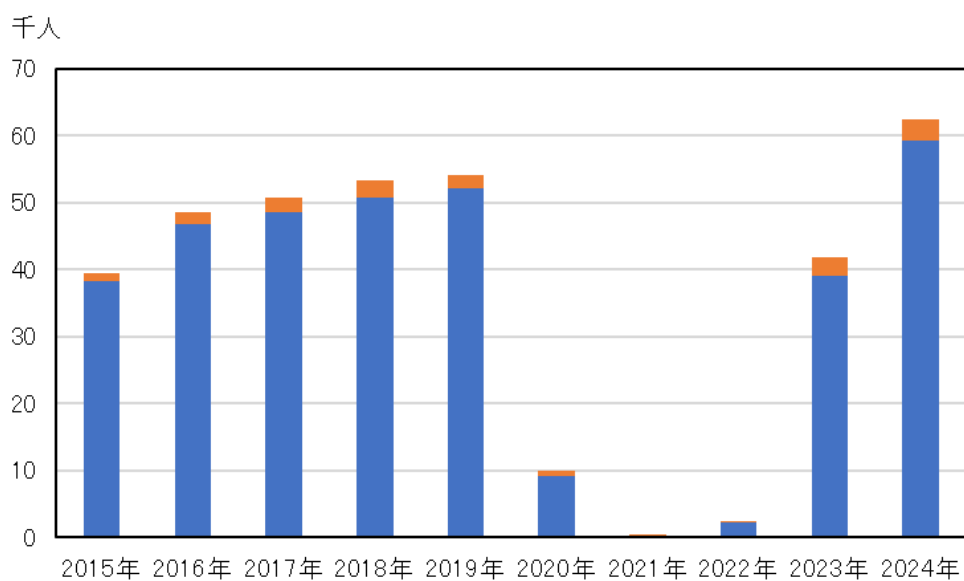


図 3-2-11 年別インバウンド来客数

3) 利用形態と行動

滞在日数

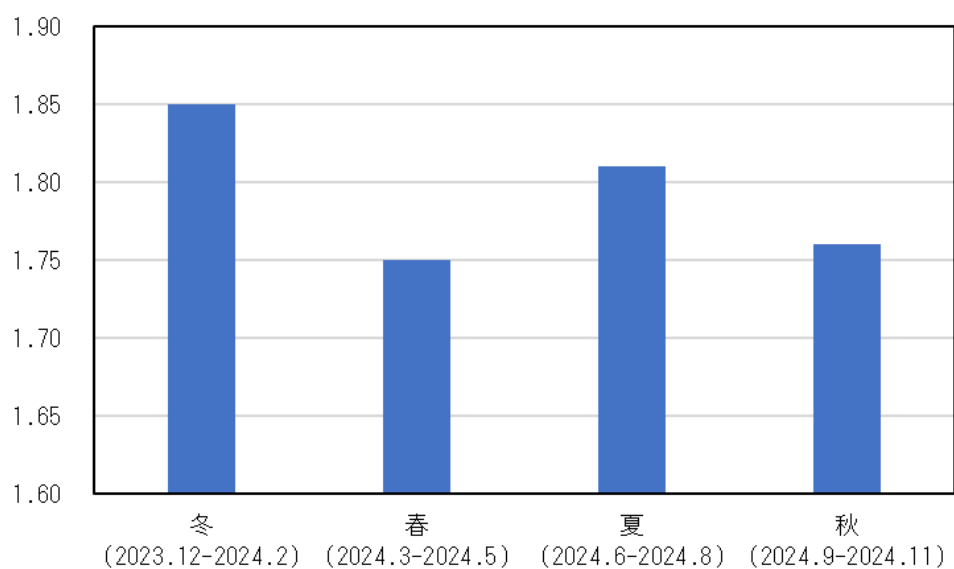


図 3-2-12 季節別平均滞在時間（2024）

他地域からの吸引率と他地域への旅行客数

表 3-2-4 モバイル空間統計による他旅行先別吸引率の上位 20（2024）

	2023/2024冬		2024春		2024夏		2024秋	
1	北海道 清里町	22.0%	北海道 清里町	22.0%	北海道 清里町	37.0%	北海道 清里町	29.0%
2	北海道 大空町	21.0%	北海道 大空町	19.0%	北海道 大空町	36.0%	北海道 大空町	29.0%
3	北海道 網走市	17.0%	北海道 弟子屈町	18.0%	北海道 弟子屈町	35.0%	北海道 弟子屈町	29.0%
4	北海道 弟子屈町	15.0%	北海道 標津町	17.0%	北海道 網走市	27.0%	北海道 標津町	25.0%
5	北海道 標津町	15.0%	北海道 網走市	15.0%	北海道 標津町	26.0%	北海道 網走市	22.0%
6	北海道 小清水町	13.0%	北海道 小清水町	13.0%	北海道 根室市	20.0%	北海道 小清水町	16.0%
7	北海道 鶴居村	12.0%	北海道 根室市	10.0%	北海道 小清水町	19.0%	北海道 根室市	14.0%
8	北海道 標茶町	10.0%	北海道 中標津町	8.0%	北海道 中標津町	14.0%	北海道 中標津町	11.0%
9	北海道 別海町	8.0%	北海道 別海町	7.0%	北海道 別海町	12.0%	北海道 別海町	9.0%
10	北海道 中標津町	8.0%	北海道 鶴居村	5.0%	北海道 標茶町	12.0%	北海道 標茶町	8.0%
11	北海道 上川町	7.0%	北海道 標茶町	5.0%	北海道 厚岸町	11.0%	北海道 釧路市	8.0%
12	北海道 紋別市	5.0%	北海道 厚岸町	5.0%	北海道 釧路市	11.0%	北海道 津別町	8.0%
13	北海道 根室市	5.0%	北海道 上川町	4.0%	北海道 浜中町	11.0%	北海道 厚岸町	7.0%
14	北海道 北見市	4.0%	北海道 北見市	4.0%	北海道 上川町	9.0%	北海道 浜中町	7.0%
15	北海道 釧路市	3.0%	北海道 釧路市	4.0%	北海道 鶴居村	8.0%	北海道 北見市	7.0%
16	北海道 津別町	3.0%	北海道 津別町	4.0%	北海道 北見市	8.0%	北海道 上川町	6.0%
17	北海道 佐呂間町	3.0%	北海道 遠軽町	4.0%	北海道 足寄町	8.0%	北海道 鶴居村	6.0%
18	北海道 遠軽町	3.0%	北海道 浜中町	4.0%	北海道 えりも町	8.0%	北海道 佐呂間町	6.0%
19	北海道 雄武町	3.0%	北海道 湧別町	4.0%	北海道 津別町	7.0%	北海道 足寄町	5.0%
20	北海道 厚岸町	3.0%	北海道 足寄町	4.0%	北海道 佐呂間町	7.0%	北海道 えりも町	5.0%

3. 2019 年度との比較

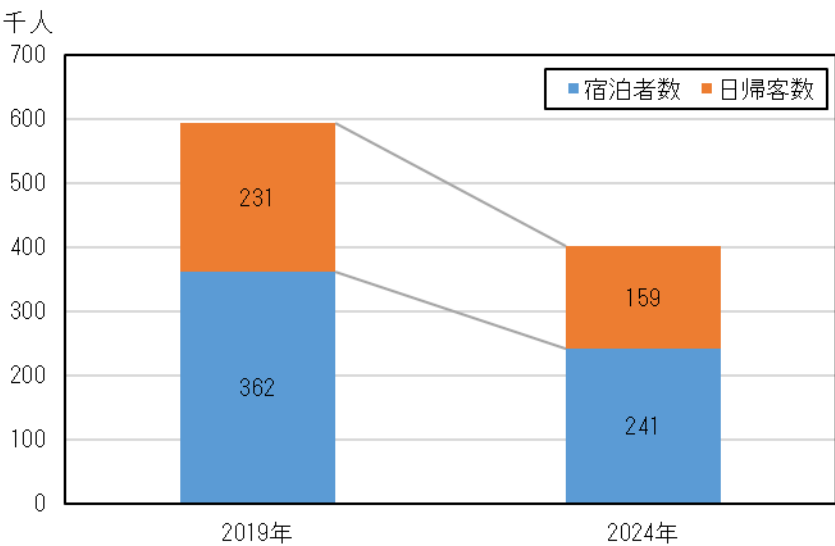


図 3-2-13 2019 年と 2024 年のモバイル空間統計から見た入込数の変化

第4章 業務実施計画の作成及び打ち合わせ記録

本業務を実施するにあたり、業務の目的、業務実施の基本方針、業務内容、業務の実施方法を定めた、業務実施計画書(巻末資料 4-1)を作成し、環境省担当官へ提出した。

また、業務を行うにあたり担当官との打ち合わせを、8月29日、9月9日、9月17日、11月15日、11月26日の計5回実施した。業務打ち合わせでは、事業全体の仕様確認・説明、事業の進め方、スケジュール感、観光庁事業との連携調整、各業務の着手順番、担当者について共有、WSの規模と関係者の選定、WSの振り返りと今後の進め方について協議を行った。とりまとめた、各打ち合わせ記録は巻末資料 4-2 に収録した。

表 4-1 打ち合わせ記録

打ち合わせ	開催概要	議事次第
第1回	日時：2024年8月29日（木） 場所：知床世界遺産センター会議室	1. 業務全般について 2. 観光庁事業との連携について 3. 各業務の着手順番、担当者について
第2回	日時：2024年9月9日（月） 場所：羅臼町役場会議室	1. 計画の全体イメージと利活用の方向性 2. 直轄施設整備と補助金活用 3. 役割分担と計画の具体化 4. 作業部会およびワークショップ（WS）の人選 5. WSの規模と関係者の選定
第3回	日時：2024年9月17日（火） 場所：知床世界遺産センター会議室	1. IP計画策定について 2. エコツーリズム戦略の見直しについて 3. 来訪者分析について
第4回	日時：2024年11月15日（金） 場所：知床世界遺産センター会議室	1. 第1回WSの準備状況 2. 当日のロジスティクス 3. WSの進行、内容、資料等について 4. 今後の予定について
第5回	日時：2024年11月26日（火） 場所：知床世界遺産センター会議室	1. 作業部会第2回について 2. 今後の役割分担 3. 今後のWSについて 4. 観光庁事業について（柿沼氏より共有） 5. IPについて 6. 日程調整

環境省 北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所 請負事業

事業名：

令和 6（2024 年度）知床国立公園知床エコツーリズム戦略改訂等及び
知床の魅力あるストーリー検討業務

事業期間：令和 6（2024）年 8 月 23 日～令和 7（2025）年 3 月 21 日

事業実施者：公益財団法人 知床財団

〒099-4356 北海道斜里郡斜里町大字遠音別村字岩宇別 531
知床自然センター内



リサイクル適正の表示：紙へリサイクル可

この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料[A ランク]のみを用いて作製しています。